

元久公 自應永二年
伊久公 至同六年

前 舊記雜錄 卷卅一

535 「國史 久哲公 恕翁公」

二年乙亥春正月十八日、恕翁公以鹿兒島郡長谷庭村水田、爲福昌寺寺領、世復其民、無有所與、據恕翁公舊譜、宿村爲福昌寺領、應永六年寄進狀云、於長谷庭立福昌寺、則長谷庭即長谷場也、初立福昌寺禁牌、同、二月二十七日、恕翁公使波見太郎領岩切舊領求二郷之地、上、澁谷氏盤踞東郷・高城・入來・那答院之地、號稱山北四族、應安以來、又結探題今川了俊爲援、崛強難制、同、齡岳公時有鶴田某者、私爲內應、公因之、乃將兵擊澁谷氏、同、麥刈・牛屎遺衆救之、公戰不利、引兵而還、澁谷氏大發輕卒尾擊之、式部彥七・本田彌七死、當時號爲

山引合戰、據齡岳公舊譜、山田聖榮自記、東郷氏居東郷、高城氏居高城、入來院氏居入來院、那答院氏居那答院、皆稱澁谷氏、是時公所擊者不詳、山北謂入來山之北、山引猶云嶺山而遷、山蓋入來山、島津支流系圖山田氏譜、式部彥七名忠繁、島津加賀守忠經次子、及 久哲公之徒碇山城也、遣本田信濃守忠親、請 恕翁公、欲共擊澁谷氏、公辭以梶山城之難、今川貞兼圍梶山城事見去年、梶山城圍已解、久哲公復請於 恕翁公、秋八月十日、久哲公引兵屯橫峯、以逼高城、據恕翁公・久哲公舊譜、應永記、信濃守氏親之孫、因權守親治之子、初名元親、然細考本末、元親、忠親、似是二人、其說見下十六年、橫峯在水引郷地頭館北十五町餘、係五代、幕府召今川貞世於筑紫、十六日、大友親世遣 久哲公書曰、今川殿已去博多、狼狽依千葉氏及少貳・菊池等、二十三日、久哲公報親世書曰、島津氏受命幕府、與少貳・大友爲同盟國、今川殿之爲探題也、詐召少貳冬資於水島而殺之、將置吾二人於何地乎、既又扇動我叛人、蕩搖我邊疆、何其寇之深也、今聞得罪於幕府、私心竊喜、據久哲公舊譜、貞世爲探題二十餘年、筑紫人多怨者、故 公書云爾、據恕翁公舊譜、恕翁公將擊澁谷氏、二十八日、禱於諏方社、同、先遣新納某・和泉某如橫峯、謂 久哲公曰、吾自鹿兒島出師向高城、不便、若君徑造山田軍高牧、則樋脇・前田・市比野等、不得城守、於是自鹿兒島歷吉田、踰蒲生、徑造清敷、與君共夾擊之、蔑不捷矣、久哲公問諸市來忠家、忠家亦以爲然、冬十二月、移軍於山田、據恕翁公舊譜、久哲公

舊譜、應永記、山田屬薩摩郡、高牧在山田鄉地頭館東北二十餘町、樋脇城遺城在樋脇地頭館西南十町許、前田城遺城在樋脇地頭館東南二十町許、並係峯之原村、市比野、城遺城在樋脇地頭館南一里二十二町許、保市比野村、和泉某者、蓋和泉式部少輔久親也、久親父曰能登守氏儀、氏儀父曰右衛門兵衛尉

忠直、忠直父曰下野守忠氏、忠氏者、道義公次子、爲

薩摩和泉莊地頭職、因以爲氏、又爲丹後田邊莊、肥前松

浦莊早湊村地頭職、與高師泰、齋藤利泰、俱爲侍所奉行、

道鑑公宴幕府於邸、設百度笠掛會、忠氏及高師冬、發矢

九十六、皆中的、其餘或九十、或八十、高師直之圍幕府

於近衛東洞院第也、忠直與四郎左衛門尉時久踰垣而入上

食、事見第六卷貞和五年、忠直始名忠賴、道鑑公擊谷山郡司平忠高、軍波平、

忠高使其弟祐玄率兵守牛落柵、截我軍後、忠直自出水引

兵救、公、既至青屋松原、忠直單騎而進、徑造牛落柵、

大呼曰、祐玄、與汝獨身決戰、祐玄挺身而出、與忠直馬

上相搏、忠直卒擒祐玄、麾衆而進、拔牛落柵、至波平、

與、公會、忠直後事征西將軍宮於豊後、氏儀、久親皆居

豊後、齡岳公嘗謂、怨翁公曰、不可使和泉氏無後於國、

必召之、時忠直、氏儀已死、怨翁公乃召久親於豊後、賜

之求仁鄉深川村合百町地、據道鑑公、怨翁公嘗謂、島津支流系圖、

山田聖業自記、和泉莊即出水郡地、然出水、長島、野田、高尾野、阿久根五鄉、今屬出水郡、而古者野田、高尾野、山門院、阿久根稱莫福院、則當時言和泉莊者、出水、長島二鄉而已、郡村高辻帳、長島村本在出水鄉、明曆中建爲一鄉、而屬出水郡、波平、屬谷山鄉福元村、在鹿兒島南二里許、牛落、在鹿兒島南一里十八町波平

北半里、今名牛掛、青屋松原在牛落北三町、其地名青屋村、緋海多松林、

536 「正文在福昌寺」

奉寄進

薩摩國鹿兒嶋郡長谷庭村門前水田寄進福昌寺事、但坪付

別紙在之

右、彼寺領者、元久重代相傳所領也、仍奉寄進福昌寺事、

令免除万雜公事上者、至子孫寺家不可懸煩、寄進狀如件、

應永貳年乙亥正月十一日

元久(花押)

「元久公御譜中ニ在リ」

「正文在福昌寺」

(元久)
(花押)

制札

於福昌寺條之事書

一 寺山竹木不可伐、後境谷、

一 寺山不可爲殺生、放鷹入寺山不可取、

一 於門前河不可爲殺生、境目懸、

右、於此条々、若違背輩可處罪科者也、仍制札如件、

應永貳年乙亥正月 日

538 「皇德寺文書」

寄進

谷山郡山田村鳩屋内牧田字都のものと一段三丈

右、此所者、給恩之地也、然依爲寺近所、於皇德寺所奉寄進也、仍狀如件、

應永貳年二月九日 忠藤(花押)

539 「恕翁公御譜中」

一北郷讚岐守義久息男兄弟已於梶山遂戰死、五男入寺院爲喝食、元久使之還俗、加冠以稱知久、昇號鶴戸丸之寶刀、令續北郷之統矣、應永十七年庚寅、元久在洛之際、將軍家義持渡御于元久之館、于時知久遂拜禱、任中務少輔也、

540 「全」

一相良某誇武威、當犯隣國之時、北原氏屬于球麻、故相良之弟祐賴在德滿城、丁此之時、祐賴與北原氏、忽起口論刺違、而各死矣、由是相良氏與北原氏相爲氷炭、

北原之息男改前非請援於元久、渠之改非、則不忍聞其急難、而使多勢向其地、相良之兵悉以攻退、眞幸一院爲北原之領土、簡羽野元來愛甲某之所居也、

541 「正文有之」

御吉兆申舊了、抑一昨日、以御使節蒙仰候田邊田村事、當年一作過候者、自下地彼方へ可遣候、聊不可有等閑之儀候、恐々謹言、

二月廿六日 守久(花押)

御屋形

「元久公御譜中ニ在リ」

542 「元久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋」

求二郷内岩切跡事、注文別紙在之爲給分所宛行也、任先例、可被領掌之狀如件、

應永二年二月廿七日 元久(花押)

波見太郎殿

543 「元久公御譜中」

〔在小林衆大脇民部左衛門〕

伊東殿(給安)鹿兒嶋江參上之時

犬追物手組 應永二年 二月廿九日

伊東殿

嶋津越前守

伊東伊豆守

嶋津修理亮(久忠)

湯地五郎四郎

嶋津殿(元久)

検見

嶋津上野入道

544 「正文在川上志摩家」〔可吟味事〕

應永二年二月廿九日犬手組之事

伊東殿 十一疋

嶋津越前守 十疋

伊東伊豆守 同

嶋津修理亮(久忠) 十一疋

湯治五郎四郎 五疋

殿(元久) 廿一疋

嶋津又三郎

稻津弥次郎

嶋津弥三郎

野村源五(元久)

鹿野屋周坊介(元久)

伊東遠江守

嶋津又三郎 五疋

稻津弥二郎 三疋

嶋津弥三郎 四疋

野村源五郎 二疋

鹿屋周防介 同

伊東遠江守 十一疋

検見

嶋津十郎左衛門入道

〔紙キレ見ヘス〕

喚次

545 「元久公御譜中」

「正文有之」

五人面々、今度粉骨之由、令披露候之間、即被下 御書候、并御釵被遣候、御面目之至目出候、定而御祝着候哉、尚々今度御忠節異于他候、如何様於向後連々可申入候、毎事不可存疎略候、御同心候者、可爲恐悦候、併期後信候、恐々謹言、

卯月十五日

播磨守滿政(花押)

謹上 嶋津陸奥守殿(元久)

546 「伊集院圓通庵文書」〔伊集院大隅守久氏譜中ニ在リ〕

讓与

南郷之内こくれうの門水田一町三段の内あまミタニ反 井居加定

屋敷園一所之事

右、件の田園之事、觀了重代相傳の所領たる間、心さしをもつて [] 一期の程たのさまたけなくちきやうあるへく候、いさゝかかの在所ニおいて、いらんわつらひ

をなすへからす候、仍爲後日狀如件、

應永二年六月十八日

(伊集院久氏
沙弥觀了(花押))

547 「忍翁公御譜中」

一上總介伊久前如所言、應永二年乙亥八月十日、欲犯高城之城、構陣營於橫峯、雍除作毛之際、元久使新納氏・和泉氏、往高城陣談澁谷退治之道曰、欲率日隅二州之騎歩、到其地增勢、爰有不慊我心者、匪啻經遠路越山中、有大川之不可徒渡、而無軍衆之可往還渡舟、我之所以願者、發軍衆於山田、築陣營於高牧越年、而向于樋脇・前田・市比野、則端城悉以不得警衛乎、俟其變得佳期、從吉田・蒲生越一之山、直入于入來、則其勞少其功大乎、伊久隨此議、而同十二月、構一陣於高牧、徒越年矣、

548 「伊久公御譜中」

應永二年乙亥八月十日、伊久發向於高城、構陣營於橫峯、作毛悉以拂除矣、當此之時、元久使新納某・和泉某、來于高城之陣、澁谷退治之道曰、引率日向・大隅之騎歩、欲到其地增軍勢、然則爰有不慊我心者、匪啻經遠路越山

中險路、有大河之不可徒渡、所以小舟之可乘者亦少矣、

是亦所往還之不易也、吾所以願者、發向山田構陣營於高牧、越年而向樋脇・前田・市比野、則端城悉以不得堅守、待其佳期、自吉田・蒲生越一山攻入來、則半其勞而屬手裏必矣、於茲伊久談件之旨趣於市來備後守忠家、忠家亦同此謀矣、是以定其議也、當此時也、大友修理大夫親世贈八月十六日書簡於久哲、其文曰、

往言集ニ有之、

今川殿上洛、博多逗留事云々、左ニアリ略ス、

八月十六日

親世在判

久哲返書

今月十六日御狀、同廿二日到來云々、末ニアリ略、

八月廿三日

前上總介伊久在判

謹上 大友殿

御返事

549 「全上」

陸奥守元久亦返書之趣同意也、

550の1 「應永記」

一同二年乙亥八月十日、總州高城ニ押寄、而横峯ニ御陣

ヲ被召、所務ヲ被拂畢、懸ル處ニ奥州ノ御使者新納殿・

和泉殿兩人有着陣、其意趣者、高城之夏、日向・大隅

之軍勢爲遠所上、云山、云河、征路之往復大綱ニ候、

山田ニ打寄テ高牧ニ被召大陣、年明テ樋脇ノ前田ト市

比野ニ發向被成候者、彼ノ端城共不可潰、其時吉田・

蒲生ヨリハ山一ツ隔候、尤入來之事ハ可輒候ト此儀ニ

定也、然處ニ大友殿書狀到來ス、其文ニ云ク、

550の2

今河殿上洛、博多ニ逗留之事難叶候之由申候之間、以千

葉方之媒介、肥前ノ小城ニ被落集候、小貳、菊池奔走候、

彼一類家僕等皆一所ニ候、近日可有出津候歟、九州之大

儀一人而難計候之間、大内方遣狀候、未無返札候、落髮

之由聞得候、法名義弘ニ候之哉、就中播磨守對奥州御陣

合戰之由承候、定而不可有指事候哉、恐々謹言、

〔応永二年乙亥〕
八月十六日

〔大友〕
親世在判

謹上 嶋津殿

〔南山巡狩ニハ、嘉慶元年、大友ト大内介トヨリ足利義滿ニ了俊ヲ譏

言セシ故召返サレ、澁川左近將監義俊下向ストアリ〕

550の3

〔總州ノ御返狀ニ云ク〕

今月十六日ノ御狀同廿二日ニ到來、謹拜見候、抑今河殿

上洛之夏承、悅無極候、如御存知三ヶ國之凶徒等、此一

家ニ企ル隱謀叛逆ヲ之族ニ被副力ヲ被差下大將之事、御

意趣何夏候哉、鎮西下向ノ手合セ麻生山之合戰ヲ始トシ

テ、木山・所限・山崎・瀬高・北郷・河原ニ至ル迄、御

馬之口ニ不付云コトナシ、殊ニ以肥州託麻原ノ御合戰之

時ハ、舍弟三郎左衛門尉・新納ノ左近將監、御目之前ニ

而討死仕候、ケ様之忠節掛テモ被思召寄御氣色モナク、

小貳冬資事者、九州三人之可爲親昵之由、享御意處也、

而ニ於水島被討申候、依其恨歎之顔色薄、面目罷成在國

仕候、有自然之次者、元久爲先馳上リ可致御合力之由、

挿心底候之處、被成背上意上洛之事、尤以本望也、以此

首途入來發向之事、定テ可達本意候哉、當陣之事御使者

護阿弥委細可被申候、恐々謹言、

〔右ハ國分殿ノコト也〕
〔応永二年也〕

八月廿三日

前上總介伊久

謹上 大友殿

〔自奥州方茂御同心之趣〕
御返事

左ル程ニ、自奥州被仰之通市來殿ニ有御談合、忠家可然様ニ被申上ケレハ、總州御悅喜無申計、元久如御計山田ニ有勢揃、高牧ニ被召御陣有御越年云々、

551 「正文在安養院」

立願

諏方上下

右、立願之旨趣者、澁谷發向砌也、遂弓筋素懷加對治者、在國之跡、田代貳丁可寄奉也、仍寄進狀如件、

應永貳年八月廿八日

藤原元久(花押)

「元久公御譜中ニ在リ」

「正文有之」

硫黃二万五千斤到來候了、神妙候、鎧一兩淺黃絲・太刀一腰遣之候也、

九月二日

〔義滿〕
(花押)

嶋津陸奥守殿
(元久)

「伊集院巴通庵文書」「伊集院大隅守久氏譜中ニ在リ」

ゆつりたてまつる

〔南郷〕
なんかうのうちほうくわうその一所の事、くわんれうえ

いたいさうてんのしよりやうなり、しかれハ心さしある
によて、なかくさうてんの地として知行あるへく

候、仍爲後日ゆつり狀如件、

應永二年きのとののとし十一月廿日 沙弥觀了(花押)
(伊集院久氏)

「上カキニ」
「ほうくわうそのきしんしやう」

「國分澤氏文書」

(本文書ハ六三六号文書ト同文ニツキ省略ス)

「國史 久哲公 恕翁公」

三年丙子春正月十一日、久哲公下樋脇城、十三日下前

田城、十九日下市比野城、使吉永氏本補、

據應永記、本補依原文、猶云補

本領、執印久馬系圖文書、國分友成弟師稱吉永氏、領市比野、然則市比野吉永氏本領、中為澁谷氏所取、今復其舊、二月十八

日、久哲公與伊作大隅守書、使領澁谷薩摩入道重佛之

邑、與二階堂山城守行貞書、使領澁谷刑部少輔入道定順

之邑、據久哲公舊譜、伊作家譜、二階堂氏系圖、一書月日下皆曰道哲、而下書久哲公花押、明年六月五日、探題澁川右兵衛佐滿頼與大

内左京權大夫入道書、曰島津上總入道久哲、蓋公法名、初曰道哲、後改

為久哲耳、是時公方伏澁谷氏未克、而以重佛・定順舊邑與二人者、蓋豫

許之、久哲公與伊作大隅守書云云、而伊作家譜載之於大隅守克久傳、蓋以久哲公所謂大隅守為克久也、按克久始稱四郎左衛門尉、後稱大隅守、父曰大隅守久義、久義從攻清敷城、又引兵如加世田、見明年、克久逮其父時、不應稱大隅守、則是年云伊作大隅守者當是久義、此下云伊作大隅

556

「伊久公御譜中」

守、云伊作氏、倣此、而久義死於應永二十九年、克久稱大隅守、當在其後、據二階堂氏系圖、二階堂直行見上卷貞治五年、夏四月十九日、筑紫探題澁川右兵衛佐滿賴到博多、教書使 恕翁公 久哲公・大友修理亮・太宰少貳・九州地頭御家人會澁川滿賴於博多、久哲公既下三城、將伐清敷、會教書至、乃罷兵歸、據久哲公舊譜、應永記、澁川滿賴、義行之子也、據諸家大系圖、澁川義行見上卷貞治四年注、六月十七日、恕翁公與伊作氏盟書曰、同恤天下之患、共結水魚之好、有渝此言、諸神殛之、據伊作家譜、冬十一月七日、恕翁公許鹿屋周防介、以三十町之地、曰、俟山東有闕所、然後授之、據恕翁公舊譜、山東指日向州地、十二月三日、恕翁公畫福昌寺四至疆界、以為後世不侵不犯之地、同上、四至地名詳見舊譜、十一日、恕翁公以鹿兒島郡池上田園、為福昌寺領、世復其民、毋有所與、同上、

去程、任 元久之所謀之道、ナシテ發向山田、構陣營於高牧、而越年矣、應永三年丙子正月十一日、伐拂山野更關通路、今夜樋脇城委去矣、同十三日、前田城沒落也、同十九日、陷市比野城共三之城、各入守兵、而後催薩隅日三州太軍、欲赴清敷城之際、大友氏贈使書曰、四月十九日、澁川殿

557

「應永記」

為探題下著于博多也、由是被成下御教書、其上書曰、澁川右兵衛佐滿賴為鎮西探題所差下也、急有在津可合力事、可達上聞、在大友修理亮・太宰少貳・島津上總介入道・同又三郎・九州地頭御家人等中、因茲翌年之春、稱 伊久元久名代、使山城守忠朝・修理亮久豐赴博多、于時市來某中村氏・伊集院某野田氏・別符某村原氏共三輩從忠朝、吉田某花牟禮氏・平山某西郷氏・肝付某渡邊氏・既肥某南郷氏共四輩從久豐、各解纜於阿久寢、而著於肥前寺江、同國稱新山之地、而各遂對面、為伸其返禮、探題有來儀之聲、則兩輩占旅宿於田手寺、俟來格時、四月廿日、迄秉燭之時寄光駕、久豐持燭燭迎門外、忠朝躡踞庭上、探題揖兩輩、而上堂上座右座角、忠朝上座下述一禮、又下庭上請板藏殿、而後候座席、先忠朝持銚子獻盃酒、而後以探題之酌、兩輩亦飲酒矣、今夜如新山還御也、春夏秋冬各有其地、十月下旬、兩輩得暇所以歸國也、

「應永三年也」
一同丙子正月十一日、拂山被作路下、其夜ハ樋脇ノ城落

畢、同十三日、前田ノ城攻落ス、同十九日、市比野城落了、御方三城ニ取乘ケリ、「イ永吉」吉永被本補、去程三三ヶ

〔忍翁公御譜中〕

國一統シテ被率大勢之處、自大友方去四月十九日、澁河殿博多ニ下着、仍チ自京都御教書、其上書ニ云ク、澁川右兵衛佐滿頼爲鎮西探題所差下也、急キ有在津可合力夏可達上聞、有大友修理亮・大宰小貳・島津上總介入道・同又三郎・九州地頭御家人等中、依之翌年ノ春、御名代山城殿・修理亮殿自阿久根自國ニ市來ノ中村・伊集院ノ野田・別府ノ村原被屬雍州、吉田ノ花牟禮・平山ノ西郷・肝付ノ渡邊・鉄肥ノ南郷屬修理亮殿、如此償公儀給テ、同四年丁丑四月下旬云々、已下見于末、

一伊久陣高城之際、遣兩使達籌策之次序、依之應永二年十二月、構一陣於高牧徒越年矣、同三年丙子正月十一日樋脇、十三日前田、十九日市比野、三之端城没落矣乎、俟夏日催大軍欲攻清色之際、澁川右兵衛佐滿頼爲鎮西探題職下着博多也、〔二年四月十九日下知狀ニアリ〕速有可參津之命、由是、欲使弟次郎三郎久豊與山城守忠朝、稱伊久・元久兩輩之代、〔四年也〕來春赴夫津、所以攻清色之緩謀略也、

〔全〕

一今川播磨守爲大將構陣於山東曾井、由是、使新納越後守實久爲將領軍衆、到其地、對渠之陳未接干戈及合戰之際、上使下向、而先入于播磨守之陣、令兩陣停止合戰之急、而後到于志布志、元久遂對面於此地矣、和諸調議既成、所以互兩方開陣也、

〔全〕

一前探題今川伊豫法師了俊、得僧於九州之御家人不能行仁政、去邪愆爲國泰民安籌策、遂以歸京、然而不合將軍家之意、下向領國遠江、而屈居云々、

『廣濟寺文書』

奉寄進廣濟寺田畠之事、薩摩國伊集院内おりわら名之内今寺二町貳段、田藪山野之事、同山内堂地五段、藪一所并山野之事、同辻之堂あしわら七段、一所、同くさみつ松本五段、藪一所、同山野之事、〔附〕右、於彼田畠等、雖爲有久本領、爲先考景雲追膳、所奉寄進狀如件、

應永三年正月十一日

有久在判

562 『水引執印文書』

八幡新田宮奉寄進蘭之事

右、件蘭者、薩摩國高城郡内宮内五大院蘭一所、阿蘇谷久治重代相傳依爲所領、毎月觀音經八卷爲讀誦、所奉寄進也、至于子々孫々、此寄進狀可奉仰者也、仍寄進狀如件、

應永三年丙子二月十三日

藤原久治(花押)

清久在判

563 「伊久公御譜中」

「正文在田布施土三階堂三左衛門豐行」

薩摩國入來院之内、澁谷刑部少輔入道定順跡本領地事、

右、爲祈所預申候也、任先例、可被致沙汰候、仍之狀如件、

應永三年二月十八日

(伊久) 道哲(花押)

二階堂山城殿

564 「見于伊作譜」

薩摩國東郷之内、澁谷薩摩入道重佛本領地事、

右、爲祈所預申候也、任先例、可被致沙汰候、仍之狀如件、

應永三年二月十八日

(伊久) 道哲(花押)

伊作大隅守殿

「此正文、伊作家文書中ニ在リ、勝久譜中正文在卷本トアリ」

565 「見于伊作譜」

契約

一於 天下御大事者、加談合、同心仁可致忠節事、
一年來同心之儀、雖無他事候、於向後弥成思水魚、爲一味同心、御大事之時者、身大綱存、互見繼被見繼可申事、

一如此申談上者、自然雖有和讒凶害之儀、守此契之狀旨、
聞是非不可有違變事、

若此条々僞申者、

伊勢天照大神宮 八幡大菩薩 熊野三所權現

天滿大自在天神 諏方上下大明神 稻荷大明神

御罰お可罷蒙候、

應永三年六月十七日

元久(花押)

(久義) 伊作殿

「此正文、伊作家文書中ニ在リ、勝久譜中正文在卷本トアリ」

566 「正文在福昌寺」

慶嶋郡福昌寺御造築、同於寺家之御要、於元久知行分山、隨御用而可被召之候、若彼於在所申異儀輩者、其所不可知行候、爲末代所於進此狀如件、

應永三年七月廿六日 元久(花押)

「元久公御譜中ニ在リ」

567 「見于伊作譜」

於此方大儀等候、率軍勢早々越國候者、喜入候、恐々謹言、

八月廿五日

「張紙「映川左近將監致」
滿頼(花押)」

伊作大隅守殿

「此文書、伊作勝久譜中ニ在リ」

568 「元久公御譜中 正文在谷山皇德寺」

福昌寺依普請之事、谷山皇德寺々領人夫給候間、且方申入候て、於後者不可有子細由申定候了、以此狀、自然此後自公方と申候て相催候共、御出あるましく候、爲末代

且方御はんを申候了、心事期面謁之時候、恐々謹言、

八月六日

(花押)

靈用(花押)

(元久)
(花押)

皇德寺方丈

進之候

自福昌寺

靈用狀

「上書」

皇德寺坊主

進之候

569 『鹿屋氏文書』 「元久公御譜中ニアリ」

於山東關所出來時者、三十町爲給分可宛行之狀如件、

應永三年十一月七日

(元久)
藤原(花押)

鹿屋周防介殿

570 『入來臣武光氏文書』

三郎太郎伊兼

(伊久)
久哲(花押)

應永三年十一月十六日

「包紙」
武光三郎太郎殿

久哲

『入來臣武光氏文書』

薩摩國高城郡伴伊兼本知行庶子分事

一 吉枝名十九丁惣領職庶子等跡田園

一本万徳名五丁惣領職庶子等跡他人契約地

一 上村万徳名五丁田園庶子等跡

一 西尾寺々務職免田島地等

一 武光大かく入道跡上五大院島地等

宮里郷 本給分起三跡

一 武光名二町五反加流崎五反他人契約地園一所

一 つる王丸名武光大かく入道跡田園

一 清水寺々務職免田一町七反 山野等
園三ヶ所

御奉行所 (武光)
伴氏伊兼

『此文書、年間不知、伊兼應永比之人ナレハ此ニ入置』

『入來家臣宮里氏文書』

讓与

はぎの六郎太郎入道ところ

さつまのくに宮里郷くんミやうの内ひろつほ三反大坪

四至在活券、

右所領者、信正相傳知行無相違ところなり、心さしふか

『公』

奉沽却

さつまのくに宮里のかうくんミやうの内ひろつほ三反

か坪 四至

右所領者、信正相傳知行無相違地なり、然間ようく候

ニより候て、ひんかしニ付て三分一、代用途貳貫三百三

十文に、はぎとの御方ニ、限永代賣渡申候事実也、但

於御公事等者、地頭取帳のむねニまかせて候、可有勤仕

候、又於軍忠以下者、ほんミやうニかうす、仍爲後證沽

券狀如件、

應永三年のえね十一月廿七日 信正(花押)

「正文在福昌寺」

於福昌寺四至堺定置事

一限東 とろきの田縁をくたり前河まで、

一限南 池の上之後の小溝くたり、

一限西 千手堂之上山のめんとをり内丸の田縁のほりさ
いはらまで、

一限北 寺之後かなめか山の田縁くたり、

爲末代、定置所之狀如件、

應永三年丙子十二月三日

〔御譜中ニ在リ〕
陸奥守元久(花押)

575 「正文在福昌寺」

奉寄進

薩摩國麿嶋郡坂本内池上田島事 〔御譜ニハ坂下ニ作ル、非也、坪付在別紙〕

右、彼所領者、元久重代相傳所領也、然依有志願、所奉
福昌寺永代寄進也、若於此所爲違乱輩者、不可爲元久子
孫、次萬雜公事諸役等悉停止之者也、仍爲後代寄進狀如
件、

應永三年丙子十二月十一日 元久(花押)

〔元久公御譜中ニ在リ〕

576 「廣濟寺文書」「伊集院頼久譜中ニ在リ」

奉寄進田島之事

薩摩國伊集院大田名内松脇五段并進月庵跡之園一ヶ

所者

右、彼在所者、爲養父母了念禪門・眞光禪尼之追躰、限

永代奉寄進廣濟禪寺、因頼久加判之上者、所可停止萬雜

公事也、特於久勝子孫不可致違乱、仍寄進狀如件、

廣濟寺衣鉢侍者禪師

應永三年丙子十二月廿六日

〔頼久弟、大田伊守久勝コトナラン〕
藤原久勝(花押)
〔加判〕
藤原頼久(花押)

577 「國史 忍翁公 久哲公」
義天公

四年丁丑夏四月九日、忍翁公定福昌寺畫一法者數條曰、

後世有易此法者、非吾之子孫也、〔據忍翁公舊譜〕 忍翁公遣 義天

公、久哲公遣次子山城守忠朝爲名代、之博多、〔據忍翁公・久哲公舊譜、應永記、是時二公方謀伐清敷、故〕 義天公・忠朝自阿

久根乘舟而北、至肥前寺江、行見探題澁川滿頼於新山、

二十日、義天公・忠朝夜宴澁川滿頼於田口寺、〔據久哲公永記、田下一字不審、略似平字、〕 義天公秉燭迎滿頼於門外、

先史作手、未詳何據、〔關疑〕 忠朝迎於庭、滿頼・忠朝上堂而坐、忠朝迎板藏殿於庭、

忠朝迎於庭、滿頼・忠朝上堂而坐、忠朝迎板藏殿於庭、

於是板藏殿及 義天公坐、忠朝先酌滿賴、滿賴酌忠朝及 義天公、極歡而罷、同上、觀此則義天公每事、降於忠朝一等、蓋 祇事宗子之禮、亦當然也、板藏殿不詳為誰

怨翁公將日隅兵五千餘騎擊清敷、 久哲公以二千餘騎會 之、 怨翁公與 久哲公及伊集院彈正少弼賴久軍野頭、

本田忠親將杉一揆、軍滿手野、新納實久將月一揆、軍壽 昌寺峰、播磨守守久・伊作大隅守久義、軍黑瀨・木場原

之間、共圍清敷城、日夜攻之、城中飢困求和、許之、解圍 一角、城主棄城去、清敷遂歸公室、據怨翁公、久哲公舊譜、 應永記、清敷城即入來城、

今入來領主入來院麻婆袈別館在其地、樋脇鄉倉野村有地曰野久尾、在地 頭館東北一里二町許、相傳為古城墟、古者樋脇在入來院、野久尾疑是野 頭、滿手野在樋脇塔之原村、黑瀨・木場原並在入來院氏別館西八 町許、保浦之名村、壽昌寺在入來院氏別館北十二町許、保添田村、賴 久、久氏之子、久義、親忠之子也、伊集院久氏往往見上、伊

作親忠見上、 怨翁公上樺山音久軍功於探題、五月十三日、 卷貞治三年、 探題澁川滿賴賜音久書以褒美之、據島津支、 流系圖、六月十五日、

澁川滿賴賜禰寢山城守清平本領安堵狀、清平、久清之子 也、據小松氏系圖、秋七月十七日、 怨翁公禱於正八幡

宮、寄進狀曰、若獲志於澁谷氏、當以故在國司田三町・ 園一所為酬恩、據怨翁 公舊譜、九月二十日、澁川滿賴賜佐多豐

後守氏義本領安堵狀、據島津支流系圖、佐多氏、 義已見上卷永德元年注、冬十月、 義

天公・山城守忠朝還自博多、據久哲公書、 應永記、澁川滿賴至肥後 二見、復召 怨翁公、 公又遣新納實久為名代、會澁谷

氏・菱刈氏・牛屎氏・和泉氏亦往、滿賴戒實久及澁谷氏 等食、音、澁谷氏與其族人謀焉、曰新納實久自稱攝位、

動輒坐我上坐、明日吾必坐上坐、有白拍子待酒、嘗為實 久所昵、陰以澁谷氏之言告實久、實久且日味爽詣探題所、

相良氏亦至、賓主坐定、酒一行、澁谷氏至、柏原某進揖 實久、將坐其上、相良氏麾柏原某、令坐探題之下、而

相良氏身坐實久之下、實久避席、讓相良氏者三、輿論以 為、實久恭於相良、而倨於澁谷、兩得其宜、他日探題講

犬追物、實久與焉、實久矍目長二尺、拾矢者目為島津黑 傘、據怨翁公舊譜、山田聖榮自記、此事無年、今因義天公・忠朝如博 多事、而類叙之、和語謂妓為白拍子、柏原亦澁谷氏族、舊目、本 大而頭銳、長二尺、其狀略似傘之者、故以黑傘為比、則其矢之長、與 弓之勁、從可知矣、本朝軍器考、舊目以其形似蝦蟇、故名、猶雞皮以其 文似蝦蟇背、名為比木波太、一說、此矢鳴似蝦蟇聲、故名、未嘗、山城 國靜原二宮山王在所藏天武天皇舊目、以桐木為之、竹筒纏胴、長一尺二 寸、圍九寸六分、重四十錢、東鑑、伊勢三郎能盛以竹根舊目、 射後藤新兵衛尉基清部下士、則此物以竹根為之、亦有由來焉、伊作久

義與別府法印忠種有宿怨、十二月、久義引兵如加世田、 屯鶴塚、將擊別府氏、據怨翁公・久哲公舊譜、應永記、原文稱別 府某、二階堂氏家譜行真傳曰、別府法印忠 種、今從之、鶴塚在加世田地 頭館北三十二町許、係益山村、

五年戊寅春正月十二日、 久哲公如串木野、命市來某・ 吉田某使諭久義釋兵、二子不肯曰、彼脩怨於別府氏、何

關於我、而乃屑屑為人游說乎、然既聞公命、不敢舉兵相 助、 久哲公乃遣 怨翁公書、請令新納實久往諭久義、

恕翁公以命實久、實久遣本田次郎左衛門尉緩頰説之、久

義乃罷兵、據恕翁公・久哲公舊譜、應永記、時云市來某・吉田某、當是市來筑前守忠家・吉田若狹守清正、吉田納右衛門系

圖、清正、清秋玄孫、清 夏六月十五日、恕翁公賜田代刑部

少輔清久書曰、君以博多之役破産、寡人當償、有如嫩日、

據恕翁公舊譜、田代基右衛門家藏文書、公書原文太略而意則可知、故據

其意而為之辭、如此非妄作也、觀者詳之、田代氏又藏公書五通、今觀五

書所言、蓋公遣田代清久、阿蘇谷某、將兵如博多、是為極月二日書、和

俗謂十二月為極月、已而清久遲緩不行、公以書促之者二、是為正月二十

一日・二月九日二書、於是清久乃行、行至市來而止、諺曰、募兵未集、

公復以書促之者二、是為三月二十九日・卯月十四日二書、五書無年、疑

在應永三年四年之際云、又按續本朝通鑑、應永四年、太宰少貳叛幕府、

菊池・千葉・大村等應之、鎮西大擾、則公極月二日書云、探題徵兵、正

月二十一日書云、探題告急、亦與當時事、清久、道清之孫也、據田

情合、探題即澁川滿頼、至博多見前年、代基

右衛門系圖、田代道清、見第六卷文和三年注、

「正文在福昌寺」

於福昌寺定條々

右、當寺元久執建申意趣者、自先祖忠久致元久七代、

三ヶ國仁寺於一所不持候間、福昌寺就執建申所定也、

一開山石屋和尚相請尊意(真卷)天、御弟子可有相續事、

一於寺家元久如何程母雖有大分寄進、不可有違乱更、

一於寺家諸御公事不可相懸事、

一代之仁寺領於可寄進事、多少者主可為計、

一寺家置手、元久所定置、少母背者不可為子孫也、

應永四年四月九日

「元久公御譜ニ在リ」

「正文在福昌寺」

(元久)
(花押)

元久京都國のために、金・れうそく・から物・うちのも
の、其外くわひせんものやからに、あつけおき候物ハ、元
久か一期過候ハ、みな福昌寺にもちてまいるへき也、

應永四年四月九日

「元久公御譜ニあり」

「伊久公御譜中」

欲攻清色城、應永四年丁丑四月下旬、從山北久哲為大將、

嫡子守久・始良三郎左衛門尉忠安・阿蘇谷出羽守興久・

子息四郎助久・伊地知伊賀守・下野宗十郎・信濃左近太

夫・酒勾伊豆守伊景・本田次郎守親・天辰肥前小次郎守

經・中條因幡守政春、近隣御家人國府左衛門尉・羽嶋豊

後守・執印豊前守・永利長門守・宮里若狹守・石塚對馬

守、南方之兵共二千餘騎、從麿島 陸奥守元久為大將、

新納越後守實久・北郷讚岐守・樺山安藝守・佐多和泉守

二 本陸奥守元久「御譜ニハナシ」
藤原元久(花押)

「伊久公御譜中」

川上某・本田・酒勾・阿多・平田・肥後・石井・伊地知・上井・鹿屋・猿渡・田代・長野・千代富・北原等爲一人當千之思、月杉兩一揆馳加、從山東伊東・土持・宮崎・跡江・木脇・清武・尊井・佐佐・宇津・岡富・縣・盛長・八代・財部・飯田・石塚・岩千野・白糸・綾・池尻・穆佐・加江田・既肥・櫛間・和田・高木・眞幸・菱刈・馬越・平良・曾木・栗野・稅所・加治木・平山・平松・平瀬・中津野・餅田・吉田・蒲生之軍共五千餘騎、殆引率八千騎、而久哲 元久・伊集院彈正少弼賴久構大陣於野頸、本田信濃守忠親爲杉一揆之將、構一陣於滿手野、播磨守守久・伊作大隅守久義構陣於木場原與黑瀬、新納越後守實久爲月一揆之將、構陣於壽昌寺之峯、故無通一絲之徑路、且復不嫌山野盤石、結間垣者二里五十町、堅密也、晝夜所攻責者、不可勝言、於茲乎、往昔圍亡父師久法師道貞於碓山城、又陷高江峯城、一族家臣宗徒勇士三十八人遂戰死焉、數年宿意今日所以消除也、城中士卒有餘、兵糧不足、且矢竭絃絕、是以不得支保、而乞通路免、以降城沒落、故國中屬無爲者也、

「正文北郷氏内都城永井銀兵衛後家有之」

先日進狀候處、委細御返事重々畏存候、抑其堺之事、既肥方敵方同心由事無念存候、就其薩州御大綱併察存候、雖然彼在所ニ被差寄候、所々被取陣候之由承候、御退治不可有幾程候哉、目出候、又三郎參候、就諸事薩州御煩ニ罷成候条、無勿躰次第候、但弥此仁事者、堅可預御扶持之由承候間、御芳志至無是非候、殊以御方様取分被懸御意候由承候間、千万難申盡御志候、敏々世上思様罷成候て、入見參、加様御悅申持度候、定御同心候哉、次此方様計略之次第、委薩州御方へ申候、定可聞召候哉、雖重言候、弥憑存候外無他事候、委細此仁可申候之間令略候、恐々謹言、

卯月廿三日

久哲(伊久)(花押)

永井殿

「應永記」

一同四年丁丑四月下旬ニ、清色ノ城ニ被押寄、山北ヨリ

モ前上總介伊久爲大將、嫡子守久・始良三郎左衛門尉

忠安・伊地知加賀守・下野ノ宗十郎・阿蘇谷出羽守與

久・子息四郎助久・信濃左近太夫、御内ノ人々ニハ酒

勾伊豆守伊景・本田次郎守親「重イニ」・天辰肥前ノ小次郎守經
・中条ノ因幡守政春、近隣ノ御家人ニハ國分ノ左衛門
尉・羽島ノ豊後守・執印豊前守・永利長門守「イ介」・宮里若
狹守・石塚對馬守、南方不殘被打立、都合二千餘騎、
各相職指上被打立計利、自鹿兒島者陸奥守元久爲大將、
新納越後守實久・北郷讚岐守・樺山安藝守・佐多和泉
守・河上、御内ノ人々ニハ本田・酒勾・阿多・平田・
肥後・石井・伊地知・上井・鹿屋・猿渡・田代・長野
・千代・向田・北原、皆成一入當千ノ思、月杉之兩一
揆、此ヲ前途ト馳重ル、自山東者伊東・土持・宮崎・
跡江・木脇・清武・曾井・佐々・宇津・岡富・縣・盛
長・八代・財部・飯田・石塚・岩千野・白糸・綾・池
尻・穆佐・加江田之軍兵、鉄肥・櫛間・和田・高木・
眞幸・菱刈・馬越・平良・曾木・栗野・税所・加治木
・平山・平松・平瀬・中津野・餅田・吉田・蒲生振底
打立、都合五千餘騎、其古本「ソホシ」ハ念當前馳重、伊久・元
久・頼久野頸ニ被構大陣、信濃守忠親杉一揆ノ爲大將、
滿手野「マナノ」ニ取陳、守久・久義木場ノ原ト黒瀬ニ取陳被堅、
越後守實久月一揆ノ大將ニテ、壽昌寺ノ峯ニ取上リ被
堅、依之通路切了、相ノ牆ノ邊リ二里十五丁ト云云、

河ハ淵瀬ヲ不嫌、山ハ岩盤石ヲ不厭、夜者燒篝守之、
今於爰舊恨馳節云事アリ、昔年道貞ヲ碓山ニ奉卷籠被
仰ハ、南方ヲ雖頼、隔通路、更難通、疲終テ、後ニ切
腹可見苦、度々被思召切有其色、乍去國分ヲ今一度可
憑有御意、以種々ノ方便御心底ヲ國分ニ被通、國分方
今ニ於テハ命ヲ捨ルヨリ外者無才覺トテ、次男ヲ一味
之陣ニ召合被差置ト、有領掌風聞セシカバ、執印方ハ
不及申、市來ニ有其疑、氏久差寄而有計策、伊集院・
伊作同心之間、七陣破却了、國分忠節於守護方千端萬
緒難申、子息之叟者、兵具ヲ相副エテ被送トソ承リ、
自碓山以本田與一、次郎四郎殿ヲ無事故被歸候事、目
出度候之由、被仰遺鬘流、道貞如此及難儀給事モ、依澁
谷ノ謀叛也、亦高江ノ内峯ノ城ヲ責落シテ、宗徒ノ侍
三十八人切腹畢、是亦非澁谷之計畧哉、然者今度於清
色欲被遂日比ノ宿意、縱唐ノ范蠡雪會稽山之耻、越王
勾踐天下之主奉成、吳王夫差如討、仍城内ノ一族悉被
取籠間、城持勢雖無不足兵糧盡間、定テ道口ヲエテ没
落畢、弓矢ノ儀理モ淨ク同心シテ、無一乍敵被褒ケリ、
去程ニ上津之御船、肥前ノ寺江ニ付ク、「イ新五郎トアリ」
同國新山ト云
處ニテ、御兩人探題ニ有御對面、爲其禮澁河殿御出候

間、四月廿日、田手寺^{「イ平」}兩人御宿一所ニ而被懸御目、及曳燭之間、修理亮殿ハ持蠟燭門外ニ參候、同山城殿庭上ニ畏テ探題ヲ被申請、探題御兩人ニ有一禮、右ノ座角ニ御座ス、山城殿御座敷ニ直リ給テ探題ニ跪キ、低頭シテ亦庭ニ下テ請板藏殿、修理亮殿深有禮、山城殿梃ニ上リ給ハ、修理亮殿・板藏殿梃ニ被參、探題兩人此方ヘト以近習被仰、山城殿修理亮殿^{「松イ」}板藏殿ニ有堅禮、座敷ニ被參、從探題者一帖程下テ左座ニ直給、修理亮殿モ板藏殿ニ有一禮、澁河殿自御座敷御座次、板藏殿モ依召被參、山城殿有御酌、次ニ探題御酌取、銚子柄檀紙ニテ被裹、兩人者御酒ヲ給リナサル、其夜ハ新山ニ御歸院也、然間春夏秋マテ御膝下ニ有堪忍、十月下旬ニ御暇被給有御下也、依清色落居諸軍勢皆被打歸、仍國中屬無爲、同十二月、伊作殿有別府勢遣、鶴塚被踰大事ノ河ヲ雖被渡、其比迄總州・奥州一味ニ御座候之間、自ラ無差合戰云々、

「怨翁公御譜中」

一 應永四年丁丑四月下旬、與上總介伊久法師久哲俱議欲攻清色城、元久自將而發於麿嶋、相隨軍來新納越後守

「全」

實久・北郷讚岐守・樺山安藝守・佐多和泉守・川上・本田・阿多・平田・肥後・石井・伊地知・上井・鹿屋・猿渡・田代・長野・千代富・北原・伊東・土持・宮崎・跡江・木脇・清武・曾井・佐々・宇津・岡富・懸^{（懸）}・盛長・八代・財部・飯田・石塚・岩千野・白糸・綾・池尻・穆佐・海江田・飢肥・櫛間・和田・高木・眞幸・栗野・菱刈・馬越・平良・曾木・稅所・加治木・平山・平松・平瀬・中津野・餅田・吉田・蒲生五千餘騎、久哲領土之兵二千餘騎、共八千騎到于其地、久哲・元久・伊集院彈正少弼頼久構大陳於野頸、本田信濃守忠親杉一揆之將帥構陳於滿手野、播磨守守久・伊作大隅守久義構陣於黒瀬與木場原、新納越後守實久月一揆之將帥構陣於壽昌寺之峯、如此者、陣無通一線之經路、且復不撰山谷磐石、結間垣者殆三里堅密也、所以晝夜攻責非言語之所得述、城中士卒有餘、兵糧不足、諸卒力倦、矢竭弦絕、是以不得警衛、而乞通路之有免、降城沒落、故薩隅日三州屬無爲也、

一 今探題澁川右兵衛佐滿頼、下向于肥之後州二見、於茲

乎、令元久爲參候之催促者類也、故爲名代新納越後守

實久候于二見、爰薩摩四ヶ所兩院和泉等者、非守護之命而直候于探題之館、是亦對于守護無禮之至也、于時

探題欲招群參之人、備饗應進旨酒、而設會合之席、豫

所以告之也、於茲澁谷一族共有群議、每度實久稱元久之名代候高座者、太奇怪也、於明日者必可候于新納之

座上云々、有白拍子之陪其席者、此間於彼此會合之座

席、實久懇切之至不可勝言、故以此事告報于實久、實久聞之、誠所以志之不淺、何以謝之乎云々、而明日早且

候探題之館、探題欣然有喜色、相良氏亦已爲出仕在坐中、爰盃酒一巡之後、澁谷一族共以遂出仕、爰栢原某

楚忽進出座之中央、跪座于新納之前而揖之、越後守進于上座、向于下座爲懇勸之禮、暫無興之至也、相良改

席請澁谷於探題之末座、而後自己者着新納之下座、越後守下座而揖讓者再三也、實久今日於澁谷則以教情、

於相良則以揖讓、二共合理、見聞之傍人莫不美談矣、又於二見有犬追物、越後守亦爲射手之列、其引目者自

上一尺八寸、其下共及二尺、宛似黑傘之未發、故矢取之小童等狂言曰、嶋津之黑傘云々、且至後年亦謳歌之、

越後守歸國之時、請引目留彼國云爾、

585 〔全〕

一谷山郡可入道佛心者、亡父氏久主山北坂上一揆之逆徒

退治之際、使渠入東福寺城爲警衛、氏久主歸陣之後歸

谷山矣、其後雖有企叛逆之聲、願前忠所有置焉、雖然

及當代魔嶋之近所而爲障得之族、何不退乎、加退治矣、

是以谷山百八十町・喜入四十町・指宿四十町共爲守護

領、穎娃四十町者畀舍弟南殿修理亮 久豊也也、

586 〔正文在樺山源三郎久清〕

致忠節之由、嶋津陸奥守元久所注申也、尤以神妙、弥可

抽忠功之狀如件、

應永四年五月十三日

〔稱山音久〕
嶋津美濃守殿

〔上包〕
嶋津美濃守殿

〔此書、樺山家二代音久譜中ニ在リ〕

右兵衛佐滿賴

〔淡川滿賴〕
右兵衛佐〔花押〕

587 九州事不与力嗽訴輩、属探題手、可致忠節之由、所被仰

下也、仍執達如件、

應永四年五月十九日

嶋津〔完〕又三郎殿

沙弥在判

588 「正文在文庫」 「伊久公御譜中ニ在リ」

嶋津上總入道久哲申豊前國副田庄事、被官人押妨云、太不可然、所詮、可被沙汰付下地於久哲代、若又有子細者、可被注申之狀如件、

應永四年六月五日

〔茨川氏也〔滿頼〕
右兵衛佐〔花押〕

大内左京權大夫入道殿

589 『正文國分正八幡宮社司澤氏家藏』

奉寄進

正八幡宮御寶前於在國司跡内、
水田參町園一ヶ所

右、立願意趣者、爲當敵城同澁谷對治、所致丹誠也、足本意者、最前可寄進也、仍願書如件、

應永二年七月十七日

陸奥守藤原元久〔花押〕

590 合戦に罷向候間、そんめいふちやうに候、申置候、母にて候もの、次に鬼房丸か事、御ふたり候得ハ頼存候、相

構ととりたてられ候而、人になして可給候、返すく頼存候間、如斯令申候、恐々謹言、

應永四年八月十四日

久清判

〔祿寝右馬介清久、初鬼房丸、後右馬介と云、應永年中於川邊戦死、

今之小松氏之祖なり」

「右田代肥前守筆跡と或人の手鑑にあり、然とも田代氏に久清と云人ありや、清久へあり、尚可糺」

591 「佐多氏譜中」

氏義

武義 又四郎 豊後守

文和四年乙未誕生、

延文四年父忠直戦死、氏義僅五歳也、叔父備前守使養

育之相續家督、

永徳元年六月一日、禰寝氏掠取佐多城、

應永四年九月廿日、探題澁河右兵衛佐滿頼、賜案堵之

證帖、左開之、

592 『佐多氏藏款』

大隅薩摩兩國本領地事、知行領掌不可有相違之狀如件、

應永四年九月廿日

〔氏義〕
〔茨川滿頼〕
右兵衛佐〔花押〕

佐多豊後守殿

593 「伊集院圓通庵文書」

奉寄進

南郷内田園等事、水田坪付在所々并園五ヶ所号名、一所はね田園、一所田中園、一所たゝら口、一所ほろくわう園、一所原園、

右、件所領者、觀了爲重代相傳所領之間、奉寄進圓通軒早、限永代可有知行候、於于子々孫々不可有他妨候、仍爲後日狀如件、

應永二年十一月二日
(伊集院久氏(觀了) 沙弥(花押))

594 「伊集院圓通庵文書」

奉寄進

南郷内中園門付水田九反廿口并中園一ヶ所二切小島一

所事

右、件所領者、觀了爲重代相傳所領之間、奉寄進圓通軒早、限永代可有知行候、於于子々孫々不可有他妨候、仍爲後日狀如件、

應永二年丁丑十一月二日
(伊集院久氏(觀了) 沙弥(花押))

595 「正文在伊集院圓通庵」

(本文書ハ五九三号文書ト同文ニツキ省略ス)

「伊集院久氏譜中」 「同日同案アリ、意通ハ如是也」

596 「伊久公譜中」

伊作大隅守久義有宿意之未散別符某、欲遂其憤、應永四年丁丑十二月、率師旅已發向、而渡大河對敵城、構陣於鶉塚、以越年矣、同五年戊寅正月十二日、久哲越山于串木野、爲和夫亂逆、使市來某・吉田某爲和諧之謀、而未成、是以裁書簡達麿島曰、

應永記ニ有之、

新春御大慶千喜万悦云々、左ニアレハ略ス、

正月十四日 沙弥久哲

元久返書曰、

如仰之候、今春之御吉兆云々、左ニ見ヘタリ略ス、

正月十六日 藤原元久在判

其後新納越後守實久聞件之事、則大驚太憂、使本田次郎左衛門尉達諫言於久義數度、而後開陣矣、久哲之悦喜何有如之者乎、如斯與元久親暱雖異于他、應永六年忽爲氷炭者也、

597 加官

宗次郎殿 (田代)
久助

應永二年十一月廿六日

陸奥守元久(花押)

598の1

〔應永記〕

一同五年戊寅正月十二日、總州有御越山串木野御逗留、

仍チ市來・吉田ヲ有御憑之由被仰、兩人ノ御返事ニ云ク、彼方ヲ御企雖難存候、手ヲ不及摺申、於于別府者、亦無可申子細候、依御意憚申、合戰ヲモ不仕候由被申之處ニ、下野守忠頼市來ニ被申遣之通念頃也、亦吉田若狹守清正串木野ニ被參而、年始之礼儀被言上畢、依別府之夏、早々御越山目出度候、上意之趣者大方承候間、此上者不及私ノ才覺候ト申テ被立ケリ、總州彼方此方ノ義理何モ道理至極セリトテ、鹿兒島へ被御狀ヲ遣、其狀ニ云、

598の2

新春之御大慶千喜萬悅不可有盡期候、抑伊作方之振舞、國之乱共可成候之哉、澁谷一族多年誦野心候間、去年以御合力加退治候畢、隨而探題方之御事、以子共應對申候キ、春永市來邊ニ參會、國中^ニ有催促上書之趣申上、亦去

年之御辛勞欲令申候之處ニ、私之嗽訴不及了簡候、此段新納方ニ有御談合、被加諫言候者、可目出度候、恐々謹言、

正月十四日

沙弥久哲 (伊久)

謹上 大隅殿

598の3

其御返狀

如蒙仰候、今春之御吉兆越例年候間、萬事目出度本意満足候了、抑伊作方夏楚忽之至ニ候、實久被打越候者、急速ニ彼陣被引退候様ニ可申談候、兼又唯相似次候、去年舍弟次郎三郎・山城殿御供申、探題方之事償申罷下候、依月迫、此子細ヲ不令申候、京都之事者山北ニ參向可申定候、恐惶謹言、

正月十六日

藤原元久在判

進上 酒勾伊豆守殿

598の4

去程ニ越州ハ大ニ有驚、以本田次郎左衛門尉、伊作殿有教訓、仍諫鼓打音重レハ荆鞭モ難朽、久義臆而引退畢、總州有御悅喜、山北ニ御歸候、其年三ヶ國屬無爲、

廣濟寺佛殿兩牌

右 恭冀乾坤覆載保綏挿草靈區釋梵鑑光黃布金勝概大檀

那藤原彈正弼賴久敬白

左 伏惟皇風浩蕩資助祖道隆興佛日高明照鑑擅心貞固

應永五年戊寅四月十三日

住持景周
謹誌

600 寄附
〔關州清水之地今改勝嚴寺〕
惣勝禪寺

薩摩國谷山郡内木下肆町壹段事

付濱園壹所

右、爲天長地久、國土安穩、殊公私惣別祈禱、別而前亡

後滅菩提、所寄進之狀如件、

應永五年六月一日

〔本由〕
信濃守忠親〔花押〕

601 〔田代清久譜中〕「元久公御譜中ニ在リ」
〔元久〕

〔花押〕

就參津之事、給分内沽却云々、仍不可有子細之狀如件、

應永五 六月十五日

田代刑部少輔殿

五年戊寅六月、清久苦於參津用途、請沽却領土、以辨之、

十五日、公加袖判、報其事也、

603 〔蒲池氏文書〕

筑後國三潯庄内一木村内重阿弥陀佛名田一町事、久家爲

重代相傳私領、道通之所打渡申候處実也、久家於子孫彼

所不可有吳儀之狀如件、

應永五年つちのへ六月廿日
〔蒲池〕
久家〔花押〕

604 〔田代氏家藏文書〕

大隅國守護人嶋津左衛門尉氏久御書下

二通 七郎入道道清宛給

又三通 左衛門尉宛給

一串良院上條地頭職并弁分

一鹿野院地頭職并弁分

御書下五通、宗次郎後代以此旨、可知行狀如件、

應永五年壬寅十二月廿五日 清久〔花押〕

605 〔全〕

譲与

大隅國田代内宗次郎讓村之山野堺事

一所 遊喜田村 東限塩井河遠目か塚、西限紫立大道、南限岩崎高尾、北限永谷堺、水田此内あり、

一所 土橋村 東限しほ井河、西限岩崎村、南限小迫田、北限遊喜田堺尾、水田此内あり、

一所 原村 東限中齒水田小山下二反、南限前溝、西限小齒後水田赤崎田三反、北限永谷河下湯谷をさかふ、

一所 有里小野村 東限高木場、西限渡谷、南限廣渡瀬、北限大立山、

一所 山野 こかうち たかこは あらさへ

自作分一所 大坪七反 古河二反

山野此三ヶ所者一所ニあり、東限かふり石、西限有里小

野堺、南限谷下、北限はけ石の堺尾、

此旨を存知して可知行之狀如件、

應永五年十二月廿五日 刑部少輔建部清久(花押)

606 大隅國田代村四方堺之事

東限 肝付内きしらのしら谷、

南限 花瀬河くたり、下なへせ宮原知行をさかふ、

西限 野か嶺のさかい、さるかきのをくたりかりくら、

北限 はけ石かなくその谷ほとけさかの尾たち白石の

尾の上をかきる、

此之旨お存知して可知行之狀如件、

應永五壬寅年十二月廿五日 刑部少輔清久

607

〔全〕

譲与

大隅國田代内宗次郎讓村之山野堺事

一所 遊喜田村 東限塩井河遠目か塚、西限紫立大道、南限岩崎高尾、北限永谷堺、水田此内あり、

一所 土橋村 東限しほ井河、西限岩崎村、南限小迫田、北限遊喜田堺尾、水田此内あり、

一所 原村 東限中齒水田小山下二反、南限前溝、西限小齒後水田赤崎田三反、北限永谷河下湯谷をさかふ、

一所 有里小野村 東限高木場、西限渡谷、南限廣渡瀬、北限大立山、

一所 山野久留識平 東限かふり石、西限有里小野堺、こかうち、たかこは、あらさへ此三ヶ所は一所ニあり、南限谷下、北限はけ石の堺の尾、

自作分

一所 大坪七反 古河二反 東門田二反

一所 南齒彦四郎屋敷、宗次郎所讓渡也、

於此所成違乱煩聳者、不可爲清久子孫之狀如件、

應永五年壬寅十二月廿五日 刑部少輔建部清久在判

608

〔田代清久譜〕

五年戊寅十二月廿五日、清久授久助書、傳田代諸村山野等凡四通、

609 「田代文書」

就正宮材木之事、度々壁書面々存知前候哉、依所々番替、無沙汰なる方も候やと存候、所詮、正月廿日以前ニ悉材木を社頭ニつけられ候て、皆納之請取を可有持參候、若無沙汰候て、正月中過候者、八幡も御爵候へ、任先度壁書旨、可致其沙汰候、此爲可有催促候、恐々謹言、

十二月廿五日

元久(花押)

(清久)
田代殿

610 「田代清久譜」

十二月廿五日、年紀未考、公授清久書、徵造正宮材曰、宜限正月輪之、

611 「國史 恕翁公」

六年己卯春二月二十九日、恕翁公以谷山郡宇宿村田園山野及濱海地、爲福昌寺領、又益宇宿村水田三町、用資

齡岳公冥福、又益宇宿村水田八町、用資老母崇欽禪尼冥福、並復其民、世世毋有所與、曰、有違此命者、非吾之子孫也、據恕翁公舊譜、郡村高辻候、宇宿村屬谷山郡山田郷、冬十一月三日、故幕府賜

薩摩地頭御家人教書曰、大内入道反、遣師討之、鎮西人宜應官軍務立戰功、同上、續本朝通鑑、應永六年大内左京大夫義廣入道有繁反、十月將兵至和泉境、

大隅人肥後氏・石井氏等殺、原文含糊、殺者主名不著、故止言殺、田代氏憾

之、族人皆叛、獨清久不從、晦日、恕翁公與田代清久書曰、闖族皆叛、君獨不然、足以知平生之志也、自今以後與君同好、雖有讒慝、吾不敢聽、有渝此言、諸神殛之、

同、十二月三日、恕翁公使菱刈安藝守久隆領日向求仁郷地十五町、據恕翁公舊譜、菱刈孫太郎系圖、重久隆、進士判官重妙七世孫也、據菱刈孫太郎系圖、重久隆、進士判官重妙七世孫、妙見第一卷建久四年、

方有加世田別府之難、聞君引兵相援、儻得其地、當盡與之、請以此言爲左券、據伊作家譜、十九日、恕翁公使岸浦勘解

由左衛門尉兼居領大始良莊西侯五町、據恕翁公舊譜、岸良虎千代系圖、

肝付兼俊孫曰兼基、兼基爲肝原郡岸良村辨濟使職、因以爲氏、兼二居、兼基八世孫也、蓋岸良即岸浦云、兼俊見第五卷建武三年注、十七日、使得丸但馬守領始良莊得丸名、據恕翁公舊譜、晦日、

伊集院頼久上誓書於 恕翁公曰、願與公家患難相恤、有渝此言、諸神殛之、同上、

612

「正在田代氏」

御祝言重疊目出度申籠候了、珍重幸甚々々、不可有盡期候、抑先度如申候、急々可有越候、國人々少々出津用意候て、其立之事を面々被待候由承候、御立之事遅々候ハ、惣國人々可有油断候、尚々一時も早々可有越候、于今延引無心元候、風渡〔被立候者〕に立候者悦入存候、恐々謹言、

二月九日

元久(花押)

田代殿

613

「正文在田代氏」

新春御吉慶、於今雖事舊候、尚以珍重候、更ニ不可有盡期候、抑雖無何事候、細々可申承候之處、路次依不輒候、無爲之至非本意候、兼又探題御方より御在所河尻之間合力可申之由、被仰下候之間、雖無勢候、田代刑部少輔相〔繪久〕副、軍勢差進候、一向御扶持お憑存候、預御指南候者悦入候、次球摩郡事、相良三郎依武朝大綱籠上候之由、風聞候之間、一途爲相計、親類美濃守相副、軍勢差進候、如此分勢候之間、無勢之至、所存外候、不審連々承、可令啓候、御同心候者、悦入候、恐々謹言、

二月廿九日

陸奥守元久(花押)

謹上 八代殿

614

「正文在福昌寺」 「元久公御譜中ニ在リ」

奉寄進

薩摩國谷山郡宇宿村内門付事門六之内水田八町〔坪付在惣帳〕右、彼所領者、元久重代相傳之所領也、雖然爲老母崇欽禪尼菩提祈、所奉寄進福昌寺也、若於此所爲違乱輩者、不可爲元久子孫、次萬雜公事諸役等悉停止之者也、仍爲後代寄進狀如件、

應永六年己卯二月廿九日

陸奥守元久(花押)

615

「正文在福昌寺」

奉寄進

薩摩國谷山郡宇宿村〔田島并山野海邊坪付別紙在之〕右、彼御寺領者、元久重代相傳之所領也、然依有志願、石屋和尚爲開山於長谷庭建立福昌寺、而爲菩提所奉寄進也、但彼御寺者、相承石屋和尚之尊意、御弟子次第可有御相續者也、次於此寺領者、萬雜公事諸役等悉可停止之、若於此條々違背輩者、不可爲元久子孫、仍寄進狀如件、

應永六年己卯二月廿九日

陸奥守元久(花押)

616 「此文在福昌寺」

奉寄進

薩摩國谷山郡宇宿村内門付事門二之内水田三町坪付在惣帳

右、彼所領者、元久重代相傳之所領也、雖然爲先考齡岳久公禪定門菩提祈、永代所奉寄進福昌寺也、若於此所爲(為脱之)違亂輩者、不可元久子孫、次萬雜公事諸役等悉停止之者也、仍爲後代寄進狀如件、

應永六年己卯二月廿九日 陸奥守元久(花押)

617 「田代清久譜中」

六年癸卯三月十四日、清久授久助書、傳田園及狩倉於田代内、

618 「家藏文書」

讓与

大隅國田代内水田園狩藏
一所 東門田二反
一所 南園彦四郎屋敷

一所 久留謙平宗次郎所讓渡也、於此所成違亂煩輩者、不可爲清久子孫之狀如件、
應永六年己卯三月十四日 清久(花押)

619 「福昌寺文書」

「畷山田譜」

奉寄進

薩摩國鹿嶋郡給分小牧内中牟田事二段

右、彼所領者、式部常陸守友久爲二親先考道興禪門、老母通長禪尼菩提祈、永代所寄進福昌寺也、雖然爲後代、本寺大檀那陸奥守元久所取進加判也、次萬雜公事諸役等悉停止之、仍寄進狀如件、
應永六年己卯三月廿一日 常陸守友久(花押)

「友久ノ孫山田孫五郎久依ニ至リ、勝久ニ從他州ニ出還ラストアリ」

620 「正文在田代氏」

一日彦七方へ承候子細可然候、山門へ御出可目出候、國之勢未打寄候て、中途へ長々逗留候条痛敷候へ、急度被致催促候間、近日之間ニ可打寄候哉、兼又市來邊ニ逗留候よりへ、山門ニ被越候て可然候、彼境より不断御注

「忍翁公譜中」

一薩隅日三州漸屬無爲、貴賤歡樂歌市并野矣、應永六年

進可然之由、通隣上座ニ申度候とても被旅立候間、肥後之聞得と申、山門ニ急々被越候者可然候、尚々國之勢之事連々さいかくをいたし候間、近日可打寄候、恐々謹言、

三月廿九日 元久(花押)

「刑部少清久」
田代殿

一同六年己卯夏之比ヨリ、物言ヒ國中ニ充滿シテ、皆人成疑、兩殿御中余甚深シテ、總州三男黒殿ト申ヲ元久ノ有養子、又三郎久照ト名乗給ヲ、鹿兒島ニ有屋形作、式部山田、酒勾ノ亦次郎〔又イ〕、上井ノ神五郎、山田ノ弥次郎被差副、唯楊貴妃玄宗皇帝恩幸ノ時、楊國忠カ如榮、時人嘲云、國忠入門暖風ノ如扇面有落言也、富貴家ハ可成有加様、餘北風ノ厲サヨト云人モアリ、北殿ト依申也、養子之夏、始終不可然、被咄鼻流處、果シテ十二月、肥後・石井・伊地知於下大隅被討畢、同七年云々、曰下見于末文、

「應永記」

己卯之夏、忽國中老若往々爲疑者不少焉、雖然久哲與元久宛如水魚、而久哲之三男黒殿既爲元久之猶子、稱又三郎久照、造立屋形於鹿兒嶋、以令居之號北殿、供奉來者山田式部・酒勾亦次郎・上井甚五郎・山田彌次郎等也、時人始也隱密疑之、終也欬々憎慍曰、北風猛烈、以不可忍、是言蓋因呼北殿之稱號云爾者乎、漸噉々相誹之際、討肥後・石井・伊地知於下大隅、以降、同七年庚辰彼只有荒説、凶徒蜂起不可勝言、於茲乎本田信濃守忠親大息歎曰、先君氏久迄臨終之時戒後來曰、元久陸山北殿、敢勿間隔、今也變其遺言、相爲冰炭、故送簾中於山北、久照亦退出於麿嶋焉、由是忠親致當職、而出奔也、

「正文在田代氏」

參津事、一日も急敷候、國之面々へも何か度ともなく催促申候間、定近日可有津候哉、就夫此間長々それに在津之事情敷候、何様先山門被越候て國之面々を被待候へく候、若又猶國之人々をそなをり候へ、一人にても阿蘇谷方御談合候て出津候へく候、それにて徒に日敷を被送候事、尤いたハしく存候、今日十四日重催促をいたし

候間、さのミをそなをる事あらしと覺候、恐々謹言、

卯月十四日 元久(花押)

田代刑部少輔殿

〔元久公御譜中ニ在リ〕

624 〔正文在田代縫殿助書長〕

來十五日以前於眞幸・栗野兩所之間、敵方可勢仕之由、其聞候間、可致合力候、爲用意兼日申候、依重さ様可被
打寄候、恐々謹言、

六月三日 元久(花押)

田代刑部少輔殿

〔元久公御譜中ニ在リ〕

625 奉寄進 「おなしくむなかつミ三反」

薩摩國滿家院比志嶋名田地

石原田一段十 爲立阿禪門靈供〔義勝父範平ノ法名ナリ〕

倉谷内二段田 爲良阿禪尼靈供〔同人母平氏女ナリ〕

樋口二段 爲智貞禪尼靈供〔同人姉源氏女ナリ〕

彼領地、爲義勝相傳私領間、停止万雜公事臨時果役、一向限永代奉寄進徳雲寺所也、然間無他妨可有御知行候、

若於彼所成違乱煩聾、不可爲義勝子孫、仍爲後證寄進狀

如件、

應永六年己七月十二日

源義勝〔比志嶋〕

626 〔正文在舊記〕

大隅國始良庄西俣村内五町坪付在別紙爲祈所々宛行也、任先例、領知不可有相違狀如件、

應永六年十一月三日 元久(花押)

中馬左近藏人殿

627 〔正文在文庫〕

〔義濟〕(花押)

大内入道隱謀既露顯之間、所差遣討手也、鎮西事、爲御方致忠節者、可有抽賞之狀如件、

應永六年十一月三日

薩摩國地頭御家人中

〔元久公御譜中ニ在リ〕

628 〔福昌寺文書〕

一見了

延命寺々領之田嶋坪付

各合居屋敷一所

古市 十

山本阿弥陀堂田二段、同堂地一所、波平熊野田三段此内

現年二天神田一段十、以上田數六段卅、此内卅不、
段廿、

應永六年十一月十五日 久興(花押)

629 「正文權山家」

契約

右、意趣者、堅親一筆、又進上候者、付大小事、可御用

立申候、若此條偽候者、

伊勢天照大神 正幡大菩薩「本」、 諏訪上下大明神御討可罷蒙

候、仍契約狀如件、

應永六年十一月十九日

樺山殿

大和守

直久(花押)

630 「正文在田代縫殿助遺長」 「元久公御譜中ニ在リ」

今度肥後・石井就沙汰之事、面々事をも荒説を聞、身の
信用候様ニきかれ候之由承候、其上兄弟不殘敵方同心之

由聞得候、雖然代々忠と申、身大綱之時分、親類にひか

れ被捨候へんする事、よも候ハシと存候、しよせん今時

節、平憑存候、重て被致忠節候者悦存候、仍兄弟親類の

こらす敵方雖同心候、一身之事者、無他事之由承候、日

比志も露候かと悦存候、於向後もいか様荒説き々候共、

不可信用候、又今度振舞をも遺恨不可存候、此條偽申候

者、正八幡大菩薩 諏訪上下大明神御討可蒙候、恐々謹

言、

「應永六年」

霜月卅日

元久(花押)

田代殿

631 「田代清久譜中」

應永六年十一月、前此 公乞 久哲公第三子爲猶子、稱

又三郎久照、居於鷹島、謂之北殿、既而國中騒乱、乃

討肥後・石井等於下大隅、於是清久兄弟獻 公誓表、乃

晦日、公賜誓書報之也、

632 「正文在田代清長」 「元久公御譜中ニ在リ」

摠國之爲大將軍、探題様可被馳參段、先日申候、辭退之
旨無分別候、謂家、謂仁、謂分限、彼是不可有子細候、

早々被罷立候者悦入候、阿蘇谷殿可爲副將軍候、恐々謹

言、

〔応永六カ〕

極月二日

元久(花押)

田代殿

633 〔田代清久譜〕

間歳、探題陣于河尻在肥後召兵於公、於是公使清久爲

大將軍、阿蘇谷某爲副將軍、帥兵赴之、清久固辭、乃十

二月應永六年秋二日、公又賜清久書強以前命、

634 〔元久公御譜中〕

日向國求仁郷内十五丁、爲祈所相計處也、任先例、可被

致沙汰狀如件、

應永六年十二月三日

元久(花押)

〔差別安芸守久隆事也〕
菱刈殿

635 〔見于伊作譜〕

薩摩國加世田別府事、今度身之大綱之時分候、一味可被

召弓箭由承候間、彼地事、加退治可進一圓候、仍爲後日

狀如件、

應永六年十二月十八日 元久(花押)

伊作殿

〔伊作勝久譜中ニ在リ、正文在卷本トアリ、正文伊作家文書中ニ在リ〕

636 〔正文在宮内社司澤氏〕

契約

右、旨趣者、澤殿与幸範間事、自元御殿人一分候上者、

不可存疎略不忠之儀候、於自今以後、弥成一味同心之思、

付大小事心底不殘可申承候、就中世上念劇時分、自何方、

云所領之事、云非分侘僚之事、一身浮沈出來時者、相互

身存大事可支頼申候、此中若有凶害仁、讒言承候ハ入時

者、直仁不審可散候、深奉憑神慮候、聊正路之儀、自他

可申談候、此条々僞申候者、

正八幡三所大菩薩 若宮・武内・早風雨社等御討お可罷

蒙候、仍狀如件、

應永六年十二月十九日

幸範(花押)

637 〔正文岸良氏藏〕

大隅國始良庄西俣村内五町坪付在別紙爲祈所々宛行也、任先

例、領知不可有相違狀如件、

應永六年十二月十九日 元久(花押)

岸浦勘解由左衛門尉殿 〔兼唐ト云〕

〔元久公御譜中ニ在リ〕

638 〔載舊記〕 〔元久公御譜中ニ在リ〕

嶋津庄大隅方始良庄内得丸名一圓事、爲給分所相計也、
任先例、可領知之狀如件、

應永六年十二月廿七日 元久(花押)

得丸但馬守殿

639 〔載舊記〕 〔元久公御譜中ニ在リ〕 〔頼久譜中ニモ在リ〕

契約

右、意趣者、雖爲天下轉變、於私御大事之時者、身之大
綱存、相互見繼被見繼可申候、此条爲申候者、日本國大
小神祇、殊八幡大菩薩 諏訪上下大明神御爵お可罷蒙候、

應永六年十二月卅日

彈正少弼頼久(花押)

〔右、怨翁公ニ上ル盟誓ナリ〕

元久公 自應永七年
 伊久公 至同十七年
 久豊公

前 編 舊記雜錄 卷卅二

640 七年庚辰

正月、元久公隅州鹿屋院を鹿屋周防介忠兼後除髮シテ玄兼ト稱ス、國老ニ任に給ふ、忠兼其先肝付氏か族なり、肝厲氏五世河内守兼名カ第三子宗兼初テ鹿屋テ鹿屋ヲ領ス、封を鹿屋に請く、因て氏とす、中比除せらる、是に至て本土に復す、

八年辛巳

九月、鶴田刑部左衛門尉重成世鶴田ヲ領ス、洪谷氏ノ一族也、族を離て元久公に通る事年あり、按ニ、永和元年、重成氏久公ニ通ス、今ニ至テ二十七年、一族ヲ離テ孤立スルカ、或ハ族等ト和平ノ時歟詳ナラス、澁谷篤是を惡ミ、清色入來院氏領スル歟、柏原車内澁谷實重早川東郷或ハ車内ト稱ス、高城澁谷光重之六男落合六郎重貞陸州高城ヲ領シ、因テ以テ氏トス、大村軍を

發し、鶴田を圍ミ攻む、上總介伊久入道久哲澁谷を助て

萩か平に軍す、按ニ、久哲是ヨリ、元久公ト兵ヲ構らる、事数年、只澁谷ニ善キカ故ニ爾ルカ、或ハ曰師久公ノ世子トシテ立ス、重器ヲ元久公ニ讓テ國家ニ望ナキカ如ト云雖、今元久公鶴

至テ是ヲ悔ヒ、一統功ヲ樹テ太守ニ立シトスルカ詳ナラス、今元久公鶴田の急を聞キ三千五百餘兵を卒し、鴨巢神崎山是ヲ鶴田古城ト云、

に軍し、鶴田を援ふ、九月、久哲軍を善福寺に移し是ニ對す、澁谷又援を球摩に請ふ、相良前續ニ作ル、自ら來

て是を助く、十月、中旬相良氏至リ、或云、牛屎ノ軍是ニ屬ス、於是日々に戰を挑て、

雌雄いまた決せず、傳云、十月、新納八郎三郎、元久公ノ宮ニ詣ル、四郎九郎戰死ス、於是高軍大ニ戰フ、澁谷、大村戰死ス、元久公ノ軍伊集院本輔等戰死ス、敵又神崎山ニ攻入ル、公ノ軍亦久哲ノ營ヲ攻破ル、十月二十五日又千

町田ニ會戰ス、元久公鶴田重成を諭して曰、今賊軍四集して敗るへからず、孤城又永く保かたし、暫く鶴田を以澁

谷氏にあたへよ、更に封するに谷山の地を以てせん、傳云、山田村六町サエノ内今アミノ浦ヲ封スト云、重成諾ス、城を下て菱刈に通る、

澁谷鶴田を取る、按ニ、鶴田氏其先重茂安治中封ヲ鶴田ニ受テヨリ以來今ニ至テ百五十餘年、是ヨリ子孫遂ニ衰微ス

ト云、元久公軍を班す、

十年癸未

元久公師を帥ひ日州に至り海江田城伊東氏領を陥る、新納

越後守實久功あり、海江田ハ山東の要地也、故に城を修

築し、阿多加賀守をして是を守らしむ、於是川南穆佐三百町池尻

細伊藤を叛て、元久公に屬ス、今給黎長門守久俊元久公ノ外叔

父ナリ、知に命して日州を鎮す、久俊其任に勝ざるを以辭
 賢ノ士、更に久豊公元久公ノ弟也、此時薩州顯桂ニ在リ、故ニ南殿ト稱ス、顯桂ヲ去ルニ及テ顯桂ヲ小牧氏ニ賜フ事ハ應永
 二十七年ニ詳ナリ、に命す、久豊公即日州に至り穆佐に居し、池尻
 ・白糸・細江に三城を築き日州に鎮す、伊東大和守祐安
 久豊公の勇武を恐れ、女を以是に嫁し、長く唇齒の交を
 結ぶ、元久公其命をまたすして娶るを怒る、是より
 久豊公と善からず、於是後藤氏細江城に據て 久豊公に
 叛き、阿多加賀守に通す、加賀守則 元久公に告す、公
 福永紀伊介を細江に遣して後藤を助く、 久豊公怒て穆
 佐・高城の軍を帥ひ細江を陥る、後藤・福永終に戦死す、
 久豊公ノ臣本田小太郎・綾縫殿介戦死ス、是より日州大に乱れ、山東・河北・宮
 崎・田嶋・木脇・河南・土持・縣・岡留・財部等悉く
 久豊公に背き、 元久公の東征を請ふ、 公即日州に趣
 き宮崎・田嶋を巡る、穂北の大河を渡り峯に陳す、 久
 豊公ハ伊東祐安と共に大軍を卒ひ、綾・本庄・深利・飯
 田・くつら・池尻・白糸・細江數里の間に軍し、兵勢大
 に振ふ、 元久公人を遣し 久豊公に説曰、骨肉の親兵
 を構ふへからず、我未 虎齋丸也、今年五月生ル、
 兄弟の子ハ猶子の如くなる事あたわす、吾をして是を見
 ルを得せしめハ、軍を班して骨肉の恩を全ふせん、 久

豊公従者をして幼児を 元久公の陳營に送る、於是 元
 久公鹿兒嶋に還る、
 十一年甲申
 西州の探題澁川氏西土の牧伯を肥後國二見郷に會ス、新
 納越後守實久 元久公に代て會に趣く、播磨守守久・澁谷
 氏も又會して席上にあり、實久席に進て其上に就く、澁
 谷黨潛に議して曰、實久嶋津氏の威を假て我黨を蔑如す、
 他日の會必其上に就て辱めん、實久か愛妓是ヲ白拍子ト云あり
 て是を聞て實久に告く、他日の會實久先至る、柏原氏カ
 族、前て實久に禮す、實久其意を曉り起て上席に就き密
 に思らく、彼己か上に就かは斬らんと志氣容色に見る、
 相良近江守前續求摩主、起て柏原を引て探題の下に座せし
 め、己は其下に就く、於是實久も又下て謝す、無事なる
 事を得て國に歸る、
 六月、將軍義滿更に 元久公をして日向大隅二州の守護
 職に任す、按ニ、此時三州争乱ス、就中伊東氏日州ヲ争テ己カ封國トス、故ニ二州ノ守護職ヲシテ元久公ニ任セシムル歟、
 此時上總介伊久入道久哲國賊の魁首として仇をなして息
 す、將軍義滿遙に三州の乱を聞き、朝山出雲守師綱・小
 次郎重綱師綱カ弟、に書を齎して西州に遣す、其書曰、為一名字不斷及合戦云々、
 何様ノ事候哉、然所詮確執之義、和睦殊可致忠節、時ニ豊後太守大
 由被仰付如也、仍執達如件、嶋津陸奥守殿奉行、

友親世も又吉弘土佐入道を台使に従へ遣して、和を元久公に勧む、公大慈寺志布に張具して是を待す、傳云、

朝山和歌ヲ以世に鳴、朝山台命を傳へ、又薩州に至り、傳云、

朝山志布志ヲ出テ隅州加治木ニ至ル、加治木氏黒川ニ於、久哲に傳テ是ヲ變ス、加治木カ族高山氏連歌ヲ以是ヲ宴トスト云、

ヘ時ニ平佐、船に乗て歸る、傳云、朝山帰ルニ及テ探題ニ過ル乱ニ在ル歟、アリ、筑後國瀨戸ニ戰死ス、邑人祭テ一ノ塚ヲ神トス、末社ノ神トス、

十二年乙酉 伊作久義二階堂氏を悪て息ます、按ニ、久義嘗テ別府ヲ攻ム、故ニ久義是ヲ患ム事、元久公に請て撃んとす、援テ二階堂ニ求ム聽カス、ハ應永四年ニ出ツ、公群臣を會して議して曰、二階堂・久哲久哲之次子山城守忠朝、市來結

んで外親たり、相共に力を戮せず害甚からん、久義の請に從て是を征せんと師を帥て久義を助く、久義大に歡ひ

先登に進て阿多北方即田布施ナリを攻む、阿多敏馬氏領ス、傳、曆應二年ニ在リ、別府別府氏領ス、傳、康永元年ニアリ、相謀て二階堂を援ふ、元久公軍を分

て是と戦ふ、

十三年丙戌

二月、元久公阿多・別府の援兵を破る、二階堂援の破れたるを見て降を請ひ、阿多北方を棄て市來に遁る、按ニ、中二階堂隠岐守相州ヲ司ル、是ニ至テ百四十年始テ除セラル、於是、元久公妻五代至女ナリ、志布志に迎て阿多北方に居らしめ、老臣をして是を守らしむ、

傳云、後ニ一女ヲ生ム、伊作久義ノ子四郎、左衛門尉勝久ニ妻セテ田布施ヲ勝久ニ賜フ、十四年丁亥

先是伊集院彈正少弼頼久伊十院氏六世元久公ノ妹ヲ尚ス、伊久入道久哲の

河邊城を陥る、傳云、頼久謀方明神ヲ河邊城南ノ山上ニ祭ル、棟札久勢孤ニシテ居城ノ保カタキヲ計リ河邊ヲ元久公ニ獻シ、己ハ平佐ニ通テ志朝ニ據ルト云、頼久はナルコトヲ詳ニセス、久哲平

佐に走る、次子山城守忠朝城主、に寓す、五月四日、久哲病て卒す、享年六十一、此日、元久公軍を進て平佐城を陥る、

忠朝逃亡す、傳云、此時在國司領、悉ク元久公ニ屬ス、十五年戊子

元久公隅州屋久嶋・薩州永良部嶋を種子嶋清時に封ス、按ニ、種子嶋氏、其先平相國清盛之ニ子安藝判官基盛ノ男、左馬頭行盛之、子行基ニ出ツ、平氏滅亡ノ日亡命シテ隠レ、北条時政ニ因テ赦ヲ得、養ハレテ子ト為リ、相州鎌倉ニ居ス、時政將軍頼朝ニ旨テ種子嶋ニ封テ因テ以テ氏トス、後屋久・永良部ノ二嶋ヲ加封セラル、七世孫対馬守頼時氏久公ノ為ニ肥後國ニ戰死ス、清時ハ頼時ノ子也、何レノ時カ二嶋ヲ除セラル、コトヲ知ラス、此時ニ至テ復封セラル、久豊公ノ時薩州筑黄・竹島・黒嶋ヲ賜フ、永享中九世時長ニ至テ三嶋ハ除セラル、十四世時亮日新公ノ女ヲ尚ス、天文十年四月從五位下ニ叙シ、彈正忠二賜テ久時ト稱ス、是ヨリ世々、久字ヲ賜テ名トス、

十六年己丑

九月十日、將軍義持書を齎し使を薩州に遣し、元久公を薩摩國守護に封、按ニ、去年五月將軍義滿薨ス、義持立ツ、故ニ更ニ如此カ、

十七年庚寅

先是將軍使を遣して、元久公を京師によぶ、故に伊十

院頼久先至て邸を京師に造る、應永十四年於是 公國を出て

京師に趣く、**栂山教宗** 栂山氏三世北郷知久 北郷氏四世、此二人ヲ一族ト云、平

田重宗 隅州車良ノ主、阿多時成 老中世攝宿ノ主、此北原久兼ノ主、北

原氏、加治木忠平 左衛門ト稱ス、隅州蒲生清寛ノ主、肝付兼元

六世、又八郎ト稱ス、野邊某 右衛門佐ト稱ス、其先武藏七党ノ内横山党ナ

隅州肝付之主、後日州福鶴院ノ地頭ニ任ス、又隅州深河院ヲ領ス、子孫アリ、志布志ニ居ス、**飢肥某** 隅州廻ノ主也、故ニ

傳、貴久公、等是に從ふ、時に久豊公日州穆佐院に在て伊

東と和す、故に 元久公新納近江守忠臣 世日州志布志ノ主 に命し

て、堅く志布志を守らしめ、其變に備ふ、既に日州油津

に至り、船を發せんとす、久豊公忽爰に至る、衆大に

驚く、元久公曰、彼兄を愛するの道を以來る、何の疑

ふ處かあらん、則召見て曰、賊虚に乗して國に寇せん事

を恐、爾我爲に日州を鎮せよ、久豊公謹て諾す、懇勸

の情昔日に異ならず、傳云、此時久豊公錢教萬ヲ元久公獻ス 元久公既に泉州

境津に至る、伊集院頼久爰に有り、赤松滿祐 播州ノ太守、其先赤松則祐

ニ出ツ、則祐カ子ヲ義則ト云、傳云、大寺美作守元幸、長野左京一人

師に至り將軍義滿に謁す、馬ニ乘テ前驅ス、按ニ、大寺ノ國老

世々鹿兒嶋草牟田邑ヲ領ス、長野氏後衰テ指宿ニ居ス、然モ毛川上ノ伊集

院・新納・町田・伊地知・本田ノ八家ト并テ取方神社祭祀ノ役ニ任ス、

且太守公葬禮ニ役スルカ故ニ、重年公ノ時召サレテ府下ノ土下任ス、
私曰、葬禮役ト云ハ葬禮戰事アル也、本田氏ハ太刀ヲ執ル、梶原氏馬ヲ
牽ク、木藤氏燈灯ヲ執ル、中村氏櫓ヲ執ル、長野氏香炉・香合・茶碗・
茶入・茶洗・湯椀、湯入・匙・茶瓶・燭臺、下火・松明、茶湯・提子ヲ

奉シ、猿渡氏天蓋ヲ執ル、從臣茂又將軍を拜す、於是從臣悉く官に除す、

所謂栂山教宗安藝守、北郷知久中務少輔、阿多時成加賀

守、平田重宗右馬介、加治木兼平能登守、肝付兼元河内

守、蒲生清寛美濃守、北原久兼左馬介、飢肥某伊豆守、

野邊薩摩守に任す、元久公又將軍を己か邸に宴す、厚

情日に加わる、

641 「島津國史」 惣翁公 久哲公

七年庚辰春正月二十五日、惣翁公使鹿屋周防守領鹿屋

院下村・中村池上名・田上名堀内地頭領家職如故、據惣翁

肝屬郡鹿屋郷有下名村・中名村、二月十日、又使菱刈久隆領横川

中名村即郡村高辻帳、中之村、院上村、據菱刈孫太郎系圖、郡村高辻帳、桑原郡、十五日、使伊作氏

領谷山郡三十町及村原、據伊作家譜、加二十四日、使樺山

音久領日向州穆佐院倉岡・深年、據島津支流系圖、郡村高辻帳、倉

村有田村、名為倉岡郷、無倉岡村、而高辻帳、有有田村無倉原村、三月

二日、使樺山音久領上杉左馬助舊領柏杵院、戸次丹後守

舊領宮崎郡如故、同上、觀應二年幕府下文、賜三郎左衛門尉資久柏

子、晦日、使二階堂行貞領河邊郡神殿村、據惣翁公舊譜、二

階堂氏系圖、郡村高辻帳、神殿村 夏四月十九日、使伊作氏領薩摩益山莊谷

山郡和田村及佐屋脇半分、據伊作家譜、益山莊不詳、加世田郷

有盆山村、見第五卷建武四年注、和

田村谷山郷地、郡村高辻帳、屬谿山郡伊佐知佐郷、秋八月三日、使樺谷山郷宇宿村脇田有才脇計、疑是佐屋脇之地。
 山音久領日向方大田郷十町之地、據島津文、流系圖 七日、使鹿屋周防守領鹿屋下村地頭職、據怒翁、公舊譜 冬十二月六日、怒翁公以鹿兒島郡坂下之園一所爲福昌寺領、世復其民、母有所與、同上 十三日、久哲公使澁谷彈正少弼、五郎改稱、彈正少弼、據久哲、公舊譜 重頼領谷山郡及給黎院半分、據久哲、公舊譜 初 久哲公使其子生黒丸爲僧、事見上卷、應安七年 已而 怒翁公養生黒丸以爲己子、加之元服、名久照稱又三郎、爲築宮而處之、寵禮太隆、謂之北殿、於是 久哲公使山田式部・山田彌次郎・酒勾又次郎・上井神五郎爲之傳、山田・酒勾等倚威陵物、于時有北風烈之謔、已而肥後・石井等殺、事在前年 久哲公不悅、與 怒翁公有隙、怒翁公出養子久照、又出夫人、夫人者總州家之子也、遂與 久哲公絶、初 齡岳公臨薨、召本田忠親託以後事曰、爲吾調護兒子、令與山北和睦、毋使生忿爭、及 怒翁公娶於山北、國人相賀、以爲兩家重親、國之福也、至是忠親以 齡岳公遺命諫、公弗聽、忠親怒而去、據怒翁公舊譜、應永記、総州家居碓山城、稱爲山北、蓋謂其地在薩摩山之北、怒翁公娶山北、不見奥州、総州二家舊譜、獨見於此

一同七年庚辰ノ年ヨリハ唯如爲破蜂巢、本田信濃守故氏久ノ御遺言故、雖被歎申、彌鶴總執成重、御臺ヲ歸山北玉ヲ、久照鹿兒島退出ト云云、雖有次第也、信濃守失面目、捨本職上洛畢、雖然久豊怒翁ノ受御讓給之由、自兼日有披露シカハ、雖而被罷下計流、匠作鹿兒島ニ御座間、信濃守歸本職号安了入道、子息ニ相續シテ、今者清水ヲ構重城、誇長尾姫木、被踏痛間敷哉、代々ノ忠節更雖多、葦原ニ而敵陣ヲ切崩、終ニ討死畢、親父其忠功難相續、唯是御兄弟不快故也云々、

御祝言目出度申籠候了、猶以幸甚々、珍重候、不可有盡期候、抑御上之事、年内ハあまりニ月迫候之間、年明候者、早々可有出津候之由申候、重而自探題合力之事御急候、此狀到來候ハ、急々可被立候、外様人々ニハ來月二日必々可有出津之由、以內書申候了、御立之事遅候てハ、惣之國勢可有油断候、返々此狀到來候ハ、急々在所可被立候、恐々謹言、

「應永七乙」

正月廿一日

元久御判

(續久少)
田代殿

〔鹿屋氏文書〕

嶋津庄大隅方鹿屋院内下村弁分、中村池上名弁分、田上名堀内、爲本領上者、地頭領家職事、一曲所宛行也、任先例、可領掌之狀如件、

應永七年正月廿五日

元久(花押)

鹿屋周防守殿

(忠實)

〔元久公御譜中ニ在リ〕

〔正文在樺山氏〕

契約

右、意趣者、仰公方、於私者御大事お存、身之大綱可立御用候、如此申定、縦和讒凶害仁等出來、不慮之子細雖其聞得候、直申入蒙仰可申披候、若此条偽申者、伊勢天照大神 熊野大權現 正八幡大菩薩 諏方上下大明神 稻荷大明神御爵お可罷蒙候、仍契狀如件、

應永七年二月五日

佐渡守親宗(花押)

樺山殿

(音久)

御内

薩摩國谷山郡内三十町并村原等事、爲祈所々相計也、任先例、可被領知之狀如件、

應永七年二月十五日

元久(花押)

伊作殿

(久壽)

〔勝久譜中正文在卷本トアリ、正文伊作家文書中ニ在リ〕

〔正文在樺山源三郎久清〕

嶋津庄日向方穆佐院倉岡名之内林木跡十町、同所先給分七町、同所深年(マコ)當知行分爲給分、所相計也、早任先例、可知行之狀如件、

應永七年二月廿四日

元久(花押)

樺山殿

(音久ト也)

〔此御書、樺山氏二代音久譜中ニ在リ〕

〔正文在樺山源三郎久清〕

日向國柏杵院上榎左馬助跡、同國宮崎郡内戸次丹後守跡事、任御下文之旨、可致領知之狀如件、

應永七年三月二日

元久(花押)

嶋津美濃守殿

(樺山音久ナリ)

〔此御書、樺山家二代音久譜中ニ在リ〕

〔見伊作家譜〕

「國分宮内澤氏藏」

契約

右、旨趣者、重而如此之御一筆、殊喜存候、於向後者大
 小事可申承候間、聊不可有疎略之儀候歟、〔猶歟〕世上雖爲轉變
 事候、可爲一味同心之由承、〔義脱之〕又申候上者、御大事之時者、
 可存身之大事候、若此条々僞申候ハ、
 正八幡三所大菩薩御對お可罷蒙候、

應永七年三月五日

了阿〔花押〕

澤殿

『正文在國分宮内社司澤氏』

〔本文書ハ六四九号文書ト同文ニツキ省略ス〕

「町田氏支流阿多氏系圖」

「五郎久清譜中」

「正文在志布志之土阿多飛彈忠懸」

大隅國大柵寝内本給分事、不可有相違、仍可令領知之狀
 如件、

應永七年三月十七日

〔元久〕陸奥守〔花押〕

町田飛彈守殿

「元久公御譜中」

「正文在田布施土二階堂三左衛門定行」

薩摩國河邊郡之内神殿村之事、爲料所相計申候也、任此
 之旨、無相違可有知行狀如件、

應永七年三月卅日

〔惡勢公也〔元久〕〕
 陸奥守〔花押〕

二階堂山城三郎殿〔行貞ナリ〕

「正文在之」

こんとたうつまて御とも仕候事ハ、三ヶ國そのかくれ
 なく候ところに、させるへんも候ハて、御とままり候
 てハ、〔元久〕あうしうのためと申、又たうさハさしあたり候
 て身のふちんにて候、御ふちのうゑの御おんとおほし
 めされ候て、こんと御とも申たく候、御意にもかけら
 れ申候ハ、畏入候、

一かやうに愚意をのこさす申入候うへハ、しよせん御大
 事を身のたいかうと存、自然とあうしうにおほせ候す
 るしさい候時ハ、身の一大事と存、心のおよひ候する
 ほとハ物かたり仕へく候、

一けふあすのならひ、ふりよのくわうせつなむときこし
 めし候する時ハ、御たつねニあつかり、しんてい申ひ

らくへく候、

一御ほんいむきの事へ、時節ニよて愚意をのこさす申た
んし、身の一大事と存候て、御ようになつへく候、若
此条々いつはり申候へ、

日本國中大小神祇、ことに伊勢天(照)大神宮 正八幡大
ほさつ 諏方上下大明神御爵可蒙候、

應永七年卯月八日

時成(花押)「阿多加賀守致」

久豊(花押)

「久豊公御譜中ニ在リ」

654

「見于伊作譜」

薩摩國谷山郡和田村并佐屋脇半分事、爲祈所と計申也、
任先例、可被領知之狀如件、

應永七年卯月十九日

元久(花押)

伊作殿

「勝久譜中ニ在リ、正文伊作家文書中ニ在卷本ニアリ」

655

「全」

薩摩國【加世田ノ内】益山庄事、爲祈所と計申也、任先例、可被領知之
狀如件、

應永七年卯月十九日

元久(花押)

伊作殿

「此正文、伊作家勝久譜中ニアリ、正文在卷本トアリ」

656

「羽嶋氏文書」

ようえうあるニよて、にたのミやうち、あさなしやうさ
いその一所か事、

かの所りやうへ、ひらのちうたいさうてんの所りやう、
たうちぎやういまニさおいなし、しかる間ようえうある
ニよて、はしまのふことのふ方へまんさうくうし、りん
しのくわやくおとよめて、しくわん五百文かはうニまか
せ候て、今年たつひのへ年より三か年三作、たといほんせに
候ともうけ申ましく候、三か年すぎ候へ、いつ／＼にて
も候へ、もとのかはりおもて、うけ申へく候、六月かは
りお致候間、うけ申候とき、ひとつくりハつくらせ申へ
く候、よてのちのためニ狀くたんのことし、

おうえい七年六月九日

禪室(花押)

かのへたつ年

657

御判

日向國事、爲新國、所預置今河讚岐入道法世也、早可致沙汰之狀如件、

應永七年七月六日

658 上總入道久哲(伊久)与確執事上聞、太以不可然、所詮、互關所

存、先令和陸、可被仰上裁之狀如件、

應永七年七月九日

鳴津陸奥守殿

(奥州)「瀨願也」
右兵衛佐

659 「正文在樺山源三郎久清」

嶋津庄日向方大田郷内十町事、爲給分所相計也、早任先

例、可領知之狀如件、

應永七年八月三日

鳴津美濃守殿

「樺山源三郎也」
「此御書、樺山氏二代音久譜中ニ在リ」

660 「鹿屋氏文書」「元久公御譜中ニ在リ」

大隅國鹿屋院下村地頭職事、依爲由緒、爲給分所宛行也、

任先例、可令領知之狀如件、

應永七年八月七日

(元久)
陸奥守(花押)

鹿屋周防守殿

661 「圓通庵文書」

薩摩國伊集院内飯田村柁木壹町・樋脇五段・小河田□并

ニ蘭壹所奉寄進圓通庵處也者、無他妨任先例、永代可有

御知行候、若違乱煩輩頼久不可有子孫之儀、仍寄進狀如

件、

應永七年八月十八日

(伊集院)
頼久(花押)

「上書」
「圓通庵寄進狀飯田二町」

「伊集院頼久譜中ニ在リ」

662 應永八年辛巳

限田原某

志布志城主新納實久の軍に會し、薩摩九郎に從て犬馬場に戦死す、年十九歳、

同姓某 右の弟

しき時に戦死す、年十六歳、皆月日考へからず、

九月、中野四郎九郎 新納久頼か、從兵にて鶴田に戦死とあり、

伊集院兵部少輔

或は大輔ともあり、又同しく戦死なり、

663 「正文在之」
參洛事度々雖被仰候、京都之時宜、近日御敵進退可然時

664

〔福昌寺鐘銘〕

大日本國鎮西路薩州鷹嶋郡始創關福昌禪寺、新鑄造青銅
洪鐘一口、而以圓通十方之遐邇矣、普聞寺風之永扇焉、

銘曰

狗留孫作	釋迦文傳	層々樓閣	冷々池汧
洪鐘音響	仰驚聖賢	曉明之則	聞徹梵天
昏听之者	徧出黃泉	佛門興世	雲衆集前
推曹溪道	弘少林禪	龍山高聳	福海流連
鬼畜出閻	那落覺眠	魔軍欽畏	群生結緣
諸佛歡喜	諸天降筵	寺院無恙	檀信重佃
娛比須達	壽等神仙	彌崇帝德	永盛聯綿
勤行不怠			

〔元久公御譜中ニ在リ〕

鳴津陸奥守殿

九月十四日

〔高山左衛門尉也〕
政長〔花押〕

〔本文書編年ヲ誤レリ〕

665

〔正文在福昌寺〕

奉寄進

薩摩國鷹嶋郡坂下内中園一ヶ所事 良本居家敷之事也、

右、彼園者、元久重代相傳所也、雖然、依有志、奉寄進福
昌寺處也、仍令停止万雜公事諸役等、限永代可有知行候、
若於此所有成違乱之輩者、元久不可爲子孫也、仍寄進之
狀如件、

應永七年 庚辰十二月六日 元久〔花押〕

〔元久公御譜中ニ在リ〕

665 福昌寺版鐘銘

大日本國薩摩州 鷹嶋郡玉龍山 福昌禪寺之常住

應永七禩龍集上章 執徐星紀下幹日

大檀那前陸奥太守 藤原元久助緣開闢

住持比丘石屋叟眞梁置之

〔八行ニカケリ〕

〔右二通、元久公御譜中ニ在リ〕

薩摩國之内谷山郡・同國給黎院半分事

右、爲祈所々預申也、任先例、可被沙汰之狀如件、

應永七年十二月十三日 (伊久) 久哲(花押)

(重頼) 澁谷彈正少弼殿

那答院内中津川名并黒木村事者、重茂雖爲由緒、依申談子細候、遊進所実也、仍爲後日之狀如件、

應永七年十二月廿一日 (赤谷) 重茂(花押)

清敷殿

ゆつりあたふ國分ふんこのかミところ

さつまの國さつまこほりなりあたミやうのうち、はしまのうら三町ふんの事、本田ひらきさんやかかい、しいしさかいハ、せんれいニまかせてやうたいをかきてゆつりわたすところなり、たのさまたけなくちきやうあるへく候、たゞしこのうちそしともニゆつるところあり、いさゝかいらんわつらひのきあるへからず、その外ハそうり

やうちきやうあるへく候、くはうやく、く事等の事、ふん／＼ニしたかてきんせさせらるへく候、このむねをそ

むき候て、ふんこのかミかめいにしたかハす候ものハ、

禪祐かしそんたるましく候、仍後のためニゆつり狀如件、

應永八年三月七日 禪祐(花押)

應永八年三月七日

八年辛巳春三月八日、恕翁公使田代清久領日向國柏原

保十町地、據恕翁公舊譜 澁谷四族皆應 久哲公、獨鶴田氏附

恕翁公、久哲公遣大村氏・清敷氏・柏原氏・東郷氏・

高城氏等、攻鶴田某於鶴田城、軍萩平、夏四月二十三日、

恕翁公引兵如市來、屯鎮守山、將攻市來忠家、久哲公

將兵救之、忠家遣直山新左衛門・有川彈正入道、告久

哲公曰、敵軍僞爲攻市來者、聲言趣總陣尾、而其實將救

鶴田、爲公計者、莫若之那答院、與大村某合兵攻鶴田、

公從其計還軍萩平、據恕翁公・久哲公舊譜、山田聖榮自記、應永記、鶴田城遺墟去鶴田郷地頭鎮十五町許、萩

平八町許、並在東南係鶴田村、市來郷今無鎮守山、伊集院苗代川、有鎮守山、苗代川舊屬市來郷養母村、市來郷長里村有地名陣尾、

月二十一日、久哲公使伊作大隅守領薩摩南郷、據伊作家譜

九月五日、恕翁公將三千五百騎救鶴田、屯熊越、久

哲公與二子守久・忠朝俱自萩平出岩腋、潛軍熊越下、十

日、忍翁公軍入鶴田城、二十日、鶴田城出兵一千屯鴨巢、久哲公遣相良讚岐守自賴、率二百人、屯其西北以備之、二十一日、鶴田城遣兵五百、屯神崎山、大村出羽守大村出目、言於久哲公曰、若使敵軍趣丸尾城、據善福寺山、

而與神崎山兵合、則我軍往來絕矣、先即制人、後則見制於人、請先取善福寺山、久哲公從之、遣東鄉某、副田

淡路守將百四十餘人、往據善福寺山、據忍翁公、久哲公舊譜、應永記、副田淡

路守事、詳見下卷應永二十年、熊越鴨巢去鶴田鄉地頭館二十町許、並在東、神崎山十町許在東南、丸尾城遺墟二十町許在東、善福寺山五町許在南、冬十月十日、久哲公使伊作大隅守領日置莊名主職、

據伊作家譜、久哲公乞師於球麻相良氏、相良兵庫允實長與牛

屎某將三百騎、助久哲公、踰紫尾山至簾迫、二十五

日、久哲公與忍翁公戰於千町田間、忍翁公不勝、

鶴田某奔麥刈、忍翁公罷師而還、忍翁公、久哲公舊譜、應永記、山田聖榮自記、各

記此段合戰事、互多抵牾、今據久哲公舊譜、應永記、撰其大略而書之、紫尾山在鶴田鄉地頭館西北三里許、千町田間在鶴田鄉、東至神崎山、西至善福寺山、南至鴨巢、北至秋平、實長、前賴之子也、據改撰諸家系譜、相良初

前賴見上卷永和二年、本田忠親怒、忍翁公不用其言而去、前年、是歲間、公之

如鶴田也、推又三郎久照為大將、引兵攻志布志、屯寶滿

寺、新納實久自松尾城將兵出犬馬場、濟川擊破之、忠親

引去、據忍翁公舊譜、山田聖榮自記、寶滿寺在志布志地頭館東三町許、寺前有川、今名前川、自松尾城東南至犬馬場三町、又東南濟前

川至寶滿寺二町、新納實久居松尾城、事見第六卷康安元年、忍翁公舊譜、是戰也、野邊薩摩九郎部下熊田原兄弟死、兄十九、弟十六、二人

容貌甚偉、後人為仁王二軀立於寶滿寺門外、號稱熊田原兄弟像云、郡山遜志曰、聞諸志布志人、今寶滿寺門外仁王形体殘欠、相傳以為當時所立、雖不辨其真偽、然要是故物、按舊譜以熊田原兄弟、為野邊薩摩九郎部下士、然當時野邊氏屬實久敵、抑屬忠親敵、舊譜文不分明、姑置是

771 「正文在田代氏」

嶋津庄日向方柏原保内拾町分之事、為祈所々相計也、任先例、可被領知之狀如件、

應永八年三月八日 元久(花押)

田代刑部少輔殿

「元久公御譜中ニ在リ」

672 「伊久公御譜中」

應永八年辛丑四月廿三日、元久率太軍發向市來、構陣

營於鎮守山、久哲援市來之危急、而越山也、市來筑前守

忠家使直山新左衛門・有川彈正入道、達酒勾某曰、元

久方者有可乘總陣尾之闕、如此則寄附敵於近所、雖有可

決安否之臆念、未見急遽之可為攻責道、謂緩鶴田之陣為

救渠之急謀畧乎、敢非可怠慢之時、久哲速往那答院、增

勢於大村某者可乎、若容此言則息男太郎家親亦可為供奉、

久哲喜悅且為評議、忠家具中村左京亮・田口左近將監、

候久哲之陣、評議既定則赴那答院矣、如忠家之言鶴田某

歸心於元久、雖爲密事既露顯矣、久哲催領土之騎步發向其地、構陣營於萩平、大村・清色・東郷・高城已下勇士向鶴田攻責之際、應永八年九月五日、元久自鹿兒島・谷山・伊集院、至日隅二州催騎步、共三千五百餘騎鳴兵鼓來、而登熊越構大陣矣、於茲乎久哲屯于諏方坊近所、嫡子守久・二男忠朝爲將、以率二百許輩、而過萩平・岩腋之陣、渡川進熊越之陣下、構一陣矣、同十日、熊越陣中之敵兵二千騎許乘于鶴田古城、又同廿日、古城之兵使一千餘騎渡川、構陣於鶯巢、故我陣絕通路難饑之至也、于時相良讚岐守自賴率二百許、過萩平之陣渡川、鶯巢陣之乾構一陣於鶴翼形、同廿一日、古城之兵五百許登神崎山構陣矣、丁此之時大村出羽守謂久哲曰、窺謀敵陣之道則一戰有近邇乎、敢勿徬徨、今夜築一陣於善福寺、對神崎山則絕忽陣之通路、然則我之得利或有之乎、是乎非乎宜依久哲之計、久哲亦是之、而後欲令東郷・入來往以爲構陣、各應諾焉、就中副田淡路守謂久哲曰、重賴罹病痾歸私宅矣、雖通此令可移明日、當急難之時不可固辭、速可到其地、下庭下則久哲亦下庭上揖之者深厚也、淡路守領精兵百四五十人、陣善福寺、于時從球麻差一价曰、聞當陣無勢之聲不能忍宿、使實長領救兵速到于其地、其間楚忽合

戰停之可也、同年十月中旬、實長與牛屎某領精兵三百騎、自紫尾山至簾迫古陣、先屯于此、以窺見敵味方陣陣也、十月廿五日、敵軍爲三分進千町田間、已及合戰、自酉初刻至日入挑戰、自恃戰死被傷者不知其數、於茲乎鶴田某請降、與元久俱向菱刈引退矣、雖爲多勢戰場敗立、有地利與天運乎矣、

673 「應永記」

一同八年辛巳、元久卒大勢、四月廿三日ニ市來ニ押寄鎮守ノ山ニ陣取玉フ、總州即時ニ有御越山、筑前守忠家内々意趣ヲ直山新左衛門・有河彈正入道ヲ以酒匂方ニ被申、其謂者、敵方ハ惣陣カ尾ニ可被乘之由申候、左候者當城近ク引寄可爲安否之處ニ、無指絡キモ候、鶴田之御陳錯乱タルカト覺候、是非祁答院ニ有御越、大村方ニ可被力副叟肝要ニ候、左様ニ候者太郎家親御供可致存候ト也、有總州御悅喜、筑州中村ノ左京亮・田口ノ左近將監召具シ而、於于總州ノ御宿有談合、聽而鶴田ニ有御越、彼城ヲ被取卷、元久ハ以大勢後卷有、相隨人々者誰々ソ、高城・伊集院・谷山・鹿兒島・杵占・肝付・佐多・大始良・北郷・桃山・新納・梅北・

財部・税所・廻・玉利・加治木・平山・餅田・平松・中津野・平瀬・吉田・蒲生・和田・高木・眞幸・馬越・平良・曾木・栗野何茂有奔走、其勢三千五百騎、九月五日、熊越ヲ打上而大陣ヲ被取、依之御方陳成齋間、總州ハ諏訪ノ坊近キ處ニ有御座、嫡子守久・次男忠朝モ其勢貳百計河ヲ打渡リ、萩ノ平ヲ打通リ岩腋ノ陣ヲ打過、熊越ノ陣ノ下ニ潛入テ取陣玉ヲ、敵御方見之、無不擾人者、去程ニ同十日、熊越勢二千騎計差下テ鶴田ノ古城ニ被乗^乗ル、同廿日ニ古城ノ勢千餘騎程ニテ河ヲ渡、鶴巢ノ陳ヲ被取、御方ノ通路ハ可爲難儀トテ相良讚岐守自賴萩平陳過テ、其勢二百計拔連テ河ヲ打渡、鶴巢陳之戌亥ニ鶴翅形ノ陣ヲ取、亦次日廿一日、古城ノ勢ハ五百計ニテ神崎山ニ取上陳ヲ取、大村・羽州・總州ニ被申^乗ルハ、敵方ハ巧了見ヲ仕候、今夜熊越勢敵城ニ入候而丸尾カ城ヲ取下リ、善福寺ニ陳取神崎山ニ取合候者、惣陳切通路、三ヶ國ノ安否ヲ可仕候カト存候、是非ヲ有御計善福寺ヲ可被召、總州尤可然、入來・東郷有御憑之由被仰^乗利、先畏ト被申、中ニモ副田淡路守總州ニ被申者、重頼依當病被歸在所ニ候、此左右雖可申遺候明日ニ可更延、誠ニ御大綱ニ見得候、

674

〔元久公御曆中〕

非可辭退、此在所ニ可取乘候ト被申、御晦玉リ、總州ハ庭ニ下合給フ、禮義誠深シ、大將ノ法ト見得タリ、兩手甲百四五十ニ而善福寺ニ被取乘、其勢從諸陳茂見物ス、淡路守黒綴腹卷ニ紅ノ鉢卷ニテ大長刀鞆^{オヤウシ}被持、哀器量哉トソ被褒美^褒ル、昔之王霸呼池渡堅漢土ヲ如助、左程ニ御方無勢之由求麻ヨリ被仰、實長急速ニ可出陳候、其程楚忽ニ御合戰不可然候由被申遺、同月中旬ニ實長牛屎ヲ有同道被着陳、馬上三百騎ト云々、自紫尾山簾迫ノ古陳ニ被支、敵御方見物之、然ニ敵城ノ通路モ不切、鏡山石・熊越者開合セタレ共、後卷之勢共モ勸忍難叶哉有ケン、安否合戰ト見得而敵方之陳々ノ勢ハ三手ニ作懸計利、十月廿五日酉ノ始ニ、千町田間ニ待請ケ、日入迄之切合也、兩方大勢討死、手負不知數、去共敵方道ノ口ヲ有所望開城、鶴田方ト打連給フ、元久菱刈ニ引退玉ヒ、合戰者可依其在所更成者、大勢茂不叶ト申^乗ル、

一澁谷四ヶ所之鶴田某、畔於久哲歸心於元久、其陰謀既露顯矣乎、久哲使大村・清色・柏原・東郷・高城等、向

其地構陳柵於萩原屢攻鶴田也、元久不忍鶴田之聞急難、

而應永八年辛巳九月五日、率鷹島・谷山・伊集院・禰

占・佐多・肝付・大始良・新納・北郷・樺山・梅北・

財部・稅所・廻・玉利・加治木・平山・餅田・平松・

中津野・平瀬・吉田・蒲生・和田・高木・眞幸・栗野

・馬越・平良・曾木之兵、共三千五百騎到其地、先構

陣於熊越、而後構陣於鶴田古城・鷲巢・神崎山諸所、

日々發輕銳之士、相挑飛羽箭侮大敵互死者多矣、被傷

者不可勝記也、他日新納八郎三郎久顯越後守實候于元

久之本營、莅于退出之期、敵兵發出、久顯直爲前矛馳

對之、已爲合戰太刀初之地、而久顯之從兵中野四郎九

郎已下數輩戰死、伊集院兵部太輔亦遂戰死也、久哲軍

中亦澁谷下村某已下數十人斬獲矣、今日敵兵者攻寄神

崎本營外牆之際、味方者攻入久哲陣之牆內、自他雜亂

未分勝敗、任天命盡筋力挑戰、果元久方勝利也、雖然

遠越山路援兵少糧鹽亦不饒、且復鶴田狹小一所士卒不

多也、我之軍中募軍功企訴訟、當日軍務輕薄怠慢、旁

以無如之何、於茲豫將行祿賜、谷山郡內山田村三十町

者、雖爲山田殿名字之地、強借之以畀吉田某、以和田

村三十町畀蒲生某、由是兩輩廻和諧之計策、附屬鶴田

城於久哲、鶴田某遁麥刈、而後元久亦歸陣也、其後畀
谷山中村之內六町、與佐屋脇之內今綱德村於山田某、是
又名字之地所望返地也、

675 「怨翁公譜中」

一本田信濃守忠親憎久哲與元久有違隔、既以出奔焉、元

久鶴田在陣之際、久哲三男又三郎久照号北稱之於大將、

催士卒爲國敵、已自櫛間至志布志、攻入于向川原之下

寶滿寺、時新納越後守實久發出于大馬場、對于敵兵、

先隔川流飛羽箭、後渡川流及合戰、互戰死被傷其數多

矣、就中野邊薩摩九郎之從兵、熊田原兄弟十九歲十六

歲之若冠遂戰死、心性容儀越于衆人、是人皆莫不悒惜、

其後寶滿寺門前彫刻夫兄弟形像於二王、安置之於左右、

所以爲後世安樂也、

676 「見于伊作譜」

薩摩國之內日置庄之內名主職事、所申預之也、仍狀如件、

應永八年八月十日〔十月十日〕

伊作大隅守殿〔勝久久卷〕

久哲〔伊久〕（花押）

〔此御書、伊久公御譜中ニ洩ル、也〕

677

「見于伊作譜」

薩摩國之内南郷事焉

右、爲祈所々申預置也、任先例、可致沙汰之狀如件、

應永八年八月廿一日

(伊久) 久哲(花押)

伊作大隅守殿

「此正文、伊作家文書中ニ在リ」

「勝久譜中正文在卷本トアリ」

678

「在山田久興譜中」

「正文在山田七郎右衛門久通」

又帖佐源二郎方へ、萬被仰之由承長入候、

御札委細承候、就其者長々其堺ニ御番ニ御座候、御辛勞

察存候、万御意共可請子細多々候へとも、今之時分此堺

ニ逗留申候之間、無其儀候、いかゞに存候、兼又谷山之

内山田之事、御本領之事に候、今程吉田方依不立御用候、

吉田之事所領共荒所ニ成候間、先知行之由被申候程、可

被遣候、當知行にて御座候とも、屋形御難義之時者、可

有借御申候、先々爲御心得内義申入候、又此方之時宜者

(本文書ハ六八〇号文書ト同一ナルベシ)

巨細石井方へ申候、恐々謹言、

(朱力キ)

「應永八年」九月十一日

經安(花押)

山田加賀守殿
御返報

村田肥前守

「上包」

山田加賀守殿

御返報

經安

679

「元久公御譜中」

「正文在垂水兼野口孝左衛門」

下 大隅國姫木中城之村一所之事、野口重代相傳之爲居

屋敷、被宛下所也、仍爲後日之狀如件、

應永八年十月九日

(元久) 久哲(花押)

野口太郎兵衛尉殿

680

「正文在伊作家文書中」「勝久譜中正文在卷本トアリ」

薩摩國之内日置庄之内名主職事、所申預候也、仍狀如件、

應永八年十月十日

(伊久) 久哲(花押)

伊作大隅守殿

681

「見于伊作譜」

薩摩國於知覽見院、自元久方之号祈所、先日知行分之水田貳拾町事、

右、爲祈所可有知行之狀、仍如件、

應永八年十一月十六日 (伊久) 久哲(花押)

伊作大隅守殿 (久義)

「此正文、伊作家文書中ニ在リ、勝久譜中正文有之トアリ」

682 「正文在清水楞嚴寺」

「道通妙祐」

「新田二反」
「大道賢寄進狀」

(花押)

奉寄進 惣勝寺

水田貳段弟子丸名之内新田北村

右、志意趣者、爲親吉之二親道通妙祐頓證菩提也、但彼之水田本主請被申時者、本米以六石可有御訪候、仍爲後日之寄進狀之如件、

應永八年辛十二月廿三日

683 今度時節候、志之至難申盡悦入候、隨而永々御用心痛敷

存候、日州事者悉御方候之間、はや一方暇おあけ候、兼々御本意お可被達事不可有幾候らん、就其一所うちあけ

候はん時者、最前可致合力候、此段吉牟田申含候之間、

定可申候哉、恐々謹言、

「應永八年、比也」
五月九日 元久御花押

限本殿

684 「正文在楞嚴寺」

「ウラ」
「忠家」

(花押)

寄進

惣勝寺

合壹段定

右、大隅國弟子丸名内新田壹段、池袋宮内殿方ヨリ本物返ニ米壹石壹斗五升ニ買得仕候而、爲忠家二親後菩提所奉寄附也、若本主致本物之沙汰之時者、以彼米二親歸日(生脱之)お可有御吊之狀如件、

應永九年二月十八日

伴忠家(略押)

685 『野田感應寺文書』

長樂寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

應永九年六月十八日

大相國源義滿判

祖果西堂

686 『上原氏文書』

大隅國內弥那尾村地頭職事、右爲祈所所預置也、任先例、可被知行之狀如件、

應永九年七月廿五日

『元久公ナラン』
沙弥(花押)

687 「國史」

久哲公
義天公

九年壬午秋八月十六日、故幕府賜 久哲公書曰、近聞鎮西海賊屢侵明國、果有此輩、遣兵誅之、毋忽、據久哲公舊譜 冬

十二月十三日、義天公許伊地知縫殿助以大隅方下大隅

之地、曰、俟有關所、然後授之、據義天公舊譜、據秩父十郎兵衛系圖、此云伊地知縫殿助當是季

豊、季豊、季隨之孫、季隨見第六卷觀應一年、

688 大隅國宮内万得房跡功得丸事、爲祈所所宛行也、早任先

例、可領知狀如件、

應永九年八月十二日

〔元久〕
陸奥守御判

隈本石見守殿

鎮西邊賊船等、連々令渡唐、以便宜在所及狼藉云々、太

招罪科歟、於風聞之輩者、不廻時日差遣軍勢、可加治罰、況至現形之族哉、彼是嚴密可致其沙汰、更不可有緩怠之

狀如件、

應永九年八月十六日

〔義濟將軍〕
(花押)

嶋津上總入道殿

〔伊久公御譜中ニ在リ〕

690

「川邊神社由緒」「伊作家譜中加賀守久幸譜中ニアリ」

寄進狀

松崎觀音堂

長興寺

右、件之寄進水田松崎多のき田二段、うゑのはらのふ内、めうけんのとりのいさかひ、觀音堂ちやうこうしに寄進申處実なり、まんさう公事を令停止、仍寄進狀如件、

應永九壬午年八月十八日

伊作加賀守久幸(花押)

〔上書ニ〕
〔寄進狀松崎觀音堂〕

691 「全」

覺

一 忠國公御當家十代之太守陸奥守様と奉申候事、

一 玉泉智芳大姉者忠國公御息女、薩摩守用久公御内室、

日新公之大叔母様ニ而御座候事、

一 徳瑤淨輝居士者、御俗名河内守久逸公と奉申候、玉泉

様之御弟ニ而 日新公之祖父様ニ而御座候事、

一 玉泉寺事、上代ハ長興寺と哉覽爲申由候、明應五年七

月廿三日ニ忠國公御息女御逝去、御法名玉泉智芳大姉

之御寺ニ罷成、玉泉と被改之候事、

右、玉泉寺之家破損ニ付、修補之訴訟貴僧被申上候書

物ニ、御先祖玉泉寺由來致相違候、依夫大田小平次殿

ヘ尋候處、御記録被見合承届書付進之候、以上、

寛文九年酉閏十月十四日 堀四郎左衛門判

玉泉寺俗存貴僧

692 「正文在福昌寺」

鹿兒嶋城藏ニ置候新足、銀其外唐物、武具之具足までも、

某不慮之子細時者、藏お預候北原新右衛門尉〔兵純〕・福崎太郎

次郎〔又重〕兩人にて、法印裏堅以誓文御寺〔又重〕江渡可申之由申付候、

若又彼等不慮之子細時者、此仁共跡相續之者か渡可申候、

爲後證進狀候、恐惶謹言、

應永九年 九月十一日

元久(花押)

福昌寺侍者御中

693 「蒲池氏文書」

今度被致忠節候之間、蒲池郷本名内蒲生拾三町并瀬高五

町不可有相違候、可有御知行候、但一家中事者可寄振舞

候、於奔走方者色々可致□中候、御心落候ハ、可目出候、

仍狀如件、

應永第九十月廿三日 直久(花押)

蒲池左衛門次郎殿

694 「正文在福昌寺」

しふしに御をき候れうそく、から物、そのほかふくまで

も、あつかり申候あひた、くはうふりよの御ときハ、わ

れらりやう人にてほう〔宝〕ゐんのうらにせい〔書〕もん〔文〕をもて、ふ

くしやうしへことくもちてまいらせあけ候へく候、

われく又ふりよの事も候はん時ハ、われらかあとをつ

き候はん子もちてまいり候へく候、仍爲後之狀如件、

應永九年十二月六日 なへくら久頼(花押)

697

「在文庫」

「口裏」
「嶋津陸奥守殿被下案文」

700

「載山田聖榮忠尚傳」

讓渡 嫡子百王丸所

207

696

『廣濟寺文書』

薩摩國伊集院内柿本門五段、同岩屋谷五段事、

右、彼所領者、任道忍之讓、依有志、崇悟書記仁限永代

奉讓之處也、若於此所領違乱煩申者候者、頼久不可爲子

孫候、仍爲後日讓狀如件、

應永九年十二月廿七日

「此文書、伊集院頼久譜中ニ在リ」

『伊集院準正少將』

頼久(花押)

698

嶋津陸奥守殿

「此卷通ハ守久ノ譜中ニナシ、年間知レス、是ニノ七置也」

699 應永十年癸未

限江某 新納實久の臣にて山東海江田に従軍し、攻めて倉底城を陥るの時、戦死なりと云、福永紀伊介

守護の兵にて義天公山東に鎮たるころ守護と協ひ玉はず、細江城にて戦争に及ひしことあり、其時の戦死なり、本田小

太郎 義天公方に、綾縫殿助 亦同し方に、
て戦死なり、

695

「伊地知氏文書」

長の入道玄林(花押)

「上カキ」
「なへくら」

嶋津御庄大隅方下大隅郡事、闕次第所可宛行也、仍證狀

如件、

應永九年十二月十三日

久豊(花押)

伊地知縫殿允殿

「久豊公御譜中、正文在伊地知縫殿重治トアリ」

嶋津判官入道徳佛申

薩摩國知行所之事、十年九月以來押妨云々、就申旨被下御判了、早止其妨、如元避渡下地お徳佛、向後令和陸之由所被仰下也、仍執達如件、

薩摩國知行分所之事、去年九月以來嶋津陸奥守押妨云々、甚不可然、早止其妨、爲亡父久哲遺跡、惣領嶋津判官入道徳佛領掌不可有相違之狀如件、

「朱カキ」
「應永九年也ト、守久譜中ニ在リ」

薩摩國谷山郡内山田・上別苻兩村之事

右所領者、重代相傳地也、

亡父忠經讓狀并關東御下知以下證文等をあひそめて、ひやくわう丸讓渡ところ也、若ひやくわう丸男子なくハ、わう五郎丸ニ可讓也、仍爲後日以自筆かきおく狀如件、

應永十年二月七日

山田出羽守入道玄威
久興(花押)

701 「正文在福昌寺」

たうしよにあつかり申候かね、からもの、御れうそく、ふくまでも、くはうふりよの御ときハ、われくりやう人にてほうゐんのおもてにせいもんをつかまつり、ことくふくしやうしへまいらせあげ候へく候、われらふりよの時ハ、あとをつき候はんこもちてまいるへく候、仍こうせうのためニかくのことく申あげ狀如件、

應永十年三月廿一日

ちくさき太郎一郎
久重(花押)
きたはらしん多もん
氏純(花押)

「上カキ」
「福崎北原」

702 「惣翁公御譜中」

一山東當陷海江田倉底城之時、敵方宮崎士卒數十人斬獲矣、于時新納越後守實久之臣隈江某遂戰死也、

703 「企」

一加江田本城更加修補、使阿多加賀守爲地頭、於茲乎川南面々悉屬守護旗下、故守護領穆佐三百町及池尻・白糸・細江諸所使伊集院長門守久俊爲守宰、久俊者元久之爲叔父、是以如斯、經二三箇年後、久俊強致辭矣、然則對伊東・土持等、可山東之爲守宰器量之人以誰爲乎、執事古舊之臣共曰、舍弟南殿久豐、元久亦好焉、而後達件旨於久豐、久豐報曰、久俊致辭之後爲夫宰、則匪啻安靜之不得籌策、不合士卒之心公私之嘲起亂之基、固辭再三也、元久又曰、國中老舊以汝欲爲夫宰、予亦以爲兄弟敢無疑心、山東之於令宰乎何有、於是輒諾矣、元久喜悅之餘期後來曰、伊東之領地闕所之時節宜宛行矣、久豐不得已而應諾、將赴山東、久豐之母佐多三郎左衛門尉忠光女、由是佐多一族若狹守之弟彌二郎・讚岐守・樺山伊賀守惟音号池、末弘備前守兄弟・本田一族・伊地知一族其外他家勇銳之數輩各奮臂、爲從軍勇進、後來未知、當今誰敢有爲疑乎、

〔仁〕

一久豊移居穆佐高城、而池尻・白糸・細江之城各處勇銳之士、山東已如盤石、故河南面々盡爲出仕、無一人之有異意者、而況於從久豊所到越之士乎、如斯則元久何爲毫髮之疑乎、不計久豊忽爲伊東大和守祐堯之聲、因茲日向薩摩之間匪皆有荒說、兄弟之間既爲冰炭、而經年月矣、於茲乎久豊與祐堯爲親子之好、山東百事不待守護之命而專自謀、當此之時久豊之家臣有後藤者、守細江城、後藤之子通阿多加賀守、欲屬守護、故入守護兵於細江城、警衛者孔堅矣、于時久豊密發士卒、忽陷夫城、後藤之一族三十餘輩盡所以屠殺也、守護方之守兵福永紀伊介遂戰死矣、久豊方本田小太郎・綾縫殿助戰死也、由是河南對細江城爲咫尺千里之隔也、

〔御系圖〕

一 忠國

初貴久 又三郎

〔御譜二六修理大夫之作也〕
修理亮 陸奥守

應永十年癸未五月二日誕生于穆佐高城、御母伊東大

〔御譜二八伊東氏女之作也〕
和守祐堯女也、

〔國史 恕翁公〕

十年癸未秋九月朔日、恕翁公使伊作氏領阿多郡田布施、
據伊作家譜、按二階堂氏世居田布施、而公賜伊作氏狀云、二階堂本知行田布施、豈此時已喪田布施耶、本知行猶云舊邑、 冬十一月二十九日、賜澁谷重頼鹿兒島郡武村、揖宿郡成河村曰、卿有歸順之意、故且以此賞之、因與卿約、他日儻得山北故地復還於我、
據恕翁公舊譜、郡村高辻帳、揖宿郡指宿郷有鳴川村、今鳴川村屬山川郷、 使禰震左馬助山城守改稱左馬助、清平領下大隅・大禰寢之地曰、下大隅除木谷村、大禰寢除郡本村外、皆分給之、
據恕翁公舊譜、小松氏系圖 十二月七日、播磨守守久賜澁谷重頼山門院西方、薩摩郡荒皮・羽島、
據入來院主馬文書、據此則當時荒皮・羽島皆屬薩摩郡、郡村高辻帳、則荒川屬日置郡、羽島屬薩摩郡、並在串木野郷、頭書串木野郷、 半屬日置郡、半屬薩摩郡、荒皮或作荒川、十三日、恕翁公遺澁谷重頼書曰、近聞播州與君西方、荒河・羽島、他日彼或奪之、我將授之矣、因與之盟書曰、同好惡、濟患難、雖有讒惡、弗肯聽用、有渝此言、諸神殛之、
據恕翁公舊譜

〔見于伊作譜〕

薩摩國阿多郡二階堂本知行多布施間事、依志存進置候、早任先例、可有御知行候、爲後日狀如件、

應永十年九月一日 元久(花押)

(久慈) 伊作殿

「此正文、伊作家文書中ニアリ、勝久譜中正文有之トアリ」

708 「全」

阿多河邊知覽見御本知行事、身大綱存申、可沙汰候、聊不可有等閑之儀候、爲後日之狀如件、

應永十年九月一日 元久(花押)

伊作殿

「此正文、伊作家文書中ニアリ、勝久譜中正文在卷本トアリ」

709 『水引執印文書』

薩摩國阿多郡内五代院・同國指宿郡内石堂村・同國万徳上村入道跡之事、今時分於被致忠節者、爲祈所不可有相違之狀如件、

應永十年十月九日 陸奥守(花押)

執印豊前守殿

『左衛門大夫友雄——遠江守友躬——豊前守友令』

710 『入來院氏文書』「元久公御譜中ニ在リ」

薩摩國鹿兒嶋郡武之村并指宿之内成河村事、依有御志所進置也、雖然申談候山北所領御知行之時者、可返給候、

仍狀如件、

應永十年十一月廿九日 元久(花押)

澁谷彈正少弼殿

711 「元久公御譜中」

「正文在祢寢右近重永」

大隅國下大隅郡之内自坂上、此之内除木谷村并大祢寢之内郡本之村、爲料所所宛行也、早任先例、可領知之狀如件、

應永十年十一月廿九日 元久(花押)

祢寢左馬助入道殿

712 『入來院氏文書』「此書守久ノ譜中ニ在リ」

薩摩國山門院西方之事并薩摩郡之内荒皮・羽嶋之事、可有御忠節之由承候之間、所置進候也、任先例、可有知行之狀如件、

應永拾年十二月七日 守久(花押)

澁谷彈正少弼殿

713 『入來院氏文書』

契約

一 雖爲天下傳變、就大小事、可成一味同心之思申事、
一 自然東郷殿・柏原殿、我等同心之儀被申候時者、東郷者銚淵并黒木・見成河、柏原者湯田、此外者當知行共可被置差事、

一 於三ヶ國中、如何様雖不慮之子細之候、相互見次被見次可申事、

一 讒者出來、縱雖何事申候、不可及信用之事、
一 今度申談候条々、自今以後不可有相違候事、

若此条々詐申候者、

正八幡大菩薩 稻莉大明神(徳) 諏方上下大明神可蒙御罰候、

應永十年十二月十三日

元久(花押)

澁谷彈正小弼殿(重頼)(少)

「元久公御譜中ニ在リ」

714 「入來院氏文書」

今度之刻、依御志自幡州方、山門西方并荒河・羽嶋被進(守久)之候、其旨存知仕候き、縱幡州雖不慮之子細被申候、身之沙汰して、彼在所事共可申談候、恐々謹言、

(元永十年)

十二月十三日

陸奥守元久(花押)

謹上 澁谷彈正小弼殿(重頼)(少)

「包紙」 「やまとにしかた・あら川・はしまき判やう」

謹上 澁谷彈正少弼殿 陸奥守元久

「元久公御譜中ニ在リ」

715 「國史」 忍翁公 久哲公

十一年甲申春正月十一日、忍翁公以鹿兒島郡本水田名

所小坂本一町爲福昌寺領、用資崇鑑禪尼冥福、世世除其

課役、據忍翁公舊譜、崇鑑蓋崇欽 又以鹿兒島郡某田園爲且過

同集庵領、用資先孝 齡岳公冥福、除其課役、同上、田園地

孝當作者、傳寫誤耳、福昌寺呈狀云、古者福昌寺爲九州僧錄所、石屋禪師年忌法事、繼徒應至、蓋數百人、因作一舎以處之、名曰且過同集庵、

其後庵廢、今福昌寺門前地藏堂西南地、呼曰福昌寺洗濯屋敷者、相傳以爲同集庵遺蹟、而福昌寺主管鎌田氏私宅傍有小屋、號稱且過寮云、今按福昌寺年代記、石屋禪師圓寂於應永三十年、而是歲忍翁公

以田園爲且過同集庵領、則同集庵非始於石屋年忌法事時也、夏四月五日、久哲公使伊作大隅守領加世田別府大浦村、

郡村高辻候、加世田郷有大浦村、 忍翁公

久哲公和解之、因以 忍翁公爲日向大隅守護職、據忍翁公舊譜、山

田聖榮日記云、將軍義滿遣朝山出雲守師綱、小二郎重綱、齋御教書、論忍翁公・久哲公使罷戰爭、二公聽命、朝山歸京師、此事無年、今因幕府遺書論二公事、而類叙之、而聖榮以此爲今川了俊探題時事、按了俊在

應安四年如筑紫、應永二年去筑紫歸京師、而忍翁公與久哲公不相能、在應永六年以後、則了俊爲探題時、不應有是事也、聖榮未之考耳、又久哲公

舊譜載今川了俊十二月九日書云、上使朝山殿既至、國中無爲、天下大

舊譜載今川了俊十二月九日書云、上使朝山殿既至、國中無爲、天下大

慶、此書無年、然觀書中所言本末、皆了俊為探題時事、又朝山師綱・重
 綱來、見明德二年、又今川播磨守代我忠曾井、將軍進朝山殿論播磨守使
 罷兵、見應永元年注、蓋了俊為筑紫探題二十餘年矣、其間朝山師綱至薩
 摩者非一次、而將軍進朝山殿論今川播磨守使罷兵、事似與了俊書所謂國
 中無為云者符合、然別府忠種者、二階堂行貞之婿也、而行
 貞者、伊作久義之姉夫也、久義之擊忠種也、事見上 行貞
 不救忠種、亦不助久義、久義怒欲擊行貞、乞兵於 怨翁
 公、許之、據怨翁公舊譜、山田聖榮日記、二階堂氏系圖、

716 「正文在福昌寺」「元久公御譜中ニ在リ」

奉寄進

薩摩國鹿兒嶋郡且過同集庵所領田島之事坪付 在別紙、
 右、彼所領者、雖為重代相傳、先孝齡岳禪定門之為菩提
 祈足、建立且過、而奉寄進所也、停止萬雜公事諸役等者
 也、仍寄進狀如件、

應永十一年正月十一日 嶋津前陸奥守元久(花押)

修理亮久豊(花押)

「兄弟不快之時連判不審、蓋後年久豊為守護之時書其名加判者乎」

717 「正文在福昌寺」

鹿嶋且過同集庵田島之坪付

郡本之内

一丁 中津上 六反 同郡本柿本
 三反 同郡本小坂本 二反 同郡本柳丸
 七杖 坂本之内本且過跡
 已上二丁二反二杖

藪分

一ヶ所 郡本、原崎山 一ヶ所 同柿本
 一ヶ所 且過敷地 一ヶ所 本且過跡染河

元久(花押)

718 「正文在福昌寺」

薩摩國鹿兒嶋郡々本之内之水田名所小坂本一町之事
 右、此所者、元久重代之依為所領、崇鑑禪尼之為菩提祈
 足、停止萬雜公事諸役等、永代福昌寺ニ奉寄進所也、仍
 為後日寄進狀如件、

應永十一年正月十一日

嶋津前陸奥守元久(花押)

「元久公御譜中ニ在リ」

719 つしうはうへつかいつかハシ候事ハ、かくれあるましく

候へハ、つちもちほうへも、あんしんしたく候、いたハシ

720

『嫡家川上氏文書』

薩摩國鹿兒嶋郡河上村事、親父上野入道存生之間者不可有子細候、於于後々者、嫡子三郎左衛門尉爲給恩所宛行也、仍雖爲親類兄弟、不可有違亂之儀、可領知之狀如件、

なから御こえ候て、このいしゆおほせ候へく候、そのさかひの事、ふつそうのことにて候、とくよりせいをもしんすへく候ところ、かつせんのしたい申たて候て、諸事御ゐをうけ候ハんとそんし候て、ゑんにん候、又ハさつまかたの事もよくく申さため候てまかりこし、しよし申たく候ハんと存候て、いまよてちゐん候、よてしらやをしんし候、かつせんのしたい委細うけ給はり候て、しやていしゆりのすけか、いつみりやう人のあいたに、一せいそへ候てこすへきよしかたおほせ候へく候、そのさかひの事ハたのミ申候ほかたなく候まよ、よくくはからハれ候て、かつせんむきのたんかうあるへく候、いたハしなから大かうにて候あいた申候、たまくせん日こえられ候ほとに申候、恐々謹言、

二月十三日

元久(花押)

かのやとの

721

『福昌寺文書』

應永十一年三月五日

元久(花押)

河上三郎左衛門尉殿【家久】

薩摩國谷山郡延命寺事

右、於于彼寺務職、公方御判【元久】申沙汰仕候上者、迄到

于末代可有領寺、依仰執達如件、

應永十一年甲申三月廿七日

出羽守久興(花押)【山邑】

延命寺侍者御中

722

『全』

奉寄進

薩摩國谷山郡延命寺家職之事

右、於于彼寺務職者、迄至末代不可有相違之狀如件、

應永十一年甲申三月廿七日

元久(花押)

延命寺

723

『見于伊作譜』

薩摩國加世田別符之内大浦村事、任先例、知行不可有相違之狀如件、

應永十一年卯月五日

(伊久)
久哲(花押)

「勝久ナリ(久義)
伊作大隅守殿

「此正文、伊作家文書中ニ在リ、勝久譜中正文在卷本トアリ」

724

『調所氏譜忠恒傳』

應永十一年甲申五月二十一日、及稅所檢校等定守公神年中祭式、乃目代許之、檢校等皆加署于跋、蓋忠恒以調所書生預焉、

725

『公文書』

(大)
□隅國々衙守公神年中□

□月一日御供六前人供百前曾野郡

□前半、人□

□二前半者大皮開□

□二日御供田者小井倉開發守護□

□人供者社□

□三日御供者國田所檢校所役

者御供六前主神司(役)□

御供六前人供五十前者小井倉世戸口
殘人供五十前者武元半毛開發本斗

富名本斗壹斗

御供六前八坪役主神司□

□書御供六前重富本名稅所介□

□東十前得重名、中六前小十□

□喰膳十二前 功德丸名、中六前東郷世戸口

東郷武安名 □酒一對松永□

□一日御供人供廻弟子丸工田名所役个□

□日御祭御供人供本斗七斗

□一日御供人供東郷武新田□

御供東郷桑原二段、人供西郷河崎二反

御供曾野郡重富本名人供□

□月一日御供人供曾野郡用松名役也、

□酒肴粽同用松名酒二荷五月□

□月一日御供六前、人供百者用□名引田一反おきの
三反うくひす

夏越御供六前主丸名二反神司知行

□日御供人供曾野郡重久名□

七日御供人供桑西郷七夕田三段役

御供六前小河元行引田一反所役

十五日西郷則貞名御供六前人供百前新田本斗七斗

〔日御供人供者廻桑原所役

九日御供六前人供百前万善名引田

〔月一日御供人供重富本名稅所介役

〔十日御供六前八坪役主神司

〔月一日御供人供東郷主丸名所役

御祭者御供人供用松名一役

〔日御供人供主丸名所役

酉閑之御供郡田名所役同夜粥酒

〔注進如件、

應永十一年甲申五月廿一日

可奉免之狀如件、

目代法橋上人位

〔國宣并留守所與判寄

〔有之、

調所書生藤

厨家書生大

惣切手檢

田所檢校

稅所檢校

惣檢校抄

726 〔元久公御譜中〕

一右大將義滿將軍家、薩隅日三州中欲止鬪亂、命鎮西探題曰、宜下上使成和諧焉、由是使朝山出雲守師綱・同小次郎重綱、經豊後州向日向州、于時豊後太守大友修理大夫親世、亦令吉弘土佐入道隨上使到當地、元久遂對面於志布志、且賜奉書、記左方矣、

727 〔寫有之〕

〔鳥山左衛門尉殿〕

一爲一名字、不断及合戰云云、何程（様事狀）之事故、不可然、所詮、止確執之儀、令和睦、殊可致忠節之由、所被仰下也、仍執達如件、

應永十一年六月廿九日

島津陸奥守殿

御判有

728

一右之奉書、奥州總州稱兩島津、爲鶴執之時也、彼上使者無隱名人、殊盡歌道之奧義、故連歌之達者也、若無

一興者可爲無念、是以於大慈寺有和漢之會、

先於元久之館對面之時、三獻已下記末、

看組搦様

初獻 ゴフ カチクリ ケツリ物 雜煮ノシル

二獻 鳥ノ焼物 サシミ 酢イリノシル

三獻 ツホイリ 鮑 ヒシホイリノシル

四獻 シラシホニ ノシ鮑

五獻 カキアヘ クラケ サカイリ

御食 小豆汁 菜大根膾 焼魚 精信物 干魚

鳥ク、ヒ

二ノ膳 サシミ スシ ツホイリ 汁ウシホニ

三ノ膳 麦飯 タカナヒヤ汁 煮鮑 ヒボカシ

精信菜一ツ

志布志事終、而後將告上意於嶋津上總介伊久法師久哲、令赴薩州之路、過加治木、構棧敷於黒川、加治木高山某請待上使、催連歌之一興云云、而後朝山殿至于薩州、告上旨於久哲、其後自薩州解纜而歸洛也、爰朝山小二郎重綱者、候探題之館爲逗留、相加于短尺一揆、於筑後溝中遂戰死矣、其後有不思議之奇異、故於市之塚造立小社崇之、號天神之末社云云、

〔正文有之〕

〔大將家義滿御下文〕

(義滿)

(花押)

日向大隅兩國守護職事、嶋津陸奥守元久領掌不可有相違之狀如件、

應永十一年六月廿九日

〔以上、元久公御譜中ニ在リ〕

〔右ノ正文、舊御番所御文書ニ番箱中、歴代龜鑑之中ニアリ〕

〔廣濟寺文書〕

薩摩國伊集院廣濟寺御領事、西山參町并古城、無等寄進、高山野在之月庭寄進、滿家院貳町小山田、無等寄進、中俣貳町

別府貳町山野在之無等寄進、下土橋四段無等寄進、寺前田八段大道寄進、

大窪鎮守田九段賴久寄進、松脇五段(大田)久勝寄進、麥生田所

在之、有久寄進、寺脇貳町南仲自領彼田園等、雖爲無

等・大道寄進狀、爲後日賴久加判事、於彼寺領致違乱輩

者、賴久不可有子孫之儀候、仍後證寄進狀如件、

應永十一年甲申八月廿二日

賴久(伊集院正少衛)花押

爲久(賴久初名)花押

廣濟寺

「此文書、伊集院頼久譜中に在り」

731 『調所氏譜忠恒傳』

寄進狀

奉御守公神寄進仕水田事

□者大中臣忠通爲祈禱、泰通永代限、桑東郷内澤津水口
二反、被奉寄進仕所也、忠通□領之段甚以不當也、泰通□
進狀奉返所也、毎年御年貢□二斗五舁筒以上二反^(五)□
無未進可納申也、若無沙汰之時□、任此狀、可有御沙
汰欵、殊更□神恩者、弥可致神忠也、仍爲後日寄進狀如
件、

應永十一年十二月十五日

姫木右馬助大中臣忠通□

「本田元親袖判」

732 『水引執印文書』

契約

一於天下向之儀候者、不及是非候、

一於此堺、成一味同心之思、相互見繼被見繼可申候、於
此中候、自然と荒説之時相守申、永可落居仕候、仍此

条々偽申候者、

八幡大菩薩 天滿大自在天神 諏方上下大明神御爵お可
罷蒙候、

應永十二年正月廿日

平重足(花押)

執印殿

733 「元久公御譜中」

「正文在垂水來野口孝左衛門」

(元久)
(花押)

大隅國守護所本職事、守先例、可致其沙汰之狀如件、

應永十貳 二月十五日

野口太郎兵衛尉殿

734 「大口高城氏藏」

ゆつりあたふ 重一所

薩摩國たきのこほり 温田 水方ニ三郎丸一曲 國分

万徳 新開壹町草道名内在馬場西屋敷^{宇一} 同國東郷之銚

淵村内六田五段多しの前三反 同しやうの屋敷^{宇一} 筑前

國合屋目尾内山田壹町同竹内屋敷^{宇一} 相模國おち合の

郷内野邊入道か屋敷

右所領へ、眞佛ちうたいさうてんのところなり、しかる

にゐたいをかきてゆつりあたふ所也、そうりやうのめ

いをそむかすして、御くうしへせんれいニまかすへし、

もし重一子なくへきやうたいの中ニゆつるへし、このう

ちきやうたいともにおもひあてゝ、めんくのゆつり狀

にまかせてそのさたをいたすへく候、よて讓狀如件、

應永十二年乙酉卯月廿九日

眞佛(花押)

735

「寫在文庫」

御狀委細承了、

一去年依京都御意、自探題被進朝山候、自是も可使者之

由、探題被申候間、進吉弘土佐入道候處、無子細無爲

落居候条、爲身就公私令悦喜候、進人可申候處、態御

使所仰候、

一奥州御事、是又無子細候、誠令悦喜候、殊今度栂山殿

御越候、御慰勲之至難申盡候、何様自是其恐可申入候、

栂山殿入見參申承候間、殊ニ悦喜仕候、

一相良方事、自奥州探題へ被仰候間、定委細御返事被申

候哉、

一京都今度御合戰事、於身驚入候之處、無爲落居候間、大

慶此事候、目出畏入候、定御同心候哉、天下大綱候間、

無心元候つるニ勝利候間、御心安存候、畏入候、

一京都大御所御隱候之由承候、御所様以外御非歎由承候、

爲御訪先博多まで出津候、何様連々可申入候、恐々謹

言、

「朱カキ」
「應永十二年欽」八月十五日

謹上 嶋津殿

「此書、伊久公御譜中ニ在リ」

「大友」
修理權大夫親世在判

736

「正文在福昌寺」

禁制

薩摩國谷山郡之内宇宿村福昌寺於御寺領、仕鷹其外致殺

生輩者、不云親類若黨上中下可違中、彼臨堺目候者、其

間可捨鷹候、堅加制止處也、仍制札如件、

次今度於彼寺領仕鷹候事、於身茂無發機之儀候、若偽候

者、

正八幡大菩薩 諏方上下大明神御討可罷蒙候、

應永十二年九月廿一日 元久(花押)

「元久公御譜中ニ在リ」

〔元久公御譜中〕

〔正文在福昌寺門前西郷休兵衛景州〕

輔仁

(元久)
(花押)

左衛門大夫藤原景親

應永拾貳年十二月十三日

〔恕翁公御譜中〕

一先是應永四年丁丑十二月、伊作大隅守久義有宿意之未散別府某者、欲遂其憤、率師旅渡大川、構陣於鵜之塚、陣幕未成之際、發精兵犯當陣、久義之兵不多而不得進于陣外、徒越年矣、於茲乎伊久法師久哲餽書簡曰、伊作某與別府某已起鬪亂、若不止之則漸可爲國中之錯亂、庶幾令新納越後守實久成和諧者是幸也、由是招實久使之諫以開陣也、田布施之二階堂某者久義之姉婿、而別府某者二階堂之甥也、故二階堂不得孰是孰非、而不合力於久義、久義含其憤欲報恨於二階堂、而告之於元久、元久慮後之有傷害、容久義之訴、而且應永十二年乙酉之冬、元久構一陣於田布施、漸以圍之堅密也、阿多氏、別府氏雖救來、數月籠城兵術糧粒共盡、翌年丙戌二月

請降退去、上總山城守忠朝二階堂之甥、市來某亦緣座、

故向市來落去矣、其後田布施者爲元久之領土、是以移

勇銳之士無警衛之怠、且復占宅地造立屋形、元久亦自

鹿兒嶋到夫地者幾十度矣、志布志之士有五代空者、養

女子之在深閨天生麗質、在元久之側產女子、微之於志

布志、居處於田布施、養育女子、漸以長成則嫁伊作四

郎左衛門尉勝久、而後畀田布施於勝久云々、

〔全〕

一別府氏與鮫島氏亦滅黨徒之勢、降元久屬旗下、今也南

方悉絕凶徒餘裔、所以屬無爲也、

〔國史 恕翁公〕

十二年乙酉冬、公引兵攻田布施、圍牟禮城、據恕翁公舊譜 山田聖

榮日記、二階堂氏系圖、

十三年丙戌春、別府氏、阿多氏救牟禮城、二月行真棄城

去、依市來氏、公取田布施、公之在志布志也、納五

代氏女有寵、至是處諸田布施、爲外宅、生女、以妻伊作

四郎左衛門尉克久、遂以田布施與克久、據恕翁公舊譜、山田聖榮自記、克

久、久義之子也、據伊作家譜、伊作久義見上四年、夏六月朔日、恕翁公以

鹿兒島郡水田二町三段爲且過同集庵領、世復其民曰、後世有違此命者、非吾之子孫也、據忍翁公舊譜、水田地嗣、不可考。五日、又

以大隅串良院岩弘名、日向田浦條・尾見條、爲志布志大慈寺領、以祈佛法興隆、天下安全、家門繁昌、萬民快樂、

上、秋七月十六日、忍翁公分田布施之地、以與伊作氏

曰、除五代高橋外悉給之、據伊作家譜、田布施郷高橋村有地名五代。九月二十六

日、使二階堂行貞領阿多郡觀音寺及十町地、據忍翁公舊譜、市來、至是召而還之、二階堂氏系圖、行貞初稱山城三郎、後改山城守、而永德三年讓狀稱山城守、應永三年忍翁公與行貞書、稱山城、七年與行貞書、稱山城三郎、是年與行貞書、稱山城守、前後參差、不必深考可也。

741 「富光家藏」

742 「全」

薩摩國邪堂院上湯田之内、ひかしのその并もりた五たん、(麻笥)

心さしふかきによりて、ゑいたいゆつるところ也、ハヤくせんれいにまかせてちきやうあるへし、のちのためしひつの狀如件、

應永十三年ひのへ二月九日 朝阿(花押)

富光しやうけんとの

743 「正文在福昌寺」

ミちよりうへ五たん、おさき田六たん、かひもと二たん、さか二たん、みそかひ一たん、心さしふかきよりて、ゑひたひゆつる所也、のちのためにしひつの狀如件、

應永十三年ひのへいぬ二月九日 朝阿(花押)

富光しやうけんとの

一宮之城湯田八幡神器銘ニ邪答院若宮御懸、應永十一年甲申六月廿九日、當領主文前重道願主弥弥善妙トアリ、重道將監カ名ナルベシ、然ラスハ朝阿ノ名ナラン、

742 「全」

奉寄進

薩摩國鹿島郡之内之水田二町三段坪付在別紙

右、彼所領者、雖爲元久重代相傳之所領、依有志且過同集庵奉寄進所也、万雜公事諸役等停止之、若背此旨者、元久不可爲子子孫、仍爲後日狀如件、

應永十三年六月一日 陸奥守元久(花押)

修理亮久豊(花押)

「兄弟丁寇敵之時、爲連判者不審、蓋久豊爲守護之後加判者乎」
「元久公御譜中ニ在リ」

薩摩國邪堂院上湯田村之内、中その并かハらた一ちやう、(麻笥)

744 「正文在志布志大慈寺」

奉寄進

日向州龍興山大慈禪寺

嶋津庄大隅方串良院内岩弘名、同日向方田浦條・尾見條、

右、爲佛法紹隆、天下安全、家門繁昌、兆民快樂、奉寄

進之狀如件、

應永十三年六月五日

陸奥守元久(花押)

「元久公御譜中ニ在リ」

745 『入來家臣東郷善兵衛藏』

(朱書)「ロノウラ」
「とまりのとつちやうたうしんの」

一とまりのゝ分

一所 こむかゑ 田四反四十

御ねんくのせに 八百文

くわ代 一くわん

わたのせに 五十文

一所 きたのゝ分 田四反四十

御ねんくせに 八百文

くわしろ 七百文

わたのせに 五十文

一所 ミヤ田口

くわしろ 一くわん

わたのせに 五十文

一所 いちのゝ田一反十

御ねんくのせに 二百五十文

くわ代 一くわん

わたのせに 五十文

かわの分 五百文

應永十三年 いぬ 六月十二日

746 『野田山内寺文書』

(外題) 「任此狀、可領掌之狀如件、

島津判官入道沙弥得佛御判」
(守心)

譲与

薩州山門院山内寺社院主職田島等之事

四至

東限馬場大道 南限新御堂堀

西限田濠堀大道 北限陳之内堀東殿堀 在堀宛也

右、件寺社田島者、自先祖師匠祐範重代相傳之所領也、

然者子息最玠坊依爲器量之仁、限永代譲与早、到子々孫

と迄、無相違可知行也、仍爲後日狀如件、

應永十三年丙戌六月廿八日

747 「伊久一流守久譜中」

「正文在出水野田山内寺」

〔外題〕
「在此狀、可領掌之狀如件、

嶋津判官入道沙弥得佛(守心)(花押)」

讓与

薩州山門院山内寺社院主職田島等事

四至

東限馬場大道 南限新御堂堀□□居

西限田濠城大道 北限陳内堀東殿城(惣)宛(惣)在堀也

右、件寺社田島者、自先祖師匠祐範重代相傳之所領也、

然者子息最珠房依爲器量之仁、限永代讓与早、迄到子々

孫々仁、無相違可知行也、仍爲後日狀如件、

應永十三年丙戌六月廿九日

(本文書、日付ヲ異ニスルモ、前号文書ト同一ナルベシ)

748 「見于伊作譜」

薩摩國阿多郡北方多布施之内、除五代高橋、依有御志進

置候、任先例、可有領知之狀如件、

應永十三年七月十六日

伊作殿〔勝久コト也(久義)〕

「此文書、伊作家文書中正文在リ」

「勝久譜中正文在卷本トアリ」

749 「載于伊作譜」

別符内自伊作殿御知行分注文事

一唐人原 十二町

一唐坊 三町

一白貝方 四町塩屋三

一内野 三町あいふしともこ

一小湊 四町

一坂木 六町

一津貫 八町

以上田數四十町

右、彼在所、悉退治之時者、押分而半分配可被申談候、

仍爲後日坪付狀如件、

應永十三年九月廿五日

善了(花押)

親宗(花押)

752 『入來院氏文書』

「此正文、伊作家文書中ニ在リ」

「勝久譜中正文在卷本トアリ」

750

「元久公御譜中」

「正文在田布施主二階堂三左衛門定行」

薩摩國阿多郡内觀音寺并阿多内十町坪付在別紙爲祈所々宛行也、早任先例、可被領掌之狀如件、

應永十三年九月廿六日 元久(花押)

二階堂山城守殿

「行貞也」

751

『入來院氏文書』

置文事

右、重頼以後所領事、雖有數輩之兄弟、守其器用、惣領一人仁一所ヲモ不殘可讓与之也、若背此旨、所領ヲ於分与數子之輩者、不可有重頼之子孫云々、如此定置上者、若万一ニモ所領ヲ雖分讓、任此狀之旨、於惣領一人之計、押而可令知之者也、仍爲後證置文之狀如件、

應永十三年十一月十五日

「入來院氏七代御正少弼重頼」
重頼(花押)

讓与

所 子息(重長)菊五郎丸

一所 薩摩國入來院内清色北方

一所 北方内上副田村

一所 市比野村半分地頭織井下地

一所 南方内清色村

一所 塔原村

一所 中村

一所 楠本村

一所 倉野村

一所 久住村

一所 柏嶋村

一所 筑前國柏原水田屋敷

一所 筑後國永淵屋敷、同國みな木の屋敷

一所 甲斐國西嶋内葦入在家田畠

一所 美作國河繪庄内下森上山大足

一所 相模國澁谷曾司郷内ふちこゝろの屋敷立野等事

右、於所領等者、重頼重代相傳所領也、仍菊五郎丸仁相副次第調渡手繼證文等、限永代所讓与也、於御公事者、

任先例、可致支配者也、次重頼以後所領事、雖有數輩之兄弟、守其器用、惣領一人仁一所ヲモ不殘可讓与之也、若背此旨、所領ヲ於分与數子之輩者、不可有重頼子孫云云、如此定置上者、若万一ニモ所領ヲ雖分讓、任此狀之旨、於惣領一人之計、押而可令知行者也、且爲後證、所書載置文之趣也、仍讓狀如件、

應永十三年十一月十五日 重頼(花押)

753 「載伊作譜」

伊作殿へ身之意趣之事、如此申承候上へ、自今後今度之意趣不可相殘候、若此條爲申候者、

伊勢天照大神 八幡大菩薩御討可罷蒙候、此段能く可有御心得候、恐く謹言、

三月廿三日

存忠(花押)

(音久カ)
杣山殿

「此正文、伊作家文書中ニあり」

「勝久譜中ニ在リ、正文在巻本トアリ」

754 應永十四年丁亥

碓山兵部太輔 平佐城にて戦死、月日詳かならず、下の人々も同じ、 長野備前守・勝部攝津介・市來又左衛門尉・中間五郎九郎・石塚讚岐守、

755 「元久公御譜中」

「正文在福昌寺」

(元久)
(花押)

奉寄進

薩摩國指宿郡内迫田村水田三町并園六ヶ所 坪付在別紙

右、彼所領、雖爲成璇給恩、依致敬外御志、爲福昌寺末寺所奉寄進迫田光明寺也、隨而進取 大檀那陸奥守元久加判、依停止萬雜公事諸役等者也、仍寄進狀如件、

應永十二年丁亥正月廿二日 「イ」 沙弥成璇(花押)

756 「元久公御譜中」

「正文在福昌寺」

(元久)
(花押)

奉寄進

薩摩國山谷郡内湯屋園門付水田一町

右、彼所領、雖爲成璇給恩、依致 敬外御志、所奉寄進

758

「元久公譜中」

一山東未能靜謐、寤寐不忘之際、川北・宮崎・田嶋・木

福昌寺塔頭也、隨而進取 大檀那陸奥守元久加判、依停
止萬雜公事諸役等者也、仍寄進狀如件、

應永十二年丁亥正月廿二日 沙弥成璇(花押)

成璇爲敬外雖寄進彼處、依其故爲夫婦之菩提祈足、於當
寺就祠堂、安置成璇妙心之牌所也、依爲後日狀如件、

開關住持比丘眞梁(花押)

757

「元久公御譜中」

「正文在福昌寺」

爲^(敬九)外御成璇御恩内麿嶋福昌寺寄進申谷山郡内福本村田

鳥事

湯屋菌内水田

塩入

五段たつちうの御爲ニ
自作

岩崎

一反廿同

嶋田

一反年貢

かうちやう田 三反同

應永十四年正月廿五日 沙弥成璇(花押)

759

「正文在文庫」

下

幸久 薩摩國於于山門院之内水田
參拾壹町同菌事坪付別紙
在之

右、爲給分所宛行也、任先例、可致沙汰之狀如件、

應永十四年二月六日

^(伊久)沙弥(花押)

「此書、伊久公御譜中ニ在リ」

760

「冠嶽文書」 「正文在串木野頂峯院」

敬白

奉寄進冠嶽山三所權現、限永代薩摩郡内天辰谷口參段事、

右、寄進志趣、偏只爲天長地久御願圓滿、且爲家、且爲

當代弓箭、且爲子々孫々、或郷内安穩、或諸人快樂、爲

取分息災延命、恒受安全、朝夕之祈禱奉憑故也、依志趣如件、

應永十二天亥^{ひの}との二月九日

「伊久公の御二男相馬山城守也」
島津山城守藤原忠朝(花押)

「上カキ」
「天辰寄進田文書」

「此文書、相馬氏忠朝譜中ニ在リ」

761 「國史 久哲公」

十四年丁亥夏四月六日、久哲公薨於平佐城、年六十一、

據島津系圖、久哲公舊譜、山田聖榮自記、應永記・惣翁公舊譜皆云、五月四日久哲公薨、今從島津系圖・久哲公舊譜、平佐城一名藤方尾、在碓山城西南十五町許、按久哲公自川邊徙薩摩郡居碓山城、而山田聖榮自記云、久哲公薨於平佐城、又云、久哲公薨、及山城守殿之身、惣翁公攻平佐、一戰下之、應永記云、久哲公薨、忠朝居平佐城、豈

公三男、久哲公晚年徙平佐城乎、抑碓山城或稱平佐城乎、俟考、

長播磨守守久、次山城守忠朝、季又三郎久照、據島津初

道鑑公傳薩摩守護職於 定山公、傳大隅守護職於 齡岳

公、而傳世寶刀及鎧則與 定山公、 定山公與之 久哲

公、又不傳守護職於守久、由是總州家浸衰、於是播磨守守久

居山門院、山城守忠朝居平佐城、 公攻忠朝、殺碓山兵

部大輔・長野備前守・勝部攝津守・石塚讚岐守等、忠朝

棄城走、據惣翁公舊譜、應永先是幕府召 公者屢、是歲 公

記、山田聖榮自記

遣伊集院賴久、之京師治邸、主於赤松殿、據惣翁公舊譜

十五年戊子夏五月六日、故幕府足利義滿薨、號鹿苑院、

據將軍家譜冬十月八日、公使肥後左近將監清時入道長叟、

領屋久島及惠良部島、與之盟書曰、與君同好、患難相濟、

倘聞離間之言、即當面質相白、有渝此言、諸神殛之、種

子島藏人系圖文書、屋久島即大隅奴讓郡、在鹿兒島南海上、舊作掖玖益

救、惠良部、村名、諱屋久島、或作水良部、今或爲口水良部者、對沖水良

部而言、口猶云、清時、種子島賴時之子也、據種子島藏人系圖、種

內、沖猶云外、清時、種子島賴時之子也、據種子島藏人系圖、種

年、種子島氏亦稱肥後十九日、公與禰寢清平盟書曰、君

與不穀同好、倘有急難當共相恤、或聞離間之言、即當對

面相白、有渝此言、諸神殛之、據惣翁公舊譜十二月十一日、

公使波見太郎領大隅國肝屬郡波見村如故、據肝付典膳家藏野崎氏文書

762 「御系圖」

伊久

上總介 大夫判官

貞和三年丁亥二月朔日生、

應永十四年丁亥四月六日卒、年六十一、法號久哲道觀、

763

「元久公御譜中」

「正文在田代縫殿清長」

〔應永記〕

冠嶽山三所こんけんりうくわんの事
 右、こんとの世上目出度候て、弓箭のうんをひらき候て、
 よせ田しほ入の本寄進の事かへし申へく候、かさねて一
 所寄進申へく候、せいくの御きたうをいたされ候へく
 候、仍くわん書如斯、
 應永十二亥ひのとの 八月廿一日
 嶋津山城守藤原忠朝(花押)

〔冠嶽文書〕

日向國柏原保内原村之事、本物返貳拾伍貫文賣渡申所實
 也、但參ヶ年過候者、新足ありよりにうけ可申候、右此
 村ハ蒲生方析所ニ給られ候所お、愚身かい候て御方へう
 りわたし申候なり、自然闕之時ハ此狀之旨ニまかせて、
 御知行あるへく候、仍爲後證之狀如件、
 應永十二年ひのの 六月廿五日 親宗(花押)
 田代宗次郎殿

〔伊集院頼久譜中〕

〔全〕
 一元久可參洛之旨、將軍家屢被成下御教書、由是應永十
 四年、使伊集院彈正少弼頼久、先元久上京師、爲屋形
 造立之調議、百事隨赤松殿之計、故令頼久携于營中、
 遂拜謁于 將軍家矣、土木之功悉以既成、只俟元久上
 着之期而已、

〔忍翁公御譜中〕

一同十三年丙戌、田布施城ヲ没落畢、同十四年丁亥五月
 四日、總州御年六十ニシテ逝去玉フ、雍州平佐城ヲ請
 取給、而雖被踏得、元久大勢山ヲ越サセ給間、不及敵
 對、忠朝モ没落畢、
 一上總介伊久法師久哲、應永十四年丁亥五月四日死去之
 後、二男山城守忠朝居于薩摩州平佐城、爲守護之仇、
 何可不退乎、率軍衆向其地陷平佐城、于時碓山兵部太
 輔・長野備前守・勝部攝津介・市來又左衛門尉・中間
 五郎九郎・石塚讚岐守已下數輩斬獲者也、

太守陸奥守元久公屢有參洛之命、由是應永十四年丁亥、使賴久先 太守上洛、以爲宅地經營之計策、且有命曰、

宜憑赤松殿經營焉、故上京師則達太守旨趣於赤松殿、于時赤松殿先携賴久於營中、令得拜謁 將軍家矣、其後選梓人之勝其任者、令之成華第創造之功也、此外忠功之至誰敢爲寡乎哉、

771 「市來崎氏文書」

〔朱力書〕
「應永十四年秋」霜月廿四日

(平巴)
兼宗判
(安力)
經水判

新納越前守殿
御宿所

讓与

薩摩國山門院之内市來崎村 同北園 同國新園

一所 西桃木田五反

一所 垣本六反

一所 高柳一町

一所 北夜中田一町

一所 針原之門三町同浮面一町三反

同荒野居敷等
〔屋之〕

同山門院之内東方

一所 小山田八反

一所 太郎丸作三反

一所 小長田五反

一所 坂本八反

一所 今新改三反同河原田三反

769

「相馬氏山城守忠朝譜中」

「正文在串木野頂峯院」

(本文書ハ七六四号文書ト同文ニツキ省略ス)

770

「新納越前守忠明譜中 忠續」

「正文在新納三河守忠徳入道楚弓」

態進愚札候、就其ハ屋形爲御藥蚤、此方雖尋候一向候ハ
才候、御所持候者少にて候え共、御まいらせ有へく候、
隨而匠作・江州・讚州其外方々御同道候て御越候間、寄
尋無音無事罷成候、公私目出度候、兼又一昨日皆々如限
城御急候、 屋形様今日如市來入御候、山北動事、來廿
六たるへく候、此方仕事にて候之間、定而三俣邊敵可相
動事も有へく候、堅固之御祈簡肝要候、恐々謹言、

御堂園一ヶ所

薩摩國宮里名之内

一所 白石一町

一所 柳田五反

一所 沼口五反

一とうゆ田一町

同島地船津園

右、親父自秀雄得性慶讓所実也、依爲嫡子秀幸讓与畢、

彼田島等者、至子々孫々、無他妨可令領知者也、御公事

足者、隨分限可令勤仕者也、仍讓狀如件、

應永十五年正月十一日 沙弥性慶(花押)

772 「伊集院廣濟寺文書」 「伊集院頼久譜中ニ在リ」

奉寄進

薩摩國伊集院持丸名内邊牟木門水田一町八段十并郡新

開一町四段事

右、彼田地者、頼久雖爲本領、依有志廣濟寺仁奉寄進之

處也、但滿家院所々御寺領歸付之時者、此在所無等塔頭

延慶庵仁可寄進申候、若又於此所領違乱煩申者候者、頼

久不可爲子孫候、仍寄進之狀如件、

應永十五年四月十三日

「伊集院兼正少將」

(元久)
(花押)

773

依有要用、賣渡申薩摩之内鹿兒嶋郡荒田庄之内妙顯門・

井出三阿弥門・瀬戸口可善門三ヶ所田島共ニ、代折足百

貫文賣渡申處実也、但三ヶ年後者、折足有次第可請申候、

仍爲後日賣券之狀如件、

應永十五年(つちのへ)八月三日 重繼(花押)

774 「正文在禪山」

日向國北郷之内つゝミ并釜川并廣瀬田島本物返代之用途

已上百五貫文仁定所賣渡申也、但三ヶ年過候者、折足有

次第請可申候、若於彼地相替子細之時者、爲代別在所可

進候、仍爲後日狀如件、

應永十五年八月十日 清正(花押)

禪山殿

775 「正文在禪山源三郎久清」

(元久)
(花押)

薩摩國知覽見院内長山・たり水・おとなり廟三ヶ所、依

有要用、本物返代、折足九十貫文所賣渡申矣也、但三ヶ年

過候ハ、折足有次第可請申候、仍爲後日賣券之狀如件、

應永十五年つちのへ八月十九日 玄親〔平田新左衛門親家入道也〕(花押)

〔此書、樺山家二代音久譜中ニ在リ〕

776 『正文種子嶋氏家藏』

薩摩國內屋久・惠良部兩嶋事、依爲忠節、爲祈所所相計也、任先例、可被領狀如件、

應永十五年十月八日 玄仲〔元久〕(花押)

肥後左近將監入道殿〔清時入道長豊下云〕

777 『全』

右、意趣者、三ヶ國如何様雖轉變候、可被立身之用之由承之間、御大事之時者捨申ましく候、如此申談候上者、

讒者出來、不慮外荒說其聞得候ハん時者、直申承可散不審候、若此条令違變者、

伊勢天照大神 正八幡大菩薩 稻荷大明神 諏訪上下大

明神 天滿大自在天神御討お可蒙候、仍契狀如件、

應永十五年十月八日 玄仲〔元久〕(花押)

肥後左近將監殿〔清時〕

778 注進案

當國薩摩郡馳向平佐城、致合戰候之處、凶徒敗北之間、攻落彼城候早、依遠國往反經日數候、言上遲引非緩怠之儀候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

應永十五年十月十一日 河内守義勝〔比志島〕(花押)

進上 御奉行所

779 「元久公御譜中」

「正文在祢寢右近重永」

契約

右、意趣者、雖天下轉變、可爲一味同心之由承候之間、

御大事之時者、存身之大綱、捨申ましく候、如此申談候上者、和讒凶害仁出來、不慮子細候時者、直申承可散不

審候、若此條爲申候者、

正八幡大菩薩 諏訪大明神 稻荷大明神 天滿大自在天神御討お可蒙候、仍契狀如件、

應永十五年十月十九日 玄仲〔元久〕(花押)

祢寢山城守殿〔清平〕

780 「都城郡元村安養寺本尊ノ銘」

忠勝郡司——正忠郡司——師犬女子——忠合指宿郡司——賴忠——朝忠
 能登守——近江守

日向國島津院安養寺造立、應永十五年戊子云々、

「今郡元村ノ内ニテ早水境ニ堂山ト云ヘル所ニ、安養寺門トテ百姓屋敷遺ルトソ、今本尊ノ阿弥陀ハ川東村大草氏ノ隣ニ移シアルト也」

781 「國史 怨翁公 義天公」

十六年己丑春、公將以明年朝幕府、以留守事附北郷道

且讀讀岐守誼久法名道且、新納久臣越後守實久之弟、近島津支流系圖且作且、江守忠臣初名久臣、佐多道

三佐多氏系圖、無道三、此時、不詳、樺山道春美濃守首久、山田玄威 出羽守久興、本田元親 解信濃守、本田信次郎系圖、以爲元親

安了按本田安了者義天公之黨也、是時方有義天公之難、故公遷於諸臣託以留守事、則本田安了不應與在其中、蓋本田元親別是一人、但其世系

不可、平田玄親新左衛門尉親宗、法名玄親、上井善了不詳、世系、三月二日、九

人上連名盟書曰、母作鬪狼、母信讒惡、協心比德、謹守

社稷、以俟 公之歸、匠作反形已見、當共圖之、有渝此

言、諸神殛之、據島津支流系圖山田田氏譜、匠作者謂 義天公、事見後、秋

九月十日、幕府以 公爲薩摩守護職、據怨翁公書譜、道鑑公傳

山公傳之久哲公、而久哲公不傳於其子、久哲公既薨、而總州家守護職絕、

於是將軍以公爲薩摩守護職、按文治二年源大將軍賴朝以得佛公爲薩摩日

三州守護職、其後元弘元年後醍醐帝詔以道鑑公爲日向守護職、而道鑑公

之傳國於定山公、齡岳公也、唯薩摩大隅而日向不與焉、至於文和、延文

之間、島山直頭爲日向守護職、而應永十一年、將軍復以公爲日向

大隅守護職、至於是年復以爲薩摩守護職、於是三州守護始復其舊、

「指宿文書」

讓与

薩摩國指宿郡五ヶ名事

庶子之所領之事者、闕所次第惣領進代之爲在所、親父能

登守忠勝 公方之御教書封私代之任證文之旨、指宿郡一

緣爲知行、嫡子平正忠被讓女子養人正忠舍弟近江守忠合、

指宿郡重代相傳之在所也、依然子息平賴忠讓与所也、父

祖代々本證文明白也、仍爲後之讓狀如件、

應永十六年二月十八日 近江守忠合判

「元久公御譜中」

一應永十七年、元久依上洛治定其粧已成、雖然修理亮久

豊居住于山東之故、未快于心、是以在國之族新納近江

守・佐多入道・北郷入道・樺山入道・山田入道玄威・

執事平田入道玄親・上井入道・本田元親等可致無二之

忠功之旨、捧於連判之起請文、

「案文載山田譜」「久興譜ナリ」

契約

一自然而上方御上洛之時者、此衆中一味同心而國お堅く

踏、不残聊所存、就大小事申談、御下向之間、諸事可

相計事、

一 匠作(久壽)既御不忠現形之上者、此衆中如何様致方便、可退

治仕申事、

一 如此申定候上者、成無二之思、仰 公方申、於私者相

互用ニ立被立可申候、若不慮喧嘩出來、又者有讒者如

何様虚説雖申候、各馳寄任理非、無爲可相計事、

右此条々爲申候者、

伊勢天照大神 正八幡大菩薩 諏訪上下大明神 霧嶋

六所大權現 天滿大自在天神御討お各可罷蒙候、仍契

狀如件、

應永十六年三月二日

うハ井 善了在判

ひらた 玄親同

ほんた 元親同

やまた 玄威同

かは山 道春同

ちやうしう 景仙同

さた 道三同

にいろ 久臣同

ほんかう 道且同

「今繪巻長門守歌」

而後、元久進發於鷹嶋、到着於日州油津也、爰修理亮

者、元久在洛之間以疑吾之意、可爲胸臆之障礙、所詮、

往油津扣旅館、欲改前日之非、縱雖無見參、達愚意者

是幸也、與風參越于油津矣、元久供奉之人々不驚動(驚)

者、雖然元久聞此旨、則是迄之越山尤以神妙、無異儀

爲對面也、久豊爲祝言、青銅其外種々進獻有之、佳會

既過而後歸鞍也、因茲元久散疑心復本意矣、其後得順

風解纜、海路無障着于泉州境之浦、已此事聞京師、即

日伊集院彈正少弼下向干境津、左衛門佐光範子息淡路

守滿村、赤松殿差价使伸上着之慶賀也、其後發於境之

浦上京師矣、赤松殿諸事憑奔走、先撰吉日將軍家之拜

謁、更無所殘、參候營中之路用駕輿、且供奉之騎馬者

長野・大寺二騎也、以青銅貳千貫・唐物・絹布進獻于

將軍家、是亦隨赤松殿之計各如斯也、

一 其後在洛之間、請待將軍家義持於元久之私宅、此時進

獻之備物、太刀・弓・胡篋・青銅千貫・絹百卷・麝香

臍百、金紫花 成盆于時將軍家以自酌賜觸於元久、且以金作鞘

卷寶刀、手自昇于元久焉、今度供奉之一族他家共十人

有任官受領之儀、樺山者安藝守、北郷者中務少輔、阿

多者加賀守、肝付者河内守、舄肥者伊豆守、平田者右

「正文在樺山氏」

馬助、野邊者薩摩守、北原者左馬助、加治木者能登守、蒲生者美濃守云々、

右之數輩共獻御太刀一腰・新足百貫充於將軍家、件之數輩以官領之酌賜盃酒也、其後佳與諸般不可勝言、爰島山將監詮春以戲言謂近習之若冠等曰、島津殿今日進上之麝香餘殘宜有置中、盍採取之乎、參候人々同之、共以所欲云々、元久謂開櫃與人、則當有不好之物、且進獻之餘殘亦微少也、故掠取家臣等之所持、盛于花美之盆、置于公座之末、先詮春、次伺老若、不願君上、競進奪取、當座之興遊莫有過之矣、其後元久以弓征矢積于公座之落間、將軍家問其故、元久對島山殿曰、是又於分國爲一揆退治所以用意也、雖然非無海路之疑、故爲警固是帶來也、雖爲輕薄之物、若有領納之人者幸之幸也云々、於茲島山殿撰取一張、其外群參之輩不憚公座指寄々々、或一二張、或五六張任意盡取之去、是亦當座之佳興也、次猿樂觀世大夫盡舞樂之曲、事終而後昇於七尺有餘丸貫之大太刀、其外青銅引物之類、所以不違書記也、浮帖云、古書與左書相違多之、未知孰是孰非、故共記之者可有再考、

(元久)(花押)

要用有ニよて、本物返之質券に賣渡申北郷之内一所山下、一所布別府之事、

合代用途廿六貫文
米十九石定升ニチセ

右、件所領者、爲幸當知行之所職也、仍本物返之質券に賣渡申事矣也、己丑年ヨリ
辛卯年三年お限て本物返賣渡申候、三ヶ年以後者何時にても候へ、米錢有相次第ニ請申返へ候、米錢進せさらん間へ、何ヶ年にても候へ、任此狀之旨、可有御知行候、仍爲後日質券之狀如件、
應永十六年己丑三月廿三日 息長爲幸(花押)

787 「正文在勅定院」 『日州高城勅認院也』

敬白

奉懸霧嶋六所權現御寶前立願文之事

右、立願意趣者、修理亮久豊如念願、開弓箭之運、如所存令拜領國務候者、知行之在所十町可奉寄進、所領之狀如件、

應永十六年五月十五日 久豊(花押)

『野田感應寺文書』

東勝寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

應永十六年七月朔日 左大臣源義量判

通音西堂

789

〔山田久興譜中〕

〔正文在山田七郎右衛門久通〕

給分

右一成村入久兩村田數之事

十九町三反冊此内 寺社一町
三反冊

段錢拾貫三百七十五文

此外聊爲申候者、

伊勢天照大神宮 熊野三所大權現 正八幡大菩薩 天滿

大自在天神 諏方上下大大明神御爵各可罷蒙候、仍起請

文如件、

應永十六年七月七日

(山田久興)
沙弥玄威(花押)

790

〔元久公御譜中〕

〔正文有之〕

(義持)
(花押)

薩摩國守護職事、所補任嶋津陸奥入道玄仲也者、(元久)早守先

例、可致沙汰之狀如件、

應永十六年九月十日

〔右ノ正文、舊御番所御文書ニ番箱中、歴代龜鑑之中ニアリ〕

791

〔正文國分宮内社司澤氏家藏〕

奉寄進

正八幡宮

右、大隅國桑西郷村(下)八町事、爲當社御造營所奉寄

附狀如件、

應永十六年大呂五日

〔八代久壽公〕
沙弥玄喜(花押)

792

〔國史 忍翁公
義天公〕

十七年庚寅春正月十六日、公使波見筑後守領肝屬郡波

見村塩屋湊、據忍翁
公舊譜

日向州隈野郷十町地、據島津支
流系圖、教宗、音久之子也、同上、十

八日、義天公使内倉豊前介、領日向國內倉帖、如故、

據義天公舊譜、帖依原文、其儀不詳、郡村高辻帳、敦仁院有内
之藏村、按是時義天公法名稱玄喜、其說見下卷應永二十三年

十一日、公使田代宗次郎領大隅州田代村、據忍翁公舊
譜、按田代

基右衛門家藏系圖、田代清久子曰肥前守久助、初稱
宗次郎、此云宗次郎、蓋久助也、田代清久見上五年、

初、公滅谷山郡司入道佛心、取谷山百八十町・喜入四十

町・揖宿四十町、又取穎娃四十町、使 義天公居之、

號稱南殿、據怨翁公舊譜、山田聖榮自記、先是嵯峨公擊山北賊、召

佛心守東福寺城、公還自山北而佛心歸谷山、其後佛心雖

偃強、然公且優容之、比至怨翁公、以為臥榻之

側、豈容他人野睡、遂擊佛心取之、詳見自記、又取海江田・倉底

二城、使阿多加賀守成海江田城、又取穆佐及池尻・白糸

・細江等地、使 義天公成之、以備伊東氏・土持氏、於

是 義天公徙居穆佐高城、據怨翁公・義天公舊譜、山田聖榮自記、

州至日向、應永二年今河探題落職、日向人叛今河播州

還京師、八月二十九日、島津奧州為山守護、高原東光坊藏伊東家略記

云、嘉慶元年六月、今川播州至日向、應永二年日向人叛今川播州、三年

今川播州還京師、是歲八月二十九日、島津奧州元口如山東、二書所記大

同小異、由是觀之、公取海江田・倉底等地、使義天公成之、蓋在應永三

年以後、海江田在那珂郡、今屬他國、倉底不詳、池尻城名遺城在倉岡地

頭館東南一町餘、白糸在倉岡地頭鎮西北八町餘、細江在宮崎郡、今係官

地、是時伊東氏居都於郡、土持氏居縣、皆與我接界、故為之備、縣地名

讀曰阿加太、即今延岡、武鑑延岡本名縣、壹岐氏本伊東氏臣、天因與

文中壹岐加賀降於我、彌四郎其後、所藏文書多記日向州事云、伊東氏

伊東氏交通、娶於大和守祐安之女、公聞而惡之、同上、伊東氏

系圖、大織冠鎌足後胤有工藤大夫為患者、為憲五世孫曰駿河權守維職、

維職為伊豆押領使、居於伊東、因為氏、傳八世至信濃守祐持、領日州

都於郡、祐安、義天公使後藤某守細江城、其子陰應阿多加

賀守、加賀守取細江城、公遣福永紀伊介等三十餘人、義天

公遣兵攻破之、殺後藤某・福永紀伊介等三十餘人、公

伐穆佐、伊東氏救之、客有說 公者曰、穆佐・都於郡兩

雄相倚、以主待客、不可猝取、而懸軍深入、久於敵國、

非策之善者也、不若與之講和、公從之、義天公遣其

子虎壽丸、見於 公、公還鹿兒島、同上、見音聞公如京

師、義天公往見 公於日州油津、於是實沈臺駘之戰始

熄、伯仲熈箴之聲未協、左右聞 義天公至、莫不愕然、

及 公見之、乃昆弟語、不復以往事為繼芥、據怨翁公・義天

屬妖肥、義天公當在關公上、左傳襄十九年、關師將傳食、高唐人

殖縛工僕會、左補高唐人句、當在關師上、乃倒句也、今本於此、公

自油津乘舟至和泉堺、伊集院賴久來迎、赤松殿遣使迎勞、

夏六月三日、公至京師、十一日、公見幕府於室町第、

獻太刀一腰・鳥目二千貫、大弟一腰・三百貫、餽赤松殿一

腰・三百貫、管領一腰・二百貫、裏松殿・武州玉堂殿・

山名金吾・一色殿・土岐殿・京極殿・畠山大夫殿・畠山

少輔殿・伊勢殿・飯尾殿各一腰・五十貫、幕府賜 公金裝

太刀一振、大弟賜太刀一振、據怨翁公舊譜、腰一振猶云一枚、

將軍義持二弟義嗣、義教、義嗣任權大約言、應永二十五年、二十九

日、幕府臨邸、公獻白緞甲・金裝太刀・白裝太刀・黑裝

糖等若干事、大弟白緞甲・太刀・長刀・弓矢・鞍馬・小

袖及皮革・毛氈・畫幅・麝香等若干事、餽管領以下十二

美濃守清寬・妖肥伊豆守・肝付河内守兼元・阿多加賀守・

平田右馬助重宗、凡十人見、各獻一腰・一百貫、觀世大夫

奏猿樂、極歡而罷、前後獻遺鳥目五千八百貫・太刀・弓矢

及他物稱是、據怨翁公舊譜、山田聖榮自記、小袖依當時語、蓋謂生

門大夫任薩摩守、其外九人叙爵皆係今日所命、然據此年二月十五日公書、

既稱稱山安龜守殿、蓋宗素稱安龜守、至於今日、因其所稱而賜之命、

自野邊左衛門大夫外恐皆然也、幹岳公時有加治木近江權守氏平、野邊刑

部大輔盛久、氏平子曰能登守忠平、此云加治木能登守當是忠平、盛久子

北原久兼肝付氏、蒲生十郎兵衛系圖、蒲生氏出於大藏冠錄足之後、有

真光坊辨清者、保安中居大隅下大隅、後領吉田、蒲生而居焉、因以為氏、

清寬、舜清十一世孫也、猿樂或作申樂、和事始云、源氏物語乙女卷有猿樂

事、宇治拾遺、堀川院時、內侍所奏神樂、命職事家綱、進新製申樂、禪

僧宜、竹所著輪林胡蘆集、推古天皇時、豐聰太子監國、命奏河勝、作六

六番神樂曲、太子省神字邊、名為申樂、因以十二支之申配之、遂名猿樂、

而河勝子孫世掌其伎、傳數十世至大和國圓滿井座、與外山、結崎、坂戸

並稱大和四座、即今金春・實生・觀世・金剛之祖、然觀宇治拾遺新製申

樂事、頗疑今之在言、而今世稱能者始於東山殿時、相傳以為觀世、觀阿彌

所作、知久、誼久之子、幼為喝食、藤次郎久秀、又次郎忠

通、死於梶山之役、事在元年、久秀、公令知久還俗、以為

誼久嗣、賜之鵜戸丸寶刀、據島津支流系圖、續本朝通鑑、永享

一色、不許紅色衣及綉織服、注釋徒童形垂看者曰喝、兼元、兼重之

曾孫、重宗、親宗之子也、兼肝付甚兵衛、平田監物系圖、肝付

兼重、兼重往見上、平田親宗見上卷永和

三年、公發京師還至泉州堺浦、

天子使女官來乞國役於、公曰、故事諸侯至京、皆有國役、

阿多加賀守等相視不知所對、平田重宗尚少、進而對之曰、

故邑故府、曾無此例、亦辭諸赤松殿、赤松殿曰、既無先

例、不須獻也、事竟寢、諸人皆稱重宗機決、據怨翁公舊譜、山田聖榮自記、

國役依當時語、秋九月、公還國、據怨翁公舊譜、澁谷四族間、公

蓋謂獻遺、之如京師也、多行無禮於國、而山城守忠朝、上總介久世

居碓山城、與澁谷氏交通、久世、守久之子也、據怨翁公舊譜、總州家

譜、

793 「元久公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋」

「元久公」

依有要々日向國救仁郷内はね田のゑもんだ良か門

合水田貳町

本物返し之代ようとう卅貫文ニ三ヶ年之間うりわたし申

處実也、但し三ヶ年すぎ候ハ、折足あり次第にうけ申

候へく候、仍うりけん之狀如件、

應永十七年正月十六日

兼親

794 『載舊記』

嶋津庄大隅方肝付郡野崎内波見村并塩屋湊之事、為由緒

之間相計者也、早任先例、可被領知之狀如件、

應永十七年正月十六日

沙弥(花押)

波見筑後守殿

〔元久公御譜中、正文在肝付半兵衛兼臣〕

795

〔元久公御譜中〕

〔正文在福昌寺〕

(元久)

(花押)

奉寄進

薩摩國谷山郡山田村之内黒丸水田四町之事〔尾御譜ニハ此字ニ作ル〕

右、彼所領者、爲〔前伊豆守入道了秀并菩提料、永代所寄進福昌寺也、雖然爲後代、取進本寺大檀那陸奥守玄忠加判處也、次萬雜公事諸役等悉停止之、於了秀子孫、聊不可有違乱候、仍寄進狀如件、

應永十七年庚寅二月十三日 沙弥了秀(花押)

796

〔正文在榊山源三郎久清〕

嶋津庄日向方隈野郷内十町分事、爲本給間、任其旨所宛行也、早守先例、可被領知狀如件、

應永十七年二月十五日

(元久) 沙弥(花押)

榊山安藝守殿

〔教宗也〕

〔此書、榊山氏三代教宗譜中ニ在リ〕

797

〔久豊公御譜中〕

〔正文在関丘左衛門〕

日向國內倉帖事、爲由緒之上者、任先例、可有知行之狀如件、

應永十七年二月十八日

(元忠) 玄喜(花押)

内倉豊前介殿

798

〔正文在田代氏〕

嶋津御庄大隅方田代村之事、依爲本領所宛行也、早任先例、可被領知狀如件、

應永十七年三月廿一日

(元忠) 玄忠(花押)

田代宗次郎殿

〔元久公御譜中ニ在リ〕

799

〔榊山氏三代安藝守教宗譜中〕

太守陸奥守元久入道玄忠公以參觀之禮、應永十七年令赴京師、六月三日、無恙上著、同十一日、謁于

將軍家義持卿・同義量卿給、同廿九日、奉請待

將軍家父子於玄忠公之私宅、盡美者也、此時一族故舊臣

等拜謁

將軍家者十人、各獻御太刀一腰・鳥目百貫、時以官領之
酌頂戴盃酒、且有恩賜也、賜孝宗以甲冑柄之寶刀、治工大原
守、而被任安藝守、眉目之至也、

「元久參觀記有之」「元久公御譜中ニ在リ」

嶋津殿御上洛

應永十七年六月三日御參着、イ府同十一日御參會候、

進上物 御太刀一腰 鳥目二千貫

從御所樣(義持) 御太刀一振金作

御舍弟新御所樣(義朝)江

進上物 御太刀一腰 鳥目三百貫

從御所樣 御太刀一振

官領江 太刀一 百貫

裏松殿江 太刀一 五十貫

武州玉堂殿江 太刀一 五十貫

山名金吾江 太刀一 五十貫

一色殿江 太刀一 五十貫

土岐殿江 太刀一 五十貫

京極殿江 太刀一 五十貫

畠山太夫殿江 太刀一 五十貫

赤松殿江 太刀一 三百貫色々之唐物

畠山少輔殿江 太刀一 五十貫

伊勢殿江 太刀一 五十貫

飯尾殿江 太刀一 五十貫

同廿九日御屋形江御成候時引物

御所樣江進上物之分

一御鎧一 一御太刀金作 一御弓征矢

一御馬二疋一疋ハ鞍置 一小袖十重 一御太刀白作

一御太刀黒作 一段子廿端 一盆三 金紫堆紅 麝香

一毛氈十枚 一虎皮十枚 一海梅花三拾枚

一面革卅枚 一壺十 南蠻酒 沙糖

一絹百疋

御所樣懸御目之人數

御一家

北郷中務少輔 御太刀一 鳥目百貫

樺山安藝守 御太刀一 鳥目百貫

國方

加治木能登守 御太刀一 鳥目百貫

野邊左衛門大夫 御太刀一 鳥目百貫

北原左馬助 御太刀一 鳥目百貫

蒲生美濃入道 御太刀一 鳥目百貫

鉄肥伊豆入道 御太刀一 鳥目百貫

肝付河内守 御太刀一 鳥目百貫

御内方

阿多加賀入道 御太刀一 鳥目百貫

平田右馬助 御太刀一 鳥目百貫

新御所様江御引物

一 御鎧白糸 一 御長刀 一 御弓征矢

一 鞍置御馬 一 御太刀 一 小袖十重

一 盆二 金紫堆紅 麝香 一 染付鉢一對 沈香

一 繪十幅 一 毛氈五枚 一 虎皮五枚 一面革廿枚

官領江

太刀一 小袖三重 壺五 面革五枚 弓十張 征矢百

麝香臍十

細川殿江

太刀一 小袖三重 壺五 面革五枚 弓十張 征矢百

麝香臍十

赤松殿江

太刀一 小袖三重 壺三 面革五枚 弓十張 征矢百

麝香臍十

御近習人數

伊勢殿江

太刀一 小袖三重 壺三 面革三枚 弓征矢 麝香臍

五

鳥山相模守殿江

太刀一 小袖三重 壺三 面革三枚 弓征矢 麝香臍

五

同中務少輔殿江

太刀一 小袖三重 壺三 面革三枚 弓征矢 麝香臍

五

同七郎殿

同出羽守殿

同少輔殿

新田殿

福賢殿

朝日殿

侍人大名騎馬衆各太刀一 小袖三重

南禪寺江 壺三 鳥目十貫

相國寺江 絹百疋

東福寺江 鳥目十貫

卽宗庵江點心料鳥目十貫

南禪寺都分鳥目三十貫 壺三 胡銅花瓶三 具足一鉢

馬一疋

四条道場江壺三 茶碗皿三百 蜜瓶一 人參十斤 香

爐十 花瓶一對

一条正規導場江壺五 茶碗皿六百 人參十斤

赤松老名敷人江鳥目卅貫 虎皮五枚

依藤殿江壺三 弓十張 征矢百

赤松左馬助殿江弓廿張 征矢百 面革三枚

清阿江鳥目五十貫 壺三 虎皮

直阿江鳥目五十貫 壺三 繪十幅

侍、雜仕、小舍人、力者、御厩七間五間、童子松法師、

輿昇、諸職人鳥目五百貫

御成屋形代候時鳥目千貫

從御所樣御太刀二振・御鎧・御馬、自諸大名馬、物具・

酒肴數々、此外鳥目唐物色々引手物不知數、

伊集院殿御前ニ上洛候而、御在京之時儀被取成候、

包丁人春山

應永十七年庚寅六月二十九日、

大樹義持尊公渡御於 大守元久公之館、京時任中務少

輔、進上物證書左記之、

802 嶋津陸奥守元久之御在京

應永十七年六月廿九日 御屋形江御成候時

御所樣懸御目之人數

御一家

北郷中務少輔 御太刀一 鳥目百貫

栴山安藝守 御太刀一 鳥目百貫

國方

加治木能登守 御太刀一 鳥目百貫

野邊右衛門大夫 御太刀一 鳥目百貫

北原右馬助(全) 御太刀一 鳥目百貫

蒲生美濃入道 御太刀一 鳥目百貫

飢肥伊豆入道 御太刀一 鳥目百貫

肝付河内守 御太刀一 鳥目百貫

御内方

阿多加賀入道 御太刀一 鳥目百貫

平田右馬助 御太刀一 鳥目百貫

「此外文段繁多故略之」

803

「御譜中」

今度在洛之間、大小事義共隨赤松殿言、所以無違失得成就也、吾聞功成名遂而身不退、則却招災害、是以請歸國之免、已達台聽即被恩免也、

804

「正文在之」

其後無音、慮外候、仍刀一腰 國光・太刀一振 國宗進之候、

祝言計候、恐之謹言、

七月八日

嶋津陸奥守殿
(完全)
進之候

「赤松兵部少輔也」
政則(花押)

805

「公上」

丁辭京師之時、直欲爲伊勢參宮、此事觸將軍家台聽、命伊勢州守護土岐入道與安、令開諸關、未有告報、畿内郊外、貴賤仄聞開關之事、相從者不知其數也、

一伊勢神拜事終、而到着泉州境之浦、於茲乎又諸侯之使節來往無間斷、携來區々餽物者不可勝言、丁此時自禁

807

「感應寺文書」

薩摩之國山門院西方之内簡田五丁并薩郡之内天辰別分之事、一向給分宛行所也、無相違可有知行狀如件、
應永十七年十二月十一日 久世(花押)

806

「北郷義久譜中」

裡女子役人來謂執事等曰、一國已上之守護在洛、則奉納國役於 大内者、自古昔至當今、勿敢亂舊規云云、執事阿多加賀守未知其實否、暫有猶豫、時平田右馬助重宗前出曰、嶋津氏古來未嘗有國役云尔、且達件旨於赤松殿、赤松殿返答曰、有由緒無國役、則不可改舊規用新義云云、重宗未到老年、而發古今之要語、可謂當家忠臣也、同年九月下國、則久豐來於山東伸於慶賀、兄弟之交無有異意矣、

應永十七年 太守元久公御上洛時、義久時稱讚岐入道道端可爲御留守居之旨、受 嚴命、新納近江守・佐多人道・樺山入道・山田入道共勉之者也、

元久公 自應永十八年
久豐公 至同十九年

前 舊記雜錄 卷三十三

〔國史 怨翁公 義天公〕

十八年辛卯、公伐澁谷氏、義天公・伊集院賴久引兵來會、公屯清敷、進軍鋒尾、別遣三千餘騎、以禦忠朝、久之之軍、會 公有病、歸鹿兒島、而所遣三千餘騎、分屯稻荷原浮橋樋緣川之間、方議進取之計、軍中傳言、公病危篤、義天公與本田忠親謀而歸穆佐、諸軍皆罷、道路流言、修理亮殿與久世交通、公之取清敷也、事在上四年使伊集院賴久領之、至是城中人往往叛應澁谷氏、賴久委而去之、澁谷氏復取清敷、據怨翁公舊譜、應永記、山田聖榮自記、舊譜・應永記原文止言、別遣三千餘騎、不著將領人氏、疑是義天公、餘尾秋八月六日、公薨在入來院麻笈榮別館北十五町許 係添田村

於清水城、年四十九、葬福昌寺、據島津系圖、廟堂要覽初僧眞梁說

公及世子、使歸佛法、皆惑之、世子小名梅壽、豎歲削髮爲僧、從眞梁受戒、號仲翁和尚、爲福昌寺三世法嗣、據島津系圖云守邦者其法名耳、津系

公唯一男、即世子也、世子爲僧、後竟無男、伊集院賴久聞 公之薨也、使族人携其子初犬

千代丸之鹿兒島、立爲 怨翁公嗣、初犬千代丸者眞梁之

兄孫也、義天公聞之、投袂而起馳至鹿兒島、樺山伊賀

守惟音・佐多讚岐守・若狹守・美濃守・伊地知兄弟・末

弘某等從、適值 公喪已出、執紼引柩、初犬千代丸奉木

主爲前行、眞梁送葬、義天公前擁初犬千代丸奪之木主、

既葬、遂自立爲守護職、公以永和元年乙卯生於鹿兒島、

母佐多氏三郎左衛門尉忠光之女、是歲年三十七襲封、據

天公舊譜、島津系圖、山田聖榮自記、山田聖榮自記曰、賴久稱稱怨翁公

有遺命、立初犬千代丸爲嗣、然據賴久子大隅入道追榮告島津季久曰、家

兄初犬千代丸爲怨翁公猶子、則公許賴久立初犬千代丸、亦不可知、道集

名熙久、告季久語、見圓室公舊譜文明十八年、禮記曰、兄弟之子猶子

也、則兄弟之子宜稱曰猶子、然和俗稱猶子者、但言以人之子爲己子耳、

未必取於禮記之義也、島津支流系圖、佐多左馬助忠直弟曰若狹守、豐後

守氏義第六子曰讚岐守久信、美濃守不見系圖、末弘氏不詳所出、諸家大

概記曰北鄉氏支庶、非也、島津支流系圖、北鄉實忠第五子十郎忠直爲末

弘氏養子、諸家大概記由此致誤、木主、此云位牌、和俗稱養、喪主奉木主

在前行、或曰、賴久使初犬千代丸爲怨翁公嗣、疑眞梁與其謀、臣正讀、謂

此爲疑歎、未知果然、且眞梁誘世子爲僧、使公無嗣、此 惟音、教宗

其罪之大者、不容揜矣、又何求其疵於曖昧疑似之間爲、弗果、馳歸伊集院、據義天公舊譜、山田聖榮自記、是時初犬千

代丸尚幼、其族人家居等欲擁之、以爲亂耳、

當是時伊集院賴久領伊集院・川邊・給黎、播磨守守久居山門院、山城守忠朝居隈城、奄有永利・荒川・羽島等地、上總介久世居碓山城、穎娃・知覽・山田・別府・阿多・田布施・伊作・市來・山北四所皆應之、公所有者、鹿

兒島・谷山・指宿・溝邊・田萬理・敷根・廻・末吉・恒吉・市成・平房・百引・高熊・鹿屋・大始良・下大隅・財部等地而已、據義天公舊譜、山田聖榮自記、應永記、山田聖榮自記云、是時久世居川邊、應永記則曰、公使人於碓山城、與久世忠朝約誓伊集院賴久、久世忠朝至市來、觀望不進、賴久變破公卒、遂以川邊與久世、於是久世徙川邊、則是年久世居碓山城矣、今從之、義天公舊譜於是年、則據山田聖榮自記、於市來役、則據應永記、其說自相矛盾、隈城鄉多古城墟、忠朝所居不詳何處、田萬理不詳、溝邊鄉有地名玉利、郡村高辻、鴨形郡福、冬十月九日、義天公使禰

山鄉有廻村、肝屬郡百引鄉有平房村、據義天公舊譜、閏月十一日、義天寢清平領揖宿郡鳴河村、據義天公舊譜、小松氏系圖、十一月八日、義天公許大始

良某以二十町之地、曰、俟有關所、然後授之、據義天公舊譜、十八日、賜山田久與大隅州市成南持富、使領薩摩州山田上

別府如故、據島津支、流系圖、使禰寢清平領大隅州寄郡西俣村之地、曰、有關所、輒又給之、據義天公舊譜、小松氏文書、小松氏系圖、清平

賴與清平書、稱山城守、初稱山城守、後改左馬助、而應永四年滋川滿左馬助、此年復稱山城守、十年知參差、不必深考、稱十二月十一日、以禰寢清平爲大禰寢院神田名主職、上、同二十七日、義

天公與禰寢清平盟書曰、今日多難、唯君焉依、自今以後願與君游、如父子然、他日得志、必厚報君、有渝此言、

309 「西藩野史」

諸神殛之、上、同二十八日、義天公使德丸氏領大隅始良莊末次地五町、據義天公舊譜

十八年辛卯

此時國中澁谷氏大に蜂起す、元久公京師を辭して國に歸る、或云、公伊勢太神宮ニアリ、亂ヲ聞テ伊勢ヨリ國ニ歸ル、大軍を發し鋒尾に詣り、

稻留原・浮橋・樋縁川・瀬野原・松瀬口數十餘ヶ所に軍し、清色城澁谷黨入來を圍攻む、公俄に病を得て起事あ

たわす、圍を解て鹿兒嶋に歸り是を養ふ、終に起す、八月六日、清水城に薨す、享年四十九、玉龍山惠燈院に葬る、

形ヲ墓邊ニ植、怒翁玄忠大禪伯と謚す、公一男八女あり、七女ハ尼トナリ、一女ハ伊作勝久ニ嫁ス、男ハ梅壽丸と稱す、石屋會下に入て僧

となり仲翁と号す、先是、應永二年、東州に趣く、按ニ、仲翁和尚應永二十年三十四歲ニシテ國ニ歸リ、應永十八年寺ヲ田布施ニ立ツ、太平山常珠寺ト号ス、二十八年四十二歲ニシテ福昌寺三世ノ住持タリ、延長二年五十七歲ニシテ寺ヲ隅州大始良ニ立テ寶陀山含粒寺ト号ス、文安二年六月七日此ニ遷化ス、或云、伊集院德重村ニ終ト、未是ヲ詳ニセズ、更に嗣子なし、於是伊集院彈正少弼賴久聲言して曰、元久公遺命あり、我子初犬千代丸をして立しむ、衆悦ひす、賴久情を察し大兵を揚て府下に入り強て立んとす、傳云、此時賴久カ軍東邊ニ充滿ス、佐多伯耆守親久・北郷中務少輔知久・椋山安

「西藩野史」

久豊公

藝守教宗・吉田若狹守清正・蒲生美濃守清寛、伊地知民部少輔等胥議して急を、久豊公に告ぐ、日州藤佐ニアリ 公大に駭き輕騎を馭テ鹿兒嶋に至る、傳云、佐多若狹守・佐多美濃守・榊山伊賀守・末弘某・伊地知某是ニ從 時に元久公を福昌寺に葬らんとす、伊集院初大犬代公の神主を奉す、梵齋死者ノ後タル者神主ヲ奉スルヲ以テ禮トス、頼久か衆寺中ニ充つ、久豊公憤激ニ堪ず、自神主を奪て奉し葬禮を終ふ、頼久大に恚ミ伊集院に歸て叛す、播磨守守久出水ニ在、山城守忠朝永利ニ在リ、澁谷黨に通し力を戮て亂をなす、三郎左衛門尉久世守久ノ子、頼久に乞て曰、河邊城は我祖伊久の居城たり、君先に是を奪ふ、今や相和し患難相助け誓て志を同ふす、願くハ返して我に與へよ、然して恩を結び交を固せは、又善からすや、頼久諾す、久世河邊に移る、於是黨比して大に國中を亂る、

氏久公之次子、母は佐多三郎左衛門尉忠光女、永和元年乙卯鹿兒嶋に生る、二郎三郎と稱す、修理亮に任す、元久公に續て立つ、陸奥守と稱す、

應永十八年辛卯

肝付河内守兼元叛す、師を帥て鹿屋應永十七年元久公老中鹿屋周防介忠兼入道玄兼ニ賜、を襲ふ、鹿屋入道玄兼急を、久豊公に告ぐ、公大

兵を起し鹿兒嶋を發して市成に船わたりす、吉田若狹守清守清寛・堀伊豆守・敷 先是山田加賀守忠經入道山田氏 五代 援兵を

根某等はニ從フト云、山田孫四郎 卒して鹿屋を救ふ、兼元軍を分て是を擊破る、等戰死ス、

按ニ、忠經、恒吉、宮里、百引、高隈、西村、一軍ヲ起スト、疑クハ此ノ邊ノ主カ、 忠經退て高隈城を保つ、

久豊公是を市成に召す、忠經衆を卒して來謁す、久豊

公軍を進む、兼元救ひの至るを見て圍を解て去ル、大始

良の軍鹿屋を援ふに會て鬪ふ、鹿屋玄兼も又撃出して夾

攻む、兼元大に潰亂る、沼に陥て死するもの百を以數ふ、

兼元カ一族藥丸式部少輔等戰死ス 勝に乗し逃るを追ひ、首級許多を得て歸

る、捷書を、久豊公に獻す、公下大隅を巡て歸る、傳云、

兼元カ一族藥丸式部少輔等戰死ス、勝に乗し逃るを追ひ、首級許多を得て歸

る、捷書を、久豊公に獻す、公下大隅を巡て歸る、傳云、

兼元カ一族藥丸式部少輔等戰死ス、勝に乗し逃るを追ひ、首級許多を得て歸

る、捷書を、久豊公に獻す、公下大隅を巡て歸る、傳云、

兼元カ一族藥丸式部少輔等戰死ス、勝に乗し逃るを追ひ、首級許多を得て歸

る、捷書を、久豊公に獻す、公下大隅を巡て歸る、傳云、

兼元カ一族藥丸式部少輔等戰死ス、勝に乗し逃るを追ひ、首級許多を得て歸

伊東大和守祐安日州曾井城、傳云、曾井氏はニ據ル、 を圍ミ攻

む、久豊公ノ女ヲ娶ル、 柗山安藝守教宗・北郷中務少輔知久三侯、高城、白糸、細江、

曾井を援ふ、祐安急に逆撃て是を破ル、海江田ノ軍是ニ從フ、 教宗・知久敗て

高城に退く、傳云、佐多兵部少輔戰テ傷ヲ得、 高木左馬介日州

高城ノ援ヲ得テ免ルト云、

高城に退く、傳云、佐多兵部少輔戰テ傷ヲ得、 高木左馬介日州

高城ノ援ヲ得テ免ルト云、

高城に退く、傳云、佐多兵部少輔戰テ傷ヲ得、 高木左馬介日州

高城ノ援ヲ得テ免ルト云、

高城に退く、傳云、佐多兵部少輔戰テ傷ヲ得、 高木左馬介日州

高城ノ援ヲ得テ免ルト云、

ノ内高木村ヲ領ス、又梶山城主タリ、
嘉吉年中叛ヲ以忠國公ノ爲ニ伏誅ス、
戰死す、久豊公曾井の

憐ミ、其兒次子ナリ、を召て父子の約をなし、次郎三郎公ノ幼字ヲ云

亦又紋ヲと名つけ、鹿兒嶋郡永吉邑十二町を賜ふ、時に祐安

倪シビを高城に入れ、夜に乘し火を蹤て西城高城ノ内を襲ふ、

此時末弘甲斐守・佐多若狹守・佐多臘岐守・教宗・教久 久豊公

に告曰、事既に急なり、敵の兵勢當るへからず、其銳氣

を避て時を俟すんへ甚危へし、於是夫人伊東祐安女及び二子

長へ忠國公次ハ薩摩守用久也、難を末吉に避しむ、久豊公も又鹿兒島

に歸る、伊東終に川南・川北を略す、

811 應永十八年辛卯

山田孫四郎 肝付河内守兼元兵を起し、鹿屋周防守忠兼か鹿屋の城

死ならん、
年月なし、

812 「國分宮内澤氏文書」

しんかうならひにそのつねミの事、本知行の由御申候、

八幡ニ一左右うけ給へるへく候、但まきれなき本領御事

にて候うへは、それかし御子にて候、よて康俊より永代

にゆつられ候文書に一筆をそへ候て被進候、そのつねミ

の内一期ゆつりの文書さへとりかへし候てそへ候、兩所

之事、他のさまたけあるましく候、本よりゆつり狀それ

に進おかれ候といへとも、それかし一筆のよしうけ給候、

留守殿と申談候趣康俊のゆつり狀分明之間、澤殿永代け

いやくしかるへきよし申定候て、爲後日證文進之所如件、

應永十八年二月十一日 左衛門尉滿範(今出)(花押)

813 『感應寺文書』

河邊當所間寺領事、或書札惣抄五通云々、

應永十八年二月十五日 上總守久世判

814 「正文在田代氏」

大隅國田代村内當知行分事、雖爲縦天役、別而所令停止

萬雜公事以下也、仍爲後證狀如件、

應永十八年三月廿三日 元忠(元忠)(花押)

田代宗次郎殿

「元久公御譜中ニ在リ」

815 「元久公御譜中」

「爲在山川正龍寺」

一當寺開山虎森和尚大禪師者、京城五山之上瑞龍山太平

與國南禪々寺之塔頭、歸雲院住持蒙山大和尚之弟子也、

廣濟寺開山南仲和尚者、俗氏島津一家伊集院無等大定門六番目之御子也、諱名景周号南仲畢矣、同十二番目

御子者、福昌寺開山石屋大和尚也、諱名眞梁、十六歲、

於南禪歸雲院落髮受具、廿七歲之時入越、永平通幻和尚會下云、故虎森和尚者師兄也、其以後虎森此國爲

渡唐不圖下向之砌、從石屋和尚前恕翁樣被成言上、山

川正龍寺爲御牌所建立矣、虎森和尚則開山也、知行者當所無之故、指宿内大吉寺領三町被付置也、虎森以來

二三代迄兩寺格護來云、

一正龍寺初建立大檀那嶋津第七代元久公、法名恕翁玄忠

大禪定門也、虎森和尚俗氏者近江之京極殿也、

〔元久譜中〕

一元久在洛之間、澁谷四ヶ所面々以清敷畔矣、應永十八年辛卯、率軍來到其地構陣營於銚之尾、又嶋津上總介

〔山崎城ノ内〕

久世及伯父山城守忠朝共與澁谷在碓山城、元久在銚尾

陣之際、忽繫病痾歸龐島矣、雖然、催山西・大隅・南

方之兵三千餘騎、向于山北、而構陣於稻荷原・浮橋・

樋緣川之堺、于時敵兵爲宮里通路入守中郷之壘、因茲、

諸陣往還不得容易、於茲乎、北郷某爲將帥率精兵五百

人、構陣柵於諏方松山、屢發野伏於瀨野原、又市來・

伊集院之兵五百人許屯松瀨口、於是乎有群議曰、構數

艘之川舟可通樋緣陣之難通融、不然又放火京泊、而坊

津・泊津・別府・市來之大船招寄二三十艘、小舟五艘

三艘組合、固垣楯於舷、而俟晦朔之高潮、以可漕上、

縱雖飛羽箭欲防遮、漕上七迫之邊、而遣小舟上下白濱

之地退河邊之敵、則通融樋緣之陣、何難之有乎、未發

龐島之後兵到于當地、則使屯松瀨之騎步、渡稻荷原過

寺山際、構陳柵侮敵城、則樞崎之壘必不得保乎、各同此

議之際、修理亮久豐與本田忠親法師安了謀、而先歸山

東矣、元久之病日々變夜々重、而或不得保生乎、其聲

達山北陣中、則國中貴賤評議區々、而且各候龐島矣、

一族家臣奔波、請於諸寺諸山貴僧高僧、莊嚴香花於堂

上、修於大法秘法、雖禱爾於上下神祇敢無其驗、諸醫

群聚進良藥、用針灸亦不能也、

817

〔元久公御譜中〕

應永十八年辛卯八月六日卒、享年四十九也、法名玄忠號

〔義天公譜中〕

一奉 太守元久公之命、爲山東之宰、移居穆佐高城、而池尻・白糸・細江等之諸所、皆久豐之所以知也、

恕翁、福昌寺殿、

元久治國、自明德四年癸酉至應永十八年辛卯、共十九ヶ年也、

伊集院彈正少弼賴久雖守鋒尾之陣、聞元久之計音、則迴和階之謀、以既成矣、故開陣而歸于伊集院也、

元久

仲翁和尚乳名梅壽

福昌寺三代住持也、○康曆元年己未誕生、

應永二年乙亥爲遍參赴東國、歲十七、

應永廿年癸巳歸國、○永享四年壬午住惣持寺、

文安二年乙丑六月七日遷化、歲六十七、
〔開州始良舎粒寺者落命之地也、或曰德化伊集院德重云々〕

女子八人

共爲比丘尼、其内一人五代腹者、伊作四郎左衛門尉

勝久室、委曲記于 元久之譜中、

〔全〕

久豐未有妻室、於茲乎、娶伊東大和守祐堯之女、由是不合 太守之心、相爲氷炭、漸引薩隅之軍衆、而構陣於山東、經年月之後、有和諧之媒、而先息男虎壽丸謁太守、而後 太守歸陣也、

一太守承參洛之命、以應永十七年庚寅發于廳島、着御于日州油之津、丁此之時久豐往于其地、既遂對面、而後兄弟之交無有他事者也、

〔全〕

一太守元久公在清敷之陣之際、羅病痾歸鹿兒島、雖加療養不驗、而應永十八年辛卯八月六日卒矣、伊集院彈正少弼賴久之子初犬丸、謂 元久公之有兼約、渠之一族家臣等携初犬丸參候廳島、其計音達山東、即日發於穆佐、夜以次日到于廳島、相從輩者、伊地知氏兄弟・佐多讚岐守・同姓若狹守・同姓美濃守・樺山伊賀守・末弘氏已下也、漸迄葬送之期、久豐忽然參進于和尚之前、執持于恕翁之位牌、因茲初犬丸不計空手、赤面無與之至也、傳聞初犬丸欲雪當座之恥、則爲葬送之障、且非猶子之

道、既過中陰、則各失眉目、潛歸伊集院矣、久豊自爲守護、當此之時國中面々已企亂逆、往々蜂起不勝言也、

「篠原武右衛門家藏文書」

大隅國菱刈院地頭職之夏

一 園田掃部入道知行分

入山地頭分四丁
久留名片平門一 針持門一

一同隼人入道知行分

入山地頭分二丁
未浦名地頭分四丁

一同六郎兵衛入道知行分

入山地頭分三丁
佛別府地頭分門一

一同又太郎知行分

重富名權左近門一
いそろま地頭分門一

一 光武滿三郎知行分

長久名洲河門一 重留名地頭分福原門一
小大丸名 山城地頭分門一
一 下德邊地頭分門一

一 桂木二郎左衛門知行分

長久名宮田上下字不知 祓渡瀨門
一 長留名上田中門一 徳光名地頭分門一

同孫二郎

一 篠原主計入道知行分

長留名河地門一

一 廣武式部入道知行分

花北地頭分門一
久留名神田門一

一 篠原右京入道知行分

長留名濱川門一
井手本門一
長久名楠原門一 上津原門一
田邊山門一 小大丸名之内北鶴田田邊門一

一 萩崎鶴王丸知行分

久留名池嶋門一 萩原門一

一 松本源三知行分

入山名地頭分門四丁
久留名權野門一

一 岩崎六郎左衛門入道知行分

久留名河屋門一
重留名隅蘭門一

一 鶉羽彦三郎入道知行分

荒田原地頭分門一
久留名上下歩

一 大籠左衛門二郎知行分

小大丸名内北鶴田門一

一 篠原豊前守入道知行分

重留名地頭分 寒澤水門一

一 宮王丸名地頭分門一 小大丸名之内千華榮津留・松木

一 藺三ヶ村 藤嶋地頭分門二 鶉木地頭分門一 原別府

一 地頭分門一 掘園下歩 長留名鳥市門一 籠嶋門一

一 宮田上下歩 平次津留上下歩 長留名新川門一 篠名

一 地頭分門一 諏訪田池袋門一

此外三ヶ名 地頭徳分足

長留名 米錢百餘貫

長久名 米錢八十餘貫

久留名 米錢四十餘貫 此外餘名徳分足在之、

應永十八年八月十日

〔本文書へ底本ニ省略部分多シ、県立図書館本ニヨリ補フ〕

「町田氏庶流阿多氏系圖」

「阿多飛彈守久清譜中」

「正文在志布志之士阿多飛彈忠錄」

薩摩國阿多郡之事、爲祈所宛行申處也、仍任先例、可有知行之狀如件、

應永十八年八月廿二日

町田飛騨殿(久患)

(伊集院頼久花押ニ似タリ)
了玄(花押)

「案文載山田譜」

畏言上

一右、意趣者、若御御座時者、一身大綱存、可致奉公候事、

一若御御座候共、請御意可致忠節事、

一蒙仰条々、於一身生涯不背上意、可立御用事、

一和讒荒説入御耳候時者、被仰下可申上事、

若此条々偽申候者、

日本國中大小神祇、殊者伊勢天照大神宮 正八幡大菩薩

熊野三所大權現 天滿大自在天神 諏方上下大明

神御爵可罷蒙候、

應永十八年八月廿八日

「山田出羽守久興入道玄威」
沙弥玄威

進上 伊地知殿

「正文在山田七郎左衛門久通」

契約

一右、意趣者、若御御座時者、人々大綱存、可致忠節事、

一於此内不慮子細時者、其方御大事をハ身之大事と存、

身之大事をハ御大事と被思、生涯不可有替篇事、

一和讒凶害荒説時者、相互ニ申承候へて、信用あるまじき事、

此条々偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡大菩薩 熊野三所大權現 天滿大自在天神 諏方上下大明神御爵可罷蒙候、

應永十八年八月廿八日

(久患)
玄喜(花押)

山田殿

(久興、玄威)

「正文在樺山源三郎久清」

契約

一今度屋形如仰置候、若御お取立申一味同心可致忠節事、

一心底疎略不存候之間、於于私大小事申、御大綱之時者、

雖不甲斐候、御用ニ可立候事、

一此中和讒凶害出來荒説時者、相互ニ以面申披、就諸事不可有二心事、

若此条々偽候者、

不可有ニ心事、

若此条々偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡大菩薩 熊野三所大權現 諏方上下大明神 稻荷大明神御討可罷蒙候、

(教宗)
枕山殿

「此書、樺山氏三代教宗譜中ニ在リ」

應永十八年八月
(平田親宗)
玄親(花押)

828 「正文在樺山家」

(教宗)
枕山殿

契約

「此書、樺山氏三代教宗譜中ニ在リ」

一右、意趣者、若御御座候時者、身之一大事と存、前々不相替可致忠節事、

827 「正文在樺山源三郎久清」

契約

一今度屋形如仰置候、若御御座候時者、一味同心ニ可致

忠節事、

一於私不慮子細出來候する時者、御大事を身大事と存、

相互ニ用ニ立被立可申事、

一此中ニ和讒凶害出來荒説時者、相互ニ以面申披、就諸

事不可有二心事、

若此条々偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡大菩薩 熊

野三所大權現 諏訪上下大明神 稻荷大明神御討可罷

蒙候、

應永十八年八月

(久慈)
玄喜(花押)

829 「正文在樺山源三郎久清」

若此条々偽申候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 熊野三所大權現

諏訪上下大明神 正八幡大菩薩 天満大自在天神御討可

蒙罷候、

應永十八年九月二日

北原左馬助久兼(花押)

一右、意趣者、枕山殿事者不及申候、過候つる方も取分別而憑存候、於自今後者、成親子思、大小事無隔申承、

御大事身大事一切別ニ不可存事、

若此条々偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡大菩薩 熊

野三所大權現 稻荷大明神 天滿大自在天神御討お可罷

蒙候、

應永十八年九月六日

〔久豊公御法名〕
玄喜〔花押〕

〔樺山教宗〕
嶋津安藝守殿

〔此書、樺山氏三代教宗譜中ニ在リ〕

830 「正文在樺山家」

今時分子にて候徳犬丸御意ニかけられ候ニよて、上方より無子細蒙仰候御事、千万畏入存候、於後々貴方を万事ニたのみたてまつり、無他事御ようにまかりたつへく候、

若糸偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡大菩薩 熊

野三所大權現 天滿大自在天神 諏方上下大明神御討を

可罷蒙候、

應永十八年九月十一日

町田飛駄（傳）入道廣林〔花押〕

〔教宗〕
樺山殿

831 『入來院氏文書』

薩摩之國莫祢院一曲之事、依今度志宛行所也、致子（至）と孫

々、無相違可有御知行、依狀如件、

應永十八年九月十五日

兵衛尉久世〔花押〕

〔重長〕
清色殿

〔伊久一流久世ノ譜中ニ在リ〕

832

〔伊久一流系圖〕

〔久世譜中〕

〔正文在田布施衆二階堂三左衛門〕

契約

一世上如何躰雖轉變候、捨親子兄弟、大事お身之大綱と

存、用ニ可立申事、

一大小事共ニ無腹藏可申談事、

一自然有和讒凶害之仁、不慮之荒説出來覽時者、互以面

可申披事、

若此条々偽申候者、

日本國中大小神祇、殊以伊勢天照大神 八幡大菩薩 諏方上下大明神 天滿天神 稻荷大明神御討お可罷蒙候、

應永十八年九月十八日

久世(花押)

二階堂六郎殿

833 「正文在志布志鹿屋氏」

返といたつらに、長と御辛勞千万候、御痛敷難申盡
恐入候、諸事憑存候、仍國面と方へも御通有候へ、
便□と御□可給候、

此間、野邊殿肝付へ被越候、よて諸事事延候、無念至候、
兼又野邊殿より只今いの時返事到來候、肝付方返事同篇(兼元)
ニて候間、先鹿屋城ののくひに御打寄、陣くめされ
可然候、此とほり兩方老若ともに可□申遣候、其返事(速)にて
陳事をへ重可申談候、相構へ万事を御すて候て、先陣
とくいたをめされ候て可然存候、兩方事とも多分案中
罷成候間、大慶候、其上重御了簡分共候、其意趣旨進使
者可申談候、尚と此間、諸事御辛勞中く難申出候、恐
惶無極候、了所の事もその御辛勞には少もおとらすこ
ぞ存候へ、不具謹言、

九月廿一日九の時 久豊(花押)

北郷殿(知久)
北郷殿(教孝)
枕山殿
山田殿(久豊)
山田殿(周防入道)
鹿屋殿

834 契約

右、意趣者、仰公方、於私者、大小事不殘心底申承、御
大事之時者、身之大綱と存、可罷立御用候、如此申定候
上者、万一不慮讒者出來、和讒凶害お雖申候、不可有御
信用候、左様之時者、直仁承仰申入、可散申不審候、若
此條と偽申候者、

日本國大小神祇、殊以
伊勢天照大神宮 熊野三所大權現 正八幡三所大菩薩
諏方上下大明神 稻荷大明神之可罷蒙御討候、
應永十八年九月卅日 備前守仲頼(花押)
枕山殿(教孝)
契約
一右、意趣者、於三ヶ國御事者、如何様雖轉變候、無違

⑤
扇可申入事、

一此内不慮之子細出來候時者、御大事お身之大綱と存、

可馳參事、

一若和讒凶害候荒説候者申上、蒙仰候へて不可有信用事、

若此条偽申候者、

伊勢天照大神 熊野三所權現 八幡大菩薩 諏訪大明神

天滿大自在天神御爵お可罷蒙候、

應永十八年十月三日

前對馬守久重(花押)

836

『安養院文書』

西原門分

一田の成物一貫此内百六十八文餘
三百二十六文

田の成物一貫百六十八文

一桑代百文

一藪の成物百三十文

一秋さつしゆう三百文

一けんちうまい一斗四升多ちせんのみす

一むぎのねんく五斗のへへ七斗

應永十八年卯拾月七日

宗純(花押)

837

「正文在祿寝右近重永」「久豊公御譜中ニ在リ」

薩摩國揖宿郡之内鳴河村之事

右、爲祈所宛行也、任先例、不可有領掌相違之狀如件、

應永十八年十月九日

久豊(花押)

禰寝殿「山城守清平也」

838

(本文書ハ八五三号文書ト同文ニツキ省略ス)

839

「正文在樺山源三郎久清」「樺山氏系圖池尻伊賀守譜ニ在リ」

讓与

右、日向國宮崎郡之内、戸次丹後守之跡三分一并樺山北(領時)

方原之左近督作之田島、同南方平左近作田島、仲牟禮之

浦牧野之村合所々四ヶ所、愚息眞久仁所讓渡也、惣領守

孝宗之下知、諸役お可勤仕者也、仍讓狀如件、

應永十八年十月九日

沙弥道春(釋山音久)

伊賀守殿(池尻推音)「山東広原ニ於テ戦死トアリ」

840

「正文在樺山源三郎久清」

讓与 孝宗分

右、京都之御下文并代々探題之御教書、次一家之惣領之御狀共之所領等、當知行不知行不殘愚息孝宗仁所讓与也、此内日向國宮崎郡内戸次丹後守之跡三分一者、眞久仁讓候也、可有談合者也、仍讓狀如件、

應永十八年十月九日

(禪山音心)
道春(花押)

(禪山教宗)
安藝守殿

「此書、樺山氏三代教宗譜中ニ在リ」

(傳家龜鏡)ニヨレバ、安藝守殿ノ宛書ハ案文ニアリ

841 「久豊公御譜中」

「正文在田代縫殿清長」

尚々時分ハ自是可申候、御意趣如此候程ニ、時節ハ大寺ニ申合候て可申候、返々御念比至、誠爲悦無極候、

兩度大寺方へ御意趣通承子細候、雖千万悦喜仕候、時節ハ自是可申候、今程者それをはなれず御入候するか爲、御ことに於身可然候、返々御念比承、誠以不知所謝候、諸方不審等細々示給候者、可爲悦候、委細之段者大寺可申候之間不及重言候、恐々謹言、

十月廿八日

田代宗二郎殿

久豊(花押)

842 「應永記」

一同十八年辛卯、久世伯父忠朝爲先、澁谷成一味、郡内ニ乱入、被構碓山、去程ニ山西南方大隅ヲ靡ケレハ、三千余騎山ヲ越、稻荷原・浮橋・樋縁河之堺ニ陣ヲ取ル、御方ノ巧ハ宮里ノ通路中郷ノ要害ニ打入テ、北郷殿ヲ爲大將、諏方ノ松山ニ甲五百陣ヲ取、而瀬野原ニ野伏ヲ出サル、市來・伊集院勢常ニ甲五百計ニテ松瀬ノ口ニ澹、以平朶舟、江州ノ樋端之陳ニ通夏、不可有子細、不然者先年萩嶺ノ如御陳ノ時、京泊ヲ焼拂、坊泊・別府・市來之大船廿艘來テ、朔日比之高鹽ニ楯前之邊、高江之河縁ニ漕寄テ可上、船ハ舳艫舷ニ垣楯ヲ可擡、縱敵方ハ五拾騎卅騎雖懸矢射、七迫邊迄漕上リナハ、不可有子細、小舟ハ五艘三艘モ組合テ白濱邊迄漕上漕下、樋縁之陳ニモ可通夏、只可如陸地、亦跡勢五百騎程魔島ニ着候由相聞得鼻李、其勢著者松瀬之浮勢稻荷原ニ打渡、寺山ノ際打通、陳ヲ取、野伏ヲ出ル程成ラハ、握崎勢ハ不可消、必被定之處、魔島ノ左右

到來ス、匠作ハ安了ヲ召テ有談合、暫山東・新別府ニ御越トソ聞得計ル、怒翁ノ御夏ハ一兩日ニ可極之由、世上ニ申奉幸、國ノ人々成心々被見得、八月六日終ニ怒翁薨給、御年四十九、短命事成無念、共三ヶ國ヲ靜謐シテ在京仕玉ヒ、勝定院御所之懸御目、被蒙御感夏共餘多アリ、而懸御暇給ハラセ給テ、在國仕玉フ夏社目出巢レ、去程ニ久豊・久世一ツニ成玉フノ由聞得ケレハ、頼久一人ニ成大綱ト、大村・入來・山北ヲ去テ伊集院ニ引退ル、去ル間水引兩城ヲ自高城有所望、久世領狀アリテ、從高城大勢ヲ被押向之間、彼城則時ニ爲没落、勞敷哉、先忠ト云ヒ、守護町之外垣ニテ有物ヲ御心淺、久世此人々ヲ被失物哉、如今者當國ヲ可被治不定哉、加難破人多リケリ、去程ニ自鹿兒島匠作ノ御使ニ伊地知縫殿助碓山ニ被越、久豊・久世合躰ノ上ハトテ、備後守家親碓山ニ被參、久世御悦喜不斜被仰巢ルハ、依今一左右ニ可有越山候、其時者市來殿ヲ可憑存候ト被仰計幸、澁谷ノ面々ニ被通テ令越山、串木野ニ御逗留有り、重テ以本田安了久世ニ有談合、天辰了監寺其比ハ爲執權、ヲヒシテ、レシキ震敷問答ト聞得シカ共、人ハ不知之、而久世・忠朝市來之宮園ニ御着アリ、匠作者平等寺ニ

被召御陳、久世急キ桑波田寺腋ノ邊ニ可差寄給候、市來殿ヲ憑存通、匠作再三難被仰通、久世難澁候間、平等寺ノ陳ヲ引退ケル、匠作ノ御心底ハ怖候ト、此時ニ了監寺之計策顯タリ、家親大ニ被驚、魔島ニ被進使者、御陳ニ遲參夏、先失面目候、但山北ニモ有御談合、久世急ニ越山候ヘト依被仰、領内ニ打懸給間、御一味ト存候ヒテ、馬場讚岐守ヲ進候ヒテ、自今以後之身上、於貴方様怒翁之御時ニ不可相替候由被申、匠作御悦喜相半也、此氣色御覽玉ヒテ、久世者河邊ヲ請取玉フテ有御越、忠朝者隈城ニ歸玉フトソ聞得、同廿年云々、

843

〔義天公御譜中〕

一山北四ヶ所開陣之際、大夫判官守久・山城守忠朝・北郷久照・野頸殿已下一族皆先入薩摩郡、而守久入部于山門院、忠朝居于隈城矣、薩摩郡内永利・碓山・荒川・羽島等之諸所屬渠之旗下、且復川邊爲伊集院彈正少弼頼久之領地、上總介久世請之定居城矣、故頼娃・知覽・山田・別符・阿多・田布施・伊作・伊集院・市來等之諸所又屬渠焉、久豊之旗下麿嶋・谷山・指宿・吉田・蒲生・稅所氏・本田氏・溝邊・田萬理・敷禰・廻・

和田氏・高木氏・北郷氏・樺山氏・末吉・恒吉・市成
 ・山田氏・平房・宮里氏・百引・高岳・鹿屋・大始良
 ・下大隅・財部等也、

〔全〕

一久豊使伊地知縫殿助往碓山、達和陸之事於久世、于時市來備後守家親亦到于碓山、述和陸之悅、再使本田法師安了往碓山、達蜜事於久世曰、如古來久世自南方至山門院施政事、久豊自鹿兒島至大隅山西爲下知、久世與吾長如水魚相交、則誰敢有敵薩隅二州者乎、若容此言、則爰伊集院彈正少弼賴久亂國家之企既露顯、與久世俱欲退治賴久、與同是幸也、久世答曰、安了所傳各以爲然、久世何背此議乎、因茲撰吉日良辰、引率所屬久豊之軍衆、自滿家川田向邊至平等寺構陣營、而久世・忠朝到于市來之宮園、俟未發向、且差价使速可有發向于桑波田寺脇之邊、勿敢猶豫、於家親亦同以此言矣、雖然久世變前約不發一人、是以賴久率精兵殆一千騎許、向平等寺一陣、飛羽箭競戰者甚以急也、若不去當陣好戰經數日、則恐不得遁乎、見可而進知難而退師之常也、與諸將俱議、而已歸陣、則吉田某・肝付某殿、強敵乘勝競

至、吉田某返轡奮威吐詞屈敵、肝付某同會釋引退、雖

然銳兵彌至、於茲吉田之從兵（如也）勝屋大藏還向、提太刀切

齒盡筋力散火挑戰、丁此之時伊集院之族吉俊某被傷、

由是合戰止、互相退矣、夜暗之歸路不用心緩々然、爰郡

山之庶卒等不計變心、求狹所潛群集、奪捕肩荷諸物兵

具乘馬、忽然退去矣、由是其後川田・比志嶋已下之要

害堅門壁、入守兵警衛敢不怠也、當此時也、久世爲得

佳期入部于川邊、而忠朝歸于隈城矣、市來備後守家親

遣价使於鹿島曰、今度障久世・忠朝之變意、述所不着

陣伊集院之非、且復期後來、以達可抽忠功之厚旨者也、

845

〔全〕

一寄郡之院肝付凶徒蜂起、而鹿屋周防介之居城、構陣柵飛羽

箭、所以攻責甚以難儀也、此事已達于鹿島、則久豊率

薩隅之師旅、欲救渠之危急、雖然帖佐・加治木仇敵也、

催吉田・蒲生・本田・稅所・敷禰・廻之某等、鐵軍船

解纜渡廻地、往市成入山田某之館、

846

〔義天公御譜中〕

一久豊未至之際、夫境面々恒吉・宮里・百引・高岳・西

「山田久興譜中」

「案文在山田七郎右衛門久通」

畏言上

一背上方就別人不可身持事、

一或ゑん者、或近付よて御意そむき、其人ニ被引ましき

事、

一於身二心なく御用立申へき事、

ひとへニ公方ならてたのミ存外無他候、

若此条々偽申候者、

日本國中大小神祇、殊ニハ

伊勢天照大神宮、正八幡大菩薩、熊野三所大權現、天滿

大自在天神、諏方上下大明神御討可罷蒙候、

應永十八年壬十月二日

(山田久興)
沙弥玄威

右口裏ニ包
「けんげい、状をまいらせ上られ候案文」

848 「牛主」

一右、意趣者、今度一大事刻、取分御志候上者、身之於
生涯無替篇、(變)近付通し申へき事、

一如此申定候上者、御大事をハ、身之大事と可存事、

一於此内不慮和讒凶害荒説時者、直ニ申披候へて、不可

有信用儀事、

若条々偽候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神、正八幡大菩薩、熊

野三所大權現、諏訪上下大明神、天滿大自在天神御討お

可罷蒙候、

應永十八年潤十月十一日 久豊(花押)

(久興、玄威)
山田殿

「此文書、山田久興譜中ニあり」

福昌寺寄進所々文書之次第

二通 長谷庭寺之敷地内水田并惣文書

一通 宇宿之村一圓

一通 池上之田畠

一通 爲崇鑑寄進 郡本之内水田
鹿兒島之内

一通 中蘭一ヶ所 鹿兒島之内

入牌之分

一通 式部常陸守 鹿兒島之内
中牟田之水田

一通 吉田殿 谷山之山田之内
黒丸之門一ヶ所

一通 爲敬外寄進谷山福本内陽屋蘭之門

一通 爲同敬外寄進指宿之内迫田

一通 善應庵之敷地之事

應永十八年潤十月廿二日 久豊(花押)

「久豊公御譜中ニ在リ」

日向國北郷嶋津内并薩摩國鹿兒嶋知覽見内所々買得之地之事、不可有子細也、任早先例、可令知行者也、仍爲後日之狀如件、

應永十八年潤十月廿五日 久豊(花押)

(教宗)
枕山殿

「此書、樺山家三代教宗譜中ニ在リ」

日向國北郷三分一并宮丸名之事、爲由緒上者、早任先例、可令知行者也、仍爲後日之狀如件、

應永十八年閏十月廿五日 久豊(花押)

(教宗)
枕山殿

契約

一仰公方、一味同心可致忠節事、

一成親子思、御大綱をハ身之大事と存、身之大綱をハ御

大事と被思召、不殘御意承、不殘愚意申入、大小事お

可談合申事、

一如此申承候上者、自然讒者出來候て、和讒凶害雖申候、

相互ニ達申承候て、可被有信用事、

若此条々偽申候者、

日本國大小神祇、殊者伊勢天照大神 熊野三所大權現

正八幡大菩薩 諏方上下大明神 天滿大自在天神御爵お
可罷蒙候、

應永十八年十一月二日

(北總)
中務少輔知久(花押)

(教志)
椀山殿

「此書、椀山氏三代教宗譜中ニ在リ」

853 「久豊公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋家臣喜入衆志々目正兵衛義辰」

今度依忠節、闕所出來時者、最前二十町所可宛行也、仍
爲後日支證狀如件、

應永十八年十一月八日

久豊(花押)

(長脱之)
大始面と

854 「正文在椀山家」

(教志)
椀山殿分

上小河村水田坪付

一にいたの門二町八反

用作一丁四反

相國寺田八反

已上五町

應永十八年十一月十三日

855 薩摩國之内河上同河野邊内宮之事、當知行分不可有相違

所也、早任先例、可有領掌之狀如件、

應永十八年十一月十五日 久豊(花押)

(家久)
河上殿

856 「正文在山田氏久興譜中」

大隅國市成之内南持留事、爲給分所宛行也、早任先例、

可令領掌之狀如件、

應永十八年十一月十八日 久豊(花押)

(久興、文感)
山田殿

857 「全」

薩摩國山田之内上別府事、爲本領上者、所不可有相違也、

早任先例、可令領掌之狀如件、

應永十八年十一月十八日 久豊(花押)

(久興、文感)
山田殿

〔久豊公御譜中〕

〔正文在祢寢右近重永〕

大隅國寄郡之内西侯事、肝付老共之跡并兵部少輔知行分
參拾町爲給分所宛行也、同所相殘地等事、闕所時者、彼
在所立替可進之狀如件、

應永十八年十一月十八日 久豊(花押)

祢寢山城守殿

〔正文在河田氏〕

〔寫在西侯氏〕

大隅國下大隅市(成)□名之事、郡山之代として進候之間、預
置所也、(任)□先例、可有領知之狀如件、

應永十八年十一月廿七日 久豊

比志嶋殿(久豊)

河田殿

西侯殿

『正文國分正八幡宮社司澤氏藏』

奉寄附

正八幡宮

右、大隅國下西郷事、爲當宮造營祈所、所奉寄進之狀如
件、

應永十八年十二月三日 藤原久世(花押)

〔正文在樺山氏〕

契約

一仰申 公方、可致忠節事、

一御大事身大綱存、身大事御大綱と被思食、就大小事申
承、可御用立申事、

一如此申談候上者、自然和讒凶害之仁出來雖申子細候、
相互申承候へては不可有御信用事、

若此條々僞申候者、

日本國中大小神祇、殊者伊勢天照大神宮 熊野三所大權
現 正八幡大菩薩 霧島六所大權現 天滿大自在天神御
爵可罷蒙候、

應永十八年十二月五日 元親(花押)

樺山殿(教忠)

〔正文在祢寢右近重永〕

大隅國大祢寢院之内神田名主職之事

右、爲新所之宛行也、早任先例、不可有領掌相違之狀如件、

〔清平〕
祢寢殿

應永十八年十二月十一日 久豊(花押)

864 「久豊公御譜中」

〔清平ナリ〕
祢寢殿

〔正文在始良衆大圓房〕

「久豊公御譜中ニ在リ」

大隅國始良庄末次五町分事、爲給分宛行所也、任先例、可領知之狀如件、

863 「久豊公御譜中」

應永十八年十二月廿八日 久豊(花押)

「正文在祢寢右近重永」

〔得九氏ナリ〕
徳丸殿

契約

一右、意趣者、此刻別而憑入候之處、御同前候上者、成

865 「伊久一流系圖守久譜中」

親子之思、御大事お身之大綱と可存事、

〔正文在北郷氏内都城野村大右衛門〕

一如此申談候上者、運をひらき候時ハ御力を副申、弥と
りわけ申承、不可有他事候事、

薩摩國山門院惣領河嶋門内_{町壹}、給分所宛行候、別在所出
來候時者、可立替候、其間者早可有知行狀如件、

一於此内和讒凶害出來候時者、申出候する物を野心と存、

應永十八年十二月廿九日 沙弥(花押)
_(守心)

生涯之間無違篇御用ニ立たれ可申事、

上原大學殿

此条々僞申候者、

日本國中大小神祇、殊者伊勢天照大神 正八幡三所大菩

866 「國史卷之九」

薩 熊野三所大權現 稻荷大明神 諏方大明神 霧嶋六

〔國史卷之九〕
義天公名久豊、_{修理亮、任陸奥守、法名義天存忠憲燈院殿、}
齡岳公之次子也、稱次郎三郎、歷

所大權現 天滿大自在天神之御爵お可罷蒙候、

應永十九年壬辰春二月十五日、公使比志嶋河内守久

應永十八年十二月廿七日 久豊(花押)

範領舊邑油須木村、久範、範平之子也、
_{據義天公舊譜、比志嶋集人系圖、道}

鑑公賜比志島彥一油須木村、在二十一日、使野崎太郎領大隅第五卷建武四年、彥一名範平、

肝屬郡野崎三十町、據義天、三月二十日、使樺山教宗領

日向隈野鄉十町、大田鄉十町、薄壇、大隅上小河五町、

據島津支流系圖、郡村高辻嶺、庄內、二十四日、使羽島豐後

守領薩摩郡羽島村如故、據義天公舊譜、國使伊地知縫殿

介季豐領下大隅伊地知方如故、據義天公舊譜、秩父十郎兵衛

義不詳、豈謂伊地知氏所食地方歟、按公許伊地知縫殿介以下大隅之

地、在上卷應永九年、蓋至此年授之地、蓋至此年授之地、其地不審、

秋八月二十三日、使禰寢能登守清息領揖宿郡原田地八

町、清息、清平之弟也、據義天公舊譜、小松氏系圖、是月

後小松天皇讓位於、據義天公舊譜、小松氏系圖、是月

稱光天皇、據日本主、伊東氏世居日向州都於郡、與我北鄙

接壤、時有疆事、而公即位始、薩隅二州反者蜂起、

公自將兵擊之、辛壬癸甲、奔走不暇、伊東大和守間之、

義天公舊譜作伊東氏、山田聖榮自記作伊東和州、今從之、湯地嘉左衛

門家藏系圖、東光坊家藏伊東家略記、大和守祐安子曰大和守祐立、祐

立子曰大和守祐堯、公娶祐安之女、見上卷應永十七年、與祐立盟見下

二十五年、此云大和守、蓋祐安若祐立、改撰諸家系譜、伊東祐安子曰

大和守氏祐、氏祐子曰大和守祐武、九月二十五日、攻曾井

武子曰大和守祐堯、與伊東家略記等異、

某、某者、公之婿也、改撰諸家系譜、伊東藤內左衛門祐廣次子

祐朝後、島津系圖義天公女四人、皆不書所適、曾井某公之婿、但見於

此、別無所考、曾井合戰、舊譜無年、湯地嘉左衛門、壹岐彌四郎家藏

文書並云應永十九年、而東光坊家藏伊東家略記、以為十九年九月二十

五日事、今從之、曾井某結局不詳、曾井在高岡鄉東南四里許、今屬妖

國、北鄉知久、高木近江守匡家、佐多兵部太輔、樺山

氏、和田氏等、與穆佐、高城等來救之、高木近江守匡家、

聖榮自記並作高木左馬助、今從高木傳右衛門家藏系圖、久家之子也、

久家見上卷明德二年、此云樺山氏、據島津支流系圖、當是樺山

孝、行至源藤村而止、源藤村在高岡東南四里許、今屬延岡國、未成列、

伊東軍襲之、高木匡家戰死、佐多兵部大輔身被數創、麾下悉

死、會穆佐、高城來至、擊伊東軍、北鄉、樺山等得免、

公聞之、將兵擊伊東氏、行至穆佐、高城、而伊東氏引精

兵、夜襲西城、穆佐鄉高城西有古城址、相去半

町許、今稱上新城即西城遺墟云、蟻附陵城、

縱火燒之、末弘甲斐守、佐多若狹守、佐多讚岐守久信

應永十八年注、佐多美濃守等力戰、遂擊退之、於是北鄉

知久、樺山某言於、公曰、今者雖伊東軍已退、然西城

悉見燒夷、猝遇寇至、恐不可保、盍姑去此所、保一

方地以觀時之變乎、公從之、乃如末吉、於是川南川

北之地悉歸伊東氏、據義天公舊譜、山田聖榮自記、島津支流系

圖北鄉氏譜、伊東氏攻曾井、為是歲十九年

事、其說見上、公如穆佐、又如末吉、皆無年月、而伊東大和守祐立遺

公應永二十五年正月十四日盟書、閱義天公舊譜、山田聖榮自記等書、

義天公如末吉、以後無復與伊東氏合戰事、於是邇而考之、則公如穆佐

及末吉、蓋在二十五年之前十九年之後矣、川南、川北地名不詳、聞諸

高岡人、曰日向今有川南、川北之稱、自八重川今屬妖肥國、公之

穆佐也、行至三侯、甲高木匡家妻子、高木匡家死於源藤村

之戰、其家蓋在三侯、故公就、賜匡家次子二郎三郎鹿兒島永吉村十二町地、據義天公舊譜、山冬十一月二十四日、公賜樺山教宗盟書、據島津支初肝付氏攻鹿屋周防介於鹿屋城、公率吉田氏

大隅國守護代職之事

右、爲當家之志、本田相傳之所帶勿論也、然者於代々忠

「載本田信濃守元親譜」

・蒲生氏等救之、未至、城且陷、恒吉・百引・高限等衆救之、與肝付軍戰、公引大兵至市成、肝付軍解去、大始良城出銳兵二百擊敗之、公即位初出師有捷、喜可知也、乃賜市成領主山田久與太刀及谷山五箇別府村、遂略高限・鹿屋・大始良・下大隅等地而還、據義天公舊譜、山田聖榮自記、此事無年、據舊譜云、即位初至市成、則當是應永十八年十九年間事、然此戰也、肝付軍引去、鹿屋無恙、而下有公賜鹿屋周防入道書曰、他日得志、當授以本領鹿屋院、豈公選師之後、鹿屋終爲一肝屬氏、若他人所取耶、鹿屋鄉多古城、周防介所居不詳何處、二十五日、公賜鹿屋周防入道書曰、三州擾亂之日、嘉乃忠貞、他日得志、當授以本領鹿屋院、吾不食言、據義天公舊譜、晦日、公賜山田忠興盟書、據島津文流系圖、十二月五日、公使得丸氏領薩摩谷山郡十町・大隅小原村十町・西侯村五町之地、據義天公舊譜、使山下氏領西侯村楠原五町六段之地、同上、山下十郎兵衛系圖、大禰寢伊勢介雅義族、有山下氏、大始良鄉南村有楠原門、賜富山土佐入道・志志目某・大始良某・濱田某・横山某大禰寢院永吉、同上、十三日、許伊地知某以舊邑、曰、俟有關所、然後授之、同上、伊地知某、蓋藤殿介季興、舊邑不審、

大隅國

人々御中

節之家、無其隱處、限忠親、卒凶徒依不忠現、雖被悔返之、元親改非如根元奉公之上者、當職相續之事、自今以後不可有相違、早守先例、可致國中成敗條、仰定元親云々、各有此旨存知者也、仍執達如件、

應永十九年二月八日

陸奥守元久(花押)

「久豊公御譜中」

「正文有之」

「寫在藤野氏」

契約

一三ヶ國如何之樣雖轉變候、成水魚思、不他語、捨身命御、御用可被立事、守久ノ事、山城守忠明ノ事

一縱德仏・雍州之所存雖如何樣候、於于愚身者、諸事お

一味同心可申談事、

一自然和讒凶害仁、不慮之荒說申候時者、互以面可申披事、

若此条々僞申候者、

日本國大小神祇、以殊八幡三所大菩薩 天滿大自在天神

諏方上下大明神 稻荷五所大明神 春日四所大明神御爵
お可蒙候、

應永十九年二月十二日 泰雄(花押)

嶋津殿(久豊)

869 「正文在比志嶋監物」

嶋津御庄薩摩國之内滿家院油須木事、爲由緒上者、爲祈
所々宛行也、早任先例、可領智之狀如件、

應永十九年二月十五日 久豊(花押)

比志嶋河内守殿(義勝)

「久豊公御譜中ニ在リ」

870 「久豊公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋」

大隅國肝付内野崎三十町事、宛行所也、任先例、早可領
知狀如件、

應永十九年二月廿一日 久豊(花押)

野崎太郎殿

871 「串木野頂峯院文書」

冠嶽權現御供田

薩摩國薩摩郡之内勝目迫壹町如本返付申候了、

右、件在所者、早守先例、可有領知狀如件、

應永十九年二月廿八日 嶋津道世(花押)
「伊久公三男相馬山城守忠朝法名」

嶋津大城守「上書」山ノ願之

沙弥道世

「相馬氏山城守忠朝譜中ニ在リ」

872 「正文在樺山源三郎久清」

大隅國上小河内五町分、爲給分所宛行也、早任先例、可
領知之狀如件、

應永十九年三月廿日 久豊(花押)

嶋津安藝守殿(樺山教宗)

「樺山三代教宗譜中ニ在リ」

873 「公上」

嶋津御庄日向方隈野郷内十町・同國大田郷之内十町・同
國薄壇事、爲給分所宛行也、早任先例、可領知之狀如件、

應永十九年三月廿日 久豊(花押)

嶋津安藝守殿(樺山教宗)

「此書、樺山氏三代教宗譜中ニ在リ」

874

「正文在伊地知縫殿家」

大隅國下大隅之内伊地知方事、依爲由緒所宛行也、早任先例、可知行之狀如件、

應永十九年三月廿四日

久豊(花押)

伊地知縫殿允殿

「此二通、久豊公御譜中ニ在リ」

875

「正文在末吉羽島氏」

嶋津御庄薩摩方薩摩郡之内羽嶋之村當知行之事

右、所宛行也、早任先例、不可有領掌相違之狀如件、

應永十九年三月廿四日

久豊(花押)

羽嶋豊後守殿

876

「久豊公御譜中」

「正文在志布志衆鹿屋權左衛門」

重御了簡分共候、其意趣近日進使者可申談候、尚々此間

諸事御辛勞中、難申盡、恐悦無極之、これの事もそれ

の御辛勞には少もおとらすこそ存候へ、恐々謹言、

卯月廿一日九の時

久豊(花押)

北郷殿

樺山殿

山田殿

鹿屋殿

877

「正文在志布志大慈寺」

奉寄進

日向國救仁郷比志田村之内助則田四段卅事

右、於彼地者、大慈寺龍護庵所奉寄進也、任先例、可被

執務之狀如件、

應永拾九年卯月廿八日

越後守久臣(花押)

878

「正文在志布志鹿屋氏」

此境不審とも北郷殿方に委細申候、定而被聞召候哉、隨

而西村方へ久々音信不仕候程ニ狀遣候、わつらハしなか

らそれより御遣候へく候、返事ハいそぎ候ハす共、何に

ても候へ、可然候、恐々謹言、

六月十五日

久豊(花押)

鹿屋殿

「久豊公御譜中ニ在リ」

薩摩國給黎院内水田一町、奉寄進狀如件、

應永十九年六月廿六日 久豊(花押)

「久豊公御譜ニ在リ」

普門寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

應永十九年七月晦日 太政大臣義持判

明照西堂

「正文在蒲生衆根占掃部」

大隅國指宿之内原田八丁之事、爲由緒上者、爲祈所配行(宛)

所也、任早先例、可令領知狀如件、

應永十九年八月廿三日 久豊(花押)

祢寢能登守殿(清忠)

『鹿屋氏藏書』

(本文書ハ八九四号文書ト同文ニツキ省略ス)

山東之警衛漸緩、伊東氏窺其間隙、自川北率師旅發向

于曾井、構一陣攻責孔急也、曾井某者久豊之聲也、是

以不忍聞渠之急難、樺山氏・北郷氏・和田氏・高木氏

忽超山路、與穆佐・高城・白糸・細江・加江田之衆俱

向其地、欲爲後責、未成陣幕之際、敵軍攻入兵刃既接、

北郷氏・樺山氏自身碎手挑戰、家臣等戰死者多矣、高

木左馬助遂戰死矣、從兵死者數十人也、和田氏之一族

家臣戰死、只自身不死耳、佐多兵部太輔家臣等悉以戰

死、自身被數ヶ所之傷打伏其場、將斬頸之際、穆佐・

高城之衆重見救至、則不得斬獲、而敵兵去矣、味方携

來之、而加療養、不思議之存命非言之所可述、雖然一

身之五體不全、變父母之遺體也、

伊東大和守祐安譜云、應永十九年壬辰九月廿五日、

島津元久軍兵曾井玄動陣取大勢討取、則此合戰也、

一曾井合戰勝敗之樣達于鷹嶋、則久豊率薩隅之衆忽以進

發、先到三侯弔高木之戰死、不忍見妻子之不勝哀傷、

以二男爲猶子、名二郎三郎、賜鷹島之内永吉村十二町、

且昇感牘矣、其後到于山東、居于穆佐高城之際、伊東

氏撰精銳之士、窺得夜暗、密乘入于穆佐西城、于時末

弘甲斐守・佐多若狹守・同讚岐守・同美濃守・佐藤・

885 應永十九年壬辰

九月廿五日、高木左馬助匡家近江守とも云、山東曾井城にて
戰死、其他死傷するも多しとい

松本・瀬口・芝口・椎原之某等、各盡筋力防禦不緩、

り、へ

敵兵悉以拂落城下追退者也、其後樺山某・北郷某共議

間歳、樺山伊賀守與久穆佐高城に成將たる時き、伊東
衆來襲を抱きて父子戰死といふ、同六

曰、見時之宜則進、見時之難則退、勇士之常也、今度以

郎左衛門同しき時
戰死なり、

諸士之粉骨僅令居城堅固、懼佗日之有急難、長在當地

886 「越前島津氏譜中」

徒會伏敗、不如姑去他方俟時之宜、久豊許諾、以親子

忠秀十一代

共去穆佐移末吉、由是川北・川南悉爲伊東祐堯季安按、
應永十六年、而僅
四五歳祐安之誤、祐堯生手

三郎左衛門尉 周防守

關已來日州住居、其苗裔縣・岡富・財部等三輩、亦失

887 上卿 花山院大納言

川北・川南之領地、且亡一族家臣矣、

(義持)
(花押)

884 「北郷知久譜中」

888 「伊久一流系圖」

應永年中伊東大和守窺山東曾井、知久與樺山氏・和田氏

源忠秀

・高木氏同至源藤村、爲曾井將作後援、伊東不意襲來攻

應永十九年十一月十二日 宣旨

討甚急、知久力戰數箇所被疵、士卒鬪死者多、高木左馬

宣任左衛門少尉、

助墜命、樺山氏・和田・高木等士卒死者不知數、此由達

藏人頭左中辨藤原家俊奉

鹿兒島 太守久豊公、移駕于三俣、被助軍勞、

口 宣案

同年中、薩陽南方及伊集院山北同意、背 久豊公命、知

「右上書有之」

久與新納氏・樺山氏・飢肥・櫛間・肝屬・禰寢同至川邊

「正文在肝付伴兵衛」

有軍勞、其後薩州一向靜謐之刻、 久豊公命知久曰云、

267

宛行

日向國柏原之内蒲生方知行分三十町爲祈所、任先例、可有知行狀如件、

應永十九年十一月十三日 久世(花押)

波見殿

889 「正文在岸良清右衛門兼政」「伊集院頼久譜中に在リ」

日向國柏原之内伊作方知行分七町坪付有別紙爲祈所宛行者也、任先例、可有知行狀如件、

應永十九年十一月十五日 (伊集院頼久) 道應(花押)

岸浦殿

890 「正文在樺山家」

契約仕候、

右、元者貴方様ニ於愚身等者、乍憚成一味同心之思申候上者、不可有不忠之儀候、若讒言仁出來候て虚言申候時者、以面可落居仕候、此段爲申候ハ、

日本國中大小神祇之可能蒙候御爵、仍如件約狀、

(教悉) 樺山殿御内

應永十九年十一月廿三日

「長野政、中野政」
なかのゝ大和守

幸滿(花押)

891 「正文在樺山家」

契約

一右、意趣者、去春比如申談候、聊不可有違篇之事、

一雖不甲斐之候、御大事お身之大綱と存、身之大事お御

大綱と被思召、御用ニ立可申事、

一若又於于此内讒者出來、和讒凶害之時者、直ニ申披可

承事、

此条々爲申候者、

伊勢天照大神 正八幡三所大菩薩 熊野三所權現 諏方

上下大明神 天滿大自在天神御爵お可蒙候、

應永十九年霜月廿四日 (新納) 久臣(花押)

(知悉) 北郷殿

(教悉) 樺山殿

892 「正文在樺山源三郎久清」

右、意趣者、

一三ヶ國如何様ニ雖轉變、就是非申談候て、大綱をハ身

の大綱と存、不可有二心事、

一如此申談候上者、今程の習、若和讒凶害の仁出來候ハ

、其人を敵と存、一切無信用親子の可成思事、

一条ノ申定候上者、あるひハ御由緒、あるひハ於御本領

而可被付御力事、不可有疎略、於子孫も此衆中之一家

之所領之事、相互煩をなしなされず、本末他門の案に

不入して、一家繁昌候様ニ可申談事、

若此條ノ偽申候者、

日本國中之大小神祇、殊ハ

伊勢天照大神宮 熊野三所大權現 正八幡大菩薩 稻荷

五社大明神 諏方上下大明神御爵可罷蒙候、

應永十九年十一月廿四日 久豊(花押)

栴山安藝守殿

〔栴山氏三代教宗譜中ニ在リ〕

893 〔山田久興入道玄威譜中〕

〔寫在山田七郎右衛門久通〕

右、意趣者、

一三ヶ國如何様雖轉變、就是非申談、御大綱をハ存身の

大綱と、不可有二心事、

一如此申談候上者、今程の習、若和讒凶害の仁出來候者、

其人を敵と存、一切無信用可成親子之思事、

一条ノ申定候上者、本末他人案ニ不入して、一家繁昌候

様ニ可申談事、

若此條ノ偽申候者、

應永十九年十一月廿五日 久豊〔御判ナシ〕

894 三ヶ國錯乱時分、殊被致忠節間、達本望時者、本領鹿屋

院事、當給人等立替、一圓不可有子細、仍狀如件、

應永十九年十一月廿五日 久豊(花押)

鹿屋周防入道殿

895 〔在栴山源三郎久清〕

日向國於島津庄、闕所出來候者、次第仁可相計者也、任

先例、可被領掌之狀如件、

應永十九年霜月廿五日 久豊(花押)

栴山安藝守殿

〔栴山氏三代教宗譜中ニ在リ〕

896 〔正文在山田氏〕

右、意趣者、

一今度荒説一切信用不仕候事、

一此刻大綱候之處ニ、最前より取分御志なされ申候、生

涯悦喜、御方ハ又別而御大事あるへき事なく候間、其

御用にハ立申ゑす候哉、身のうんを開次第に力を付申、

子と孫とまで身の代ニ合力を申候て、本末堅大小事可

申談事、

一三ヶ國如何様ニ雖轉變、就是非申談、御大綱をハ存身

大綱、不可有二心事、

一如此申談候上者、今程習、若和讒凶害之仁出來候者、

其人を敵と存、一切無信用親子可成思事、

一条と申定候上者、本末他心案ニ不入して、一家繁昌様

ニ可申談事、

若此條と偽申候者、

伊勢天照大神宮 正八幡三所大菩薩 熊野三所大權現

諏方上下大明神 稻荷大明神御爵を可蒙候、

應永十九年十一月卅日 久豊(花押)

(久豊)
山田殿

「正文在帖佐衆川崎良眞房」

薩摩國谷山郡内十町、大隅國小原村内十町並西俣村内五

町之事、

右、爲給分所相計也、早任先例、可領知之狀如件、

應永十九年十二月五日

久豊(花押)

得丸殿

「久豊公御譜中」

「正文在帖佐衆富山清右衛門義清」

大隅國西俣村内楠原五町六段之事

右、爲給分所相計也、早任先例、可令領知之狀如件、

應永十九年十二月五日

久豊(花押)

山下殿

「久豊公御譜中」

「正文在肝付半兵衛兼屋家臣喜入衆志々目正兵衛義辰」

大隅國大祿寢院永吉之事

右、爲給分所相計也、早任先例、所領知之狀如件、

應永十九年十二月五日

久豊(花押)

富山土佐入道殿

志々目殿

大始良殿

濱田殿

五人共ニ祿獲一族也

横山殿

900 「新納近江守忠臣譜中」

應永十九年壬辰、入大崎城手裏也、

應永廿年癸巳、入松山城於手裏矣、

901 「在伊地知嫡家」

三ヶ國中在々所々伊地知先知行分事、闕所出來者、立替
所可宛行也、仍證狀如件、

應永十九年十二月十三日 久豊(花押)

伊地知殿

「久豊公御譜中ニ在リ」